

阪神・淡路大震災の記録
神戸薬科大学

学校法人 神戸薬科大学

阪神・淡路大震災の記録

神戸薬科大学

◆目 次

震災記録誌の発刊にあたって 理事長 金子 太郎	4
大震災の体験を後世に 学 長 伊 藤 允 好	5
I 阪神・淡路大震災と本学の被害	
阪神・淡路大震災	8
本学の被害	10
II 法人、大学の対応	17
III 各部署、研究室、委員会等の被害状況、復旧・復興への対応、今後への提言	
事務局（総務課、施設課、経理課、コンピュータ室、資料室開設準備室）	24
教務部・教務委員会	28
学生部・学生委員会	34
就職部・就職委員会	41
中央分析室（NMR室、MS室、元素分析室）・中央分析委員会	41
中央動物実験室（現在、動物実験施設）・中央動物実験室運営委員会（現在、動物実験施設運営委員会）	46
薬用植物園・薬用植物園運営委員会	46
実験室排水処理施設・排水対策委員会	49
アイソトープ実験施設・放射線安全管理委員会	49
図書館・図書館運営委員会	56
神戸薬科大学六甲山セミナーハウス	58
教養課程（数学研究室、社会第一研究室、社会第二研究室、英語第一研究室、 英語第二研究室、ドイツ語第一研究室、ドイツ語第二研究室）	59
製剤学研究室	62
薬剤学研究室	64
薬化学Ⅰ研究室	65
薬品分析学研究室	68
生薬化学研究室	69
薬化学Ⅱ研究室	71
薬品製造学研究室	73

一般化学研究室	75
薬品化学研究室	77
臨床化学研究室	79
機器分析学研究室	80
衛生化学研究室	81
微生物化学研究室	83
生化学研究室	84
薬理学研究室	85
生薬学研究室	86
放射薬品学研究室	89
新5号館建築委員会	90
広報委員会	90
卒後教育委員会	91
大学院委員会	91
神戸薬科大学親交会	92
神戸薬科大学桔梗育友会	92
神戸薬科大学同窓会	93
神戸薬科大学生活協同組合	94
IV 危機管理	101
V 関係資料	103
あとがき 第三期年史編集委員会	109

震災記録誌の発刊にあたって

理事長 金子 太郎

このたび、本学の阪神・淡路大震災記録誌を発刊するにあたり、あらためて平成7年1月に当地を襲った大震災によって、不運にも一瞬のうちに尊い命を落とされた数多くの方々のご冥福をお祈り申し上げますとともに、被災された本学学生、同窓会の皆様、さらに教職員ほか本学関係者とそのご家族に対し、心からお見舞いを申し上げます。

あの恐ろしい経験からはや2年半以上経ちましたが、この記録誌を読みますと今となっては「考えられないようなことが起こっていた」というのが実感であります。

幸い大学の立地がよかったせいか建物の倒壊などはなく、被害は少ない方でしたが、それでも壁のクラック、機器類や実験中の試料の転倒破損などによって、その後の教育研究や諸業務の一部及び大学財政等に傷あとを残したのも事実であります。こうしたなか、私が経験したり報告を受けたりした事柄の中で、有難く感謝したことが大きく3つばかりありました。

その第一は、近隣大学及び同窓会から受けた心暖まる強力な支援であります。当時、本学は2月初の一般入試を目前にしておりましたが、交通復旧の遅れに対処して、東においては急拠、京都薬科大学のご厚意で試験会場を使わせて頂き、西の広島会場においては地元同窓会員の皆様に入試の応援をお願いしました。この2つの大きなご厚意とご協力によって本学は当初どおりの日程で大きな混乱もなく入学試験を実施し、社会的な責任を果たすことができました。こうした近隣大学のご協力、同窓会からの支援を感謝しますとともに、平素における大学と社会との繋がり的重要性をますます実感したのであります。

つぎは、本学学生の救援活動であります。地震当日、岡本寮では男子学生が倒壊した近隣住宅から負傷した住民の方を救助したり、寮を避難所や物置、談話室などに開放したりして、積極的に人命救助に大奮闘してくれました。本学の前身である神戸女子薬専時代の昭和20年5月、神戸大空襲時に学生達が多数の負傷者の救助に目覚ましい活躍をし、感謝され、また社会の注目を集めました。今回の男子学生の活躍もそうした美しい伝統の賜物と大変嬉しく思いました。

第三は、震災後における教職員の一致協力した団結であります。学長の指揮のもと、一丸となって大学の危機に対処してくれましたが、通常組織の論理にこだわらず柔軟な状況判断で行動してくれたことが最善につながったものと、教職員の団結力に感銘を受け深く感謝するものであります。

このようにして、お陰をもちまして大学の諸活動も今は元に戻っておりますが、今後はこれらの経験を活かし、危機管理には全員が普段から工夫しておくとともに、人命の尊さと社会との関係の重要性を改めて認識し、人類社会の一層の発展のため教育研究に精励されることを期待します。

最後になりましたが、今回の本学の被災に際し何かとご支援を頂いた文部省を初め政府関係機関並びに地元自治体、及び全国の大学と関係諸団体各位に対し厚くお礼申し上げます。

大震災の体験を後世に

学長 伊藤 允 好

1995年1月17日未明のあの惨事から3年近くになるうとしている。しかしながら、今なお震災前の生活形態に戻ることができずにおられる方々があることを思うと、大震災がわれわれに与えた、物理的、精神的打撃がいかに大きかったかを改めて知らされる。

さて、この度、全学的な協力のもとに、第三期年史編集委員会によって、『阪神・淡路大震災の記録 神戸薬科大学』が完成した。ひとりでは到底語り尽すことができないこの大震災も、こうしてそれぞれのセクション等からの情報を集成することによって、実に多くのことが語られている。

まず、「阪神・淡路大震災と本学の被害」では、その概要が簡潔にまとめられている。

本学では、学生、職員にひとりの犠牲者もでなかった。当時の状況を考えると、奇跡にさえ思える。しかし、同窓生や学生・職員のご家族に亡くなられた方々があったのが悔やまれる。改めてご冥福をお祈りしたい。

また、本学が位置する神戸市東灘区は、犠牲者数や建物の倒壊件数も多く、国道43号線の上を走る、阪神高速道路神戸線の横倒し等、とりわけ被害が大きかった。しかし、六甲の麓にある本学一帯の地盤が強固であったためか、建物の倒壊を免れた。建物に限って言えば、内外壁のクラックやガラスの破損等に止まった。これも正に奇跡と言うほかない。このことが、その後の本学の早期復旧・復興に大きくプラスになったことは言うまでもない。

一方、建物の被害状況に比べ、各研究室や実習室内は惨憺たるものであった。薬科大学という本学の性格上、倒壊した機器類、落下等によって破損した備品類、床に流れ出した有機溶媒、そして研究試料等の被害は甚大であった。今も当時の光景が鮮明に思い出される。ただあのような状況下で、火災が発生しなかったことが何よりも救いであった。

次に「法人、大学の対応」では、地震発生当日からの動きを、日を追って知ることができる。多くの職員も被災したが、交通網が寸断状態の中、長時間かけて大学にたどり着き、連日、復旧と各種の対応に追われた。また、半月後に迫っていた入学試験の会場を、京都、広島、本学の3カ所にするをいち早く決めた。これは全学挙げての対応と、同窓生の支援、試験場として校舎等をお貸しいただいた近隣の大学等のご厚意とご協力に拠るところが大きく、日程を変更することもなく、無事に入学試験を終えることができた。

「各部署、研究室、委員会等の被害状況、復旧・復興への対応、今後への提言」では、学内全体における被害の詳細がわかるばかりでなく、被害における共通点も見いだすことができる。また、構造上のわずかな違いが、被害の有無、被害の程度差となってあらわれていることもわかる。さらに多くの教訓と貴重な課題も提供されている。その後の「危機管理」の場で、さらなる議論がなされることであろう。

未曾有の大震災を体験したわれわれにとって、後世にその記録を残すことは、非常に意義深いことであり、使命であると考え。この記録集が、その役目を担うことができれば幸いである。

I 阪神・淡路大震災と本学の被害

阪神・淡路大震災

平成7（1995）年1月17日、午前5時46分、兵庫県南部地方に、震度6（場所によっては震度7も判定）の大地震が発生した（兵庫県南部地震）。

震源地：淡路島北東沖約3kmの明石海峡。深さ14km。

各地の震度：6 神戸、洲本

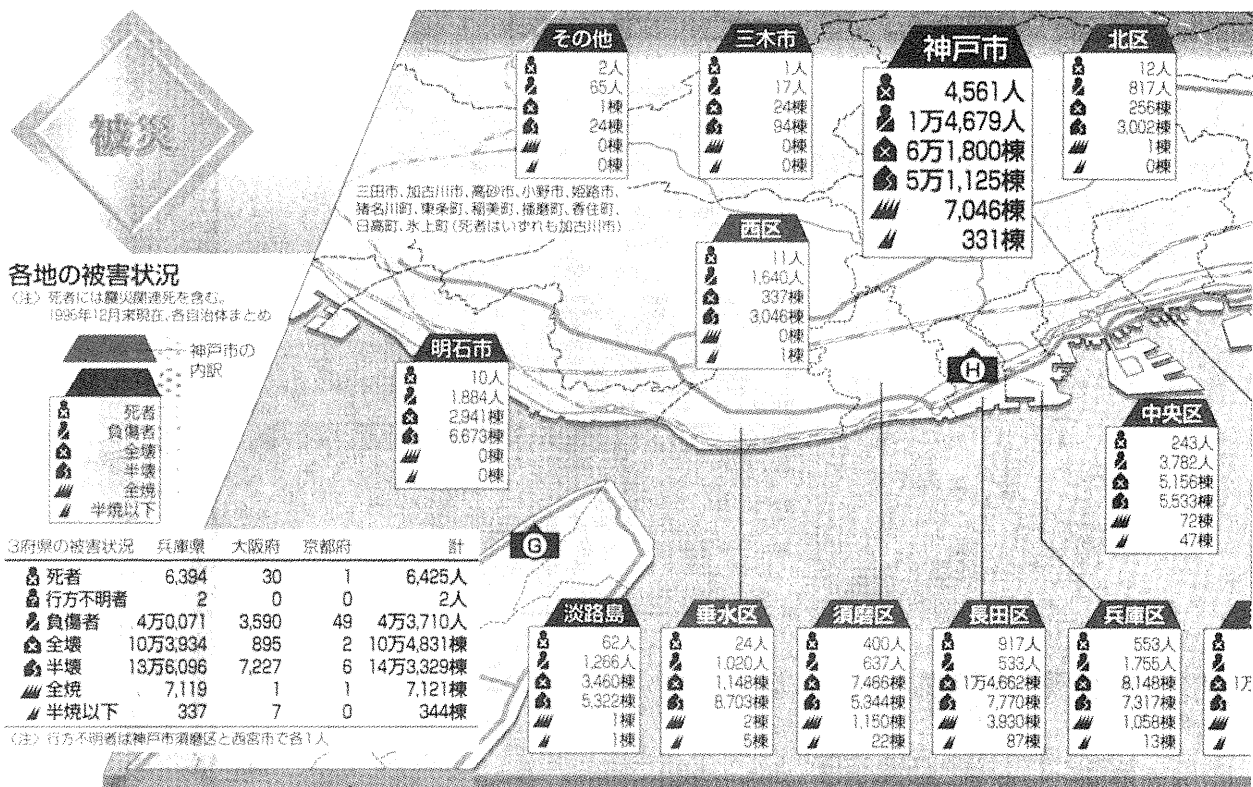
5 豊岡、京都、彦根

4 姫路、大阪、福井、四日市、高知、呉、境港など

3 以下は略

（気象庁の現地調査で、神戸市、芦屋市、西宮市、宝塚市、北淡町、一宮町、津名町における一部地域では、震度7と認定）

マグニチュード：7.2



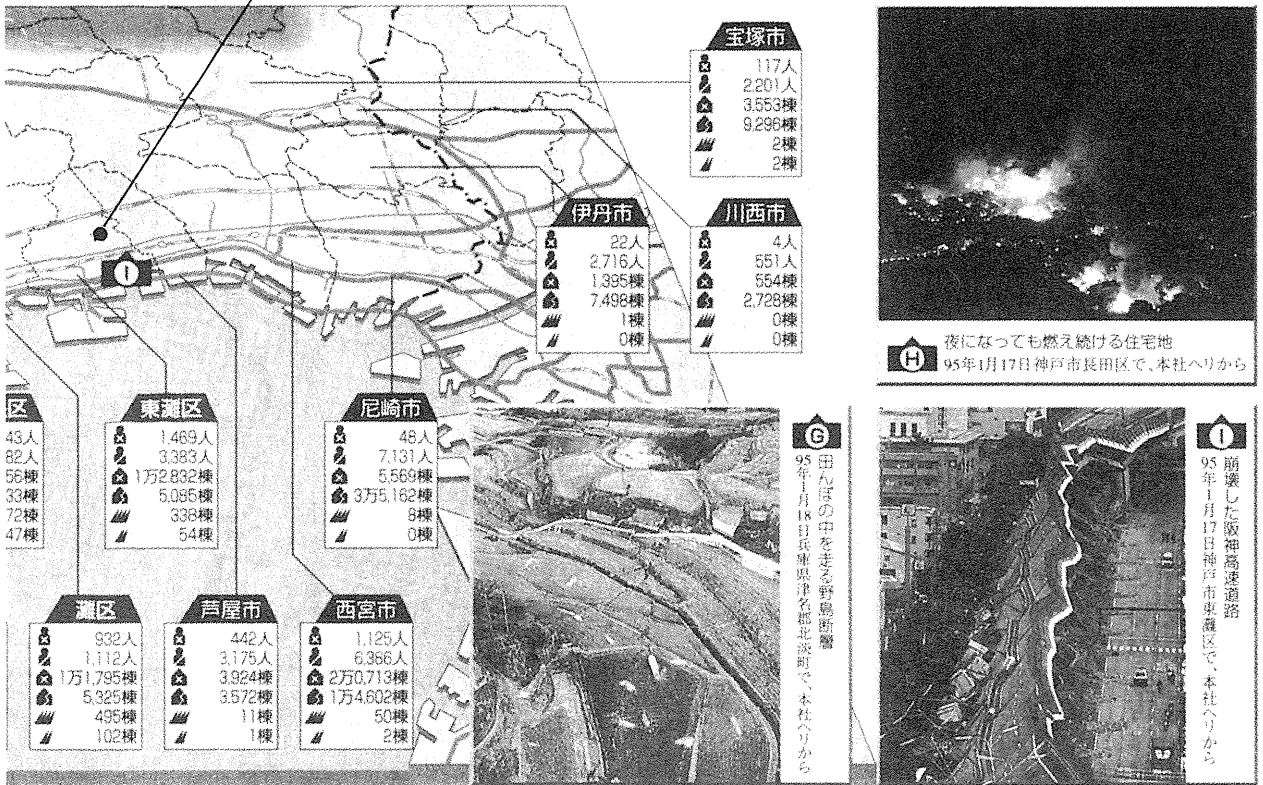
兵庫県南部地震の特徴： 内陸・都市直下型地震

比較的浅い部分で発生し、一群の活断層が横ずれを起こした横揺れと共に激しい縦揺れ

活断層の横ずれによる内陸・都市直下型地震で、6千人を超す犠牲者と、約25万5千棟を越す住宅が全半壊・全半焼した。

電気、水道、ガスの供給不能、交通、情報システムの寸断等、ライフラインを直撃し、被災者は、長期間不自由な生活を強いられた。また、多くの被災者が避難所生活を経験した。

神戸薬科大学



平成9年1月16日付 朝日新聞から
(地図上に、神戸薬科大学の所在地)
表示を加えた。

本学の被害

学生、職員に犠牲者はいなかった。しかし、同窓生5名、職員の家族に2名（内1名は同窓生）、学生の家族に4名。あわせて10名の方が逝去された。

物的被害については、次の表に示すとおりである。建物については、とりわけ被害が大きかった神戸市東灘区にあるにもかかわらず、倒壊はなく、内外壁のクラックやガラスの破損等に止まった。しかし、各研究室、実習室等では、多くの機器や備品類が倒壊、落下し、惨憺たる状態であった。それらの機器、備品類、研究試料等の被害は非常に大きかった。

兵庫県南部地震による被害

1. 建物・設備関係

建物別	建物の大きさ	被害状況（主だった被害）
1号館	地上5階地下1階建 7,838.7㎡	内外壁クラック 空調ダクト破損
2号館	3階建一部地下 2,064.04㎡	内外壁クラック 渡り廊下モルタル脱落
3号館	4階建一部地下 2,857.89㎡	内外壁クラック・柱クラック 給排水衛生設備破損
4号館	6階建 2,933.08㎡	内外壁クラック 水槽破損・空調用ポンプ破損
5号館	3階建 528.78㎡	内外壁クラック
6号館	地上1階地下1階建 1,756.69㎡	床クラック 外部階段石積み段差
7号館	4階建 1,240.65㎡	内外壁クラック
8号館	2階建 1,047.25㎡	内外壁クラック
寮1号館	4階建 2,449.08㎡	内外壁クラック
寮2号館 ききょう会館	5階建 2,404.07㎡	内外壁クラック
茶室	1階建 74.47㎡	内外壁脱落・柱傾く
岡本寮	3階建 439.06㎡	便器破損・給排水管破損 空調用室外機据付直し
六甲山 セミナーハウス	1階建 255.20㎡	内壁脱落
第2ポンプ室	給水設備	ポンプ故障

2. 土地

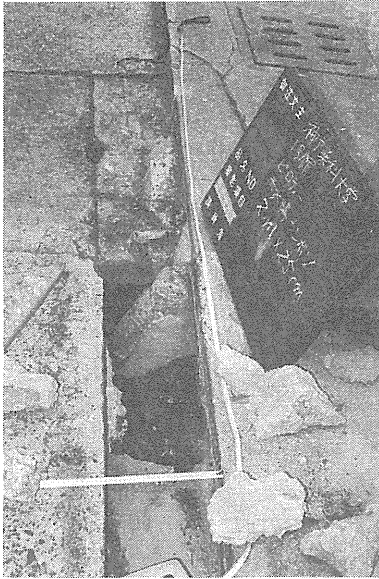
名称	工事区分
1号館南側雨水溝	土砂埋め戻し モルタル補修
1号館東側雨水溝	土砂埋め戻し モルタル補修
1号館南側外部	土砂埋め戻し モルタル補修
1号館北側歩道	モルタル補修
3号館東側犬走り	モルタル補修
5号館東側外部	土砂埋め戻し
6号館南側外部階段	石積み復旧

3. 工作物

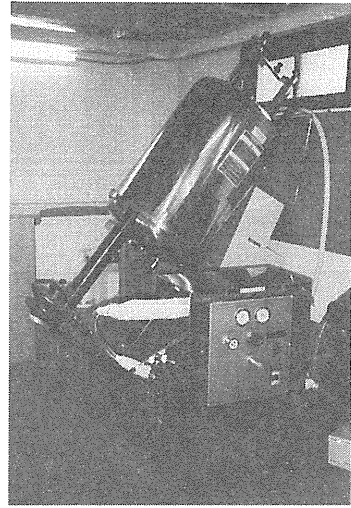
名 称	構造材質等	工事区分
焼却炉（5号館横）	レンガ	補修
焼却炉（運動場）	レンガ	補修
フェンス（5号館横）	スチール	補修
花壇面格子手摺（岡本寮）	コンクリート	補修

4. 機器・備品

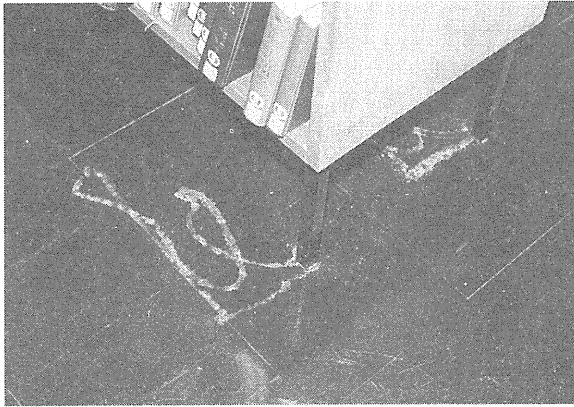
品 名	個数	品 名	個数
学生実習用直示天秤	23	実験台	2
研究用直示天秤	10	生薬標本ケース	2
高性能直示天秤	7	ビデオシステム	2
電子天秤	5	フーリエ変換赤外分光光度計	2
共鳴除振天秤台	1	高磁場超伝導フーリエ変換核磁気共鳴装置VXR-500	1
学生実習用顕微鏡	10	超音波洗浄機	1
高性能顕微鏡	4	超音波ピペット洗浄機	1
ディスカッション顕微鏡	1	泳動用低電圧電源	1
ロータリーエバポレーター	11	自記温度計	1
高速液体クロマトグラフ装置	6	融点測定装置	1
高速液体クロマトグラフ装置付属品	2	定電位電解装置	1
紫外線検出器	9	ボルタンメトリー装置	1
フォトダイオードアレイ検出器	2	示差走査熱量計	1
アンペロメトリック検出器	1	熱分析装置	1
偏光ゼーマン原子吸光光度計	1	示査熱天秤	1
高速カウンターカレントクロマトグラフ装置	1	溶出試験器	1
ガスクロマトグラフ質量分析装置	1	卓上型骨強度測定装置	1
ガスクロマトグラフ装置	1	骨塩量測定装置	1
ガスクロマトグラフ付属品	1	キャピラリー電気泳動装置	1
マイラボクロマトセット	1	ベーシックスケーラー	1
ラジエーションカウンター	5	電子線発生部	1
液体シンチレーション測定装置	1	水銀圧入式ボロシメーター	1
オートスチール	6	ネオクールアスピレーター	1
パーソナルコンピューター	5	フラクションコレクター	1
パーソナルコンピューター付属品（プリンター等）	4	高速真空凍結乾燥システム	1
電子タイプライター	1	低温サーキュレーター	1
CO ₂ インキュベーター	4	DNA増幅装置	1
ウォーターバスインキュベーター	1	DNA/RNA合成装置	1
pHメーター	3	脱気装置	1
超遠心機	2	保管庫	1
卓上遠心機	1	冷凍冷蔵庫	1
電導度計	2	薬用冷蔵ショーケース	1
粘度計	2	書架	1
ホモジナイザー	2	紙折機	1
乾燥機	2	高性能無菌実験台	1



雨水構陥没（1号館ピロティ）



倒れかかった500MHz核磁気共鳴装置
（1号館 NMR室）



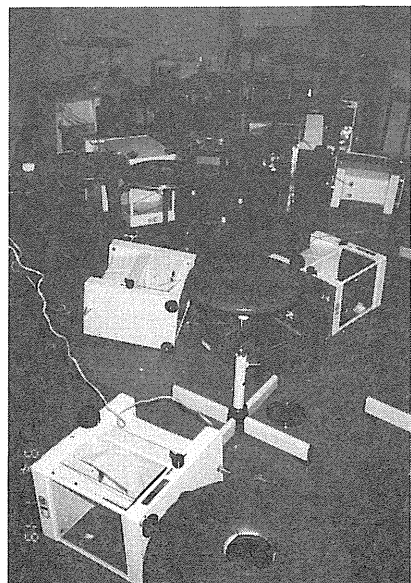
書架の移動による軌跡（1号館 図書館）



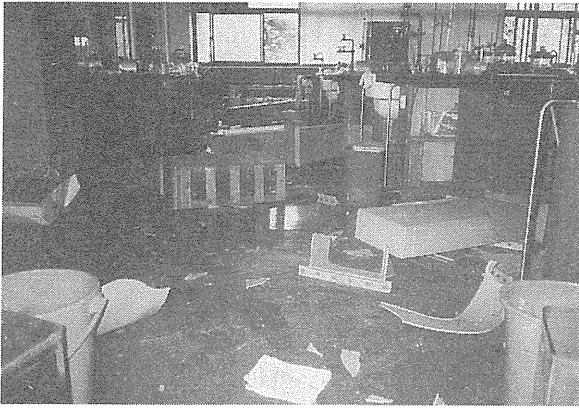
横倒しになった書架（1号館 図書館）



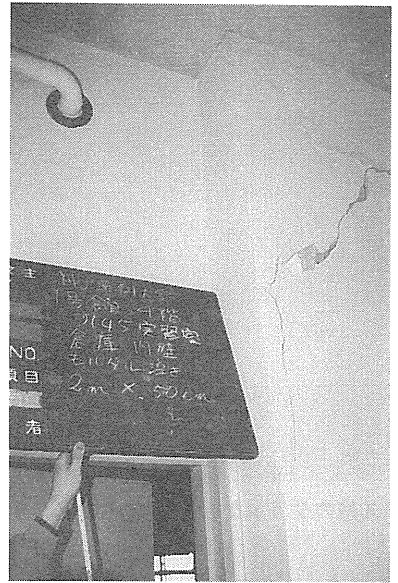
廊下の天井破損（1号館4階）



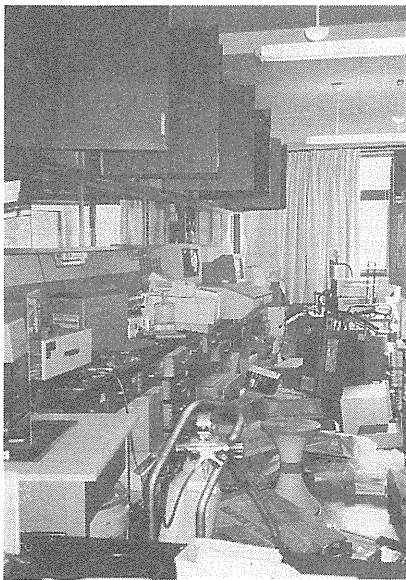
落下した直示天秤（1号館4階 天秤室）



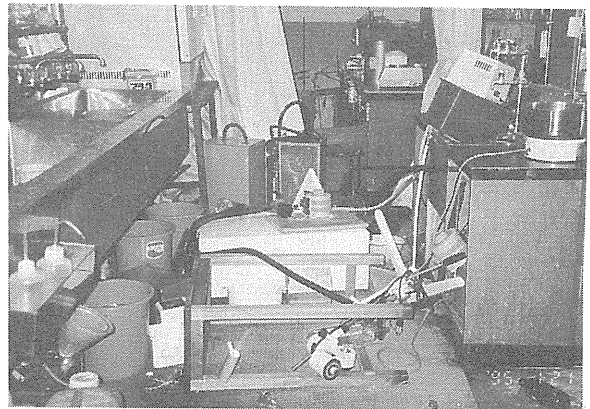
設備が破損した学生実習室内（1号館4階）



内壁のクラック
（1号館4階 学生実習室倉庫）



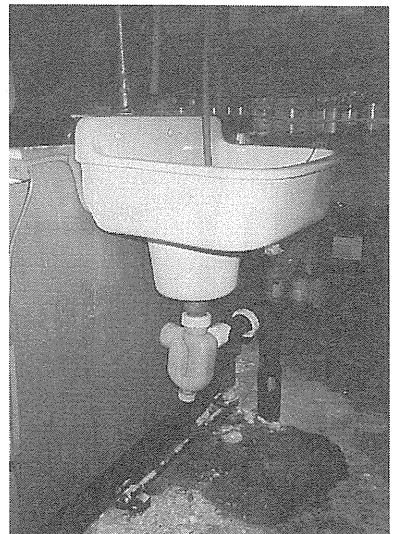
落下した備品等が散乱する実習・測定室内
（1号館5階）



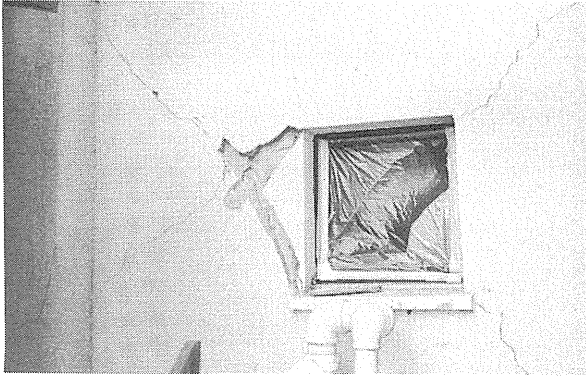
機器類が転倒した研究室内（1号館5階）



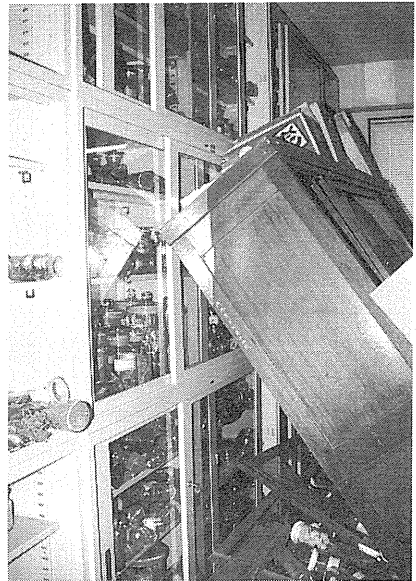
機器やポンペが落下、転倒した実習・測定室内（1号館5階）



排水トラップの破損（2号館1階 準備室）



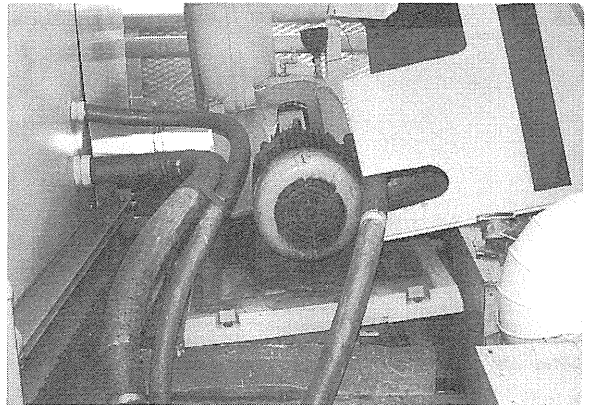
外壁のクラック（3号館）



破損した標本保管庫、標本瓶
（3号館3階 標本室）



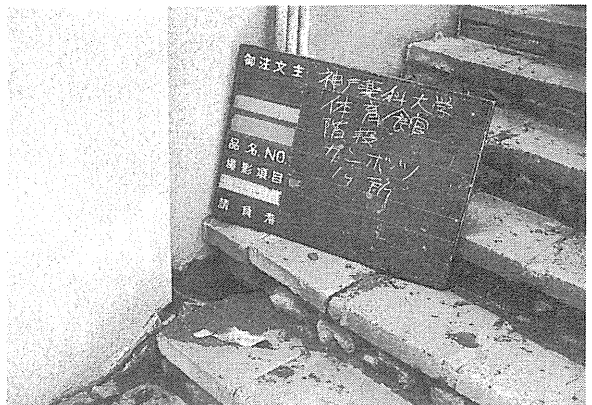
落下破損した顕微鏡（3号館3階 学生実習室）



冷暖房機用冷水ポンプ破損（4号館）



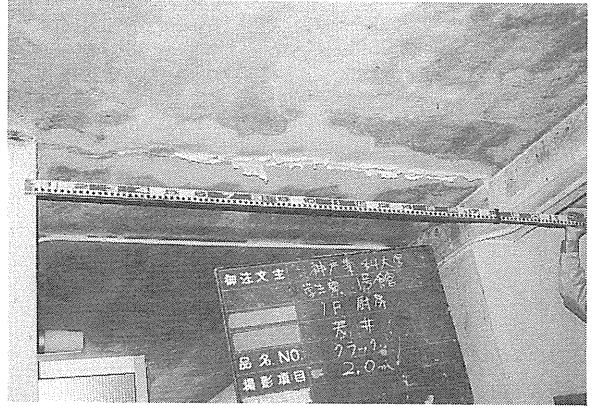
保管庫内の棚破損（旧5号館）



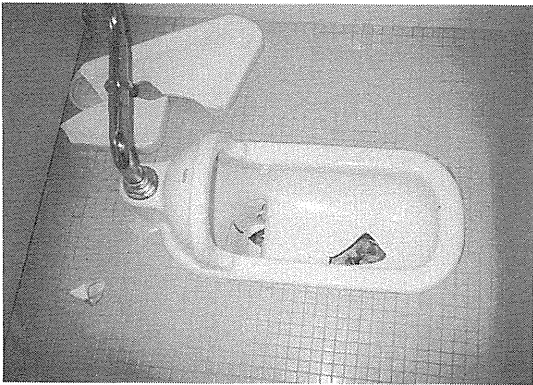
階段の陥没（体育館）



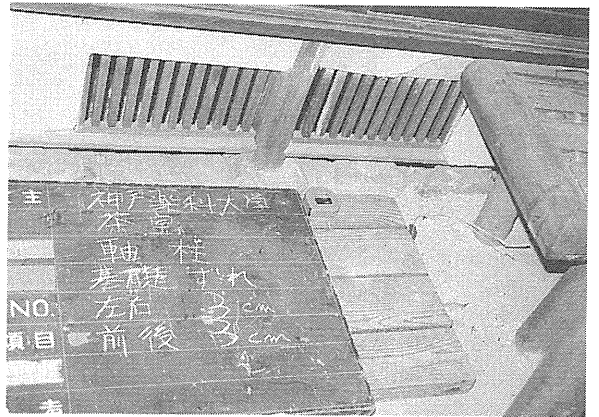
棚が後方へ倒れ、商品が落下した
生協店舗内（8号館2階）



厨房天井のクラック（寮1号館）



便器破損（岡本寮）



軸柱のずれ（茶室）



内壁の剝離落下（六甲山セミナーハウス）



ボンベ置場の破損（六甲山セミナーハウス）

Ⅱ 法人、大学の対応

法人、大学の対応

あの日のできごとはあまりにも衝撃的である。本学の立地条件により建物損壊が少なかったことが、不幸中の幸いであり、しかも現在本学が正常に活動している所以でもある。当時の異常及び混乱状態から容易に推察できるように、法人及び大学の対応に関する正確かつ細部にわたる記録は本書そのものである。

そこで、当時の記録をできるだけ忠実に残し、今後の災害対策に生かすために、当時の総務課を中心とした1月末までの日誌風記録を記述する。

地震発生日時：平成7年1月17日（火）午前5時46分

震源地：明石海峡

震度等：マグニチュード 7.2 震度6～7（神戸）

1月17日（火）地震発生日

- ・職員出勤者数名
- ・大学内各建物などの確認：建物の損壊は特に無し。研究室、事務局各部署内部備品などの損壊多数。
- ・在学生、入学試験出願者より問い合わせ電話多数。
- ・寮生の食料を生協を通じて非常食確保。飲料水として、各建物の水道蛇口から水を収集。
- ・近隣住民の被災者60名避難あり。体育館内の和室を提供。東灘区役所へ連絡。

1月18日（水）

- ・学内理事より連絡あり。翌日、対応について協議すること。
- ・職員出勤者数名。交通網マヒのため大多数は出勤できず。
- ・施設課：被害状況の写真撮影。
- ・在学生、入学試験出願者より問い合わせ電話多数。
- ・大多数の寮生を、自宅又は安全地の知人宅へ避難させる。残寮生は5名。
- ・出勤した職員が出勤できない職員へ安否の確認電話をいれる。被害に遭った職員多数判明。また、避難している者多数。安否不明者も若干名あり。
- ・避難住民より、救援物資の不足について不満の声あり。

1月19日（木）

- ・13:00より学内理事5名により、以下の対応（1～6）協議。

1. 一般入試関係

- 1) 入試期日（2月4日（土））：変更せず。
- 2) 出願締め切り日：1月26日（木）を1月28日（土）に2日延長（消印有効）。
- 3) 入試会場：代々木ゼミナール神戸校・駿台予備学校神戸校会場使用不能のため、交通事情を考慮し、代替場所を検討。受験生には希望校での受験を認める。

（案）イ 京都薬科大学（京都薬科大学の好意により）

ロ 河合塾広島校

ハ 本学

4) 被災学生に対する学費等の減免を検討する。

2. 在学生の取り扱い

1) 大学院生の論文口頭発表は中止し、論文により修了判定する。

2) 4年次生

(1) ゼミ発表中止する。

(2) 後期追再試験及び最終試験についてはレポート提出とする(追って通知)。

(3) 卒業判定会議は予定通り行う。

(4) 国家試験関係補講

東西2会場(大阪、姫路)で、2月中旬から実施予定。

3) 1～3年次生

(1) 2月18日(土)まで臨時休講。

(2) 2月20日(月)までに大学から通知する。

3. 報道機関へ情報提供

入試日時、会場、出願日の変更など。

4. 新聞広告による入試会場変更及び在学生への通知

1月22日(朝刊)朝日新聞、毎日新聞、読売新聞3紙へ

1月27日(朝刊)神戸新聞

5. 職員・在学生及び役員等関係者の安否確認

6. 職員へ電話連絡：1月23日(月)には全力をあげて出勤されたい。また、それ以前でも可能な範囲で各研究室の復元に当たること。

- 残寮生5名についても帰省するよう指導。
- 下宿生、自宅生中被害の大きかった地域の学生へ安否の確認電話。
- 厚生省より、大学のお見舞いと被害状況の問い合わせ電話あり。
 - 1) 薬剤師国家試験の兵庫試験場変更の示唆。
 - 2) 本学から、出願締切日について特別の配慮をしていただくよう依頼。
- 文部省より、大学入試の実施変更について問い合わせFAXあり。
- 本山中町方面で早朝火災発生。消防車が本学ベンゼン池より取水。
- 守衛帰宅(3日間連続勤務であった)。
- 汎用コンピュータ稼働確認。
- 施設関係点検。
- 各研究室より若干名、復元のため出勤。
- 在学生、入学試験出願者より問い合わせ電話多数。その他、関係機関からの問い合わせも多数。

1月20日（金）

- 学内理事4名による協議。
- 職員・在学生及び役員等関係者の安否確認。
- 入学試験に関する変更事項及び在学生に対する指示を報道機関へ告知。かつ、新聞社広告記載依頼。
- 入学試験関係
 - 京都会場打ち合わせ：松田教授、菅原教授
 - 広島会場打ち合わせ：伊藤教授
 - 同窓会広島支部から、応援の申し出電話あり。
- 出願者への会場変更案内文及び京都、広島会場地図作成。印刷3000枚。
- 事務職員の出勤が増える。事務局、各部署、学内各所の復元作業。
- 教員の出勤が増える。研究室復元がいくつか始まる。
- 経理課：1月分給与事務再開。
- 郵便着。願書約50通、開封作業。
- 教務部：薬剤師国家試験出願準備。
- 厚生省より連絡。第80回薬剤師国家試験の兵庫会場を武庫川女子大学に変更することが正式に決定。また、兵庫県南部地震による被災地の出願締切を1週間延長。
- 残寮生5名帰省。
- 学生部：学生安否状況確認作業継続。
- 図書館出勤、復元開始。
- 4年次生：国家試験の補講会場決定。
 - (大阪) 大阪薬業年金会館 — 2月13日、24日、27日、3月1日
 - (姫路) 姫路商工会議所 — 2月20日、24日、27日、3月1日

1月21日（土）

- 学内理事5名及び菅原教授により、京都薬科大学との打ち合わせ結果をもとにした入学試験実施計画検討。
- 事務局出勤者により、入学試験会場変更案内文の送付準備。
- 教務部：願書（前日分）入力、臨床検査技師国家試験出願準備。
- 厚生省：薬剤師国家試験兵庫試験場を武庫川女子大学に変更する旨の新聞発表。
- 学生部：学生安否状況確認作業継続。
- 就職部出勤、復元開始。
- 東灘郵便局内の混乱と道路事情の悪化のため、郵便発送は本日から3月31日まですべて宝塚郵便局から行った。

1月23日（月）

- 学長より全職員に出勤要請があったため、出勤者多数。
 - 学長から出勤者に対し、経過報告と入試業務への教育職員の全面協力要請があった。また、災害復旧計画案が提示された。
- 願書約700通到着。数日分がまとめて到着した模様。
- 教育職員、事務職員等が一体となって入試業務にとりかかる。

- 教務部：4年次生後期採点処理及びレポート課題集作成業務。
- 臨床検査技師国家試験願書及び薬剤師国家試験願書の発送を、郵便事情悪化のため、翌朝大阪中央郵便局から行った。
- 薬剤師国家試験の会場変更に伴い、受験地の変更希望問い合わせが相次ぐ。
- 4年次生の薬剤師国家試験関連教科書の入手について生協に打診。

1月24日（火）

- 前日に引き続き教育職員、事務職員等が共同で入試作業。
- 入学試験京都会場との打ち合わせ。
- 前日到着分の願書約700通、コンピュータへの入力終了。
- 4年次生への連絡：卒業式は3月17日に挙行する。

1月25日（水）

- 教務部と学内理事の入試事務打ち合わせ。
- 前日に引き続き教育職員、事務職員等が共同で入試作業。
- 入学試験場掲示図、試験場整理券、白紙の番号札、その他作成。
- 出願者の漢字氏名入力。
- 施設課が中心となり研究室復元作業。

1月26日（木）

- 入学試験各種掲示、試験場行袋作成。
- 出願者漢字氏名入力、前日出願分まで終了。
- 4年次生用レポート課題集ワープロ打ち。

1月31日（火）

- 学内理事会：学費等の減免について協議。
 新入生・在学生（大学院生含む）被害状況に応じ考慮。

Ⅲ 各部署、研究室、委員会等の 被害状況、復旧・復興への対応、 今後への提言

事務局

総務課、施設課、経理課、コンピュータ室

1. 状況

平成7年1月17日早朝、震災が発生、当日出勤できたのは大学全体で学長を始め数名の職員であった。他の職員は、自宅の損壊、交通遮断等のため出勤できなかった。

出勤した職員でまず取りかかったことは①被害状況調査②職員の安否確認③在学生からの後期の講義と定期試験に関する問い合わせの対応④受験生からの願書（請求と発送）と入学試験に関する問い合わせの対応、であった。事務局は、総務課、施設課、経理課等から成るが、非常事態への対応であったため、課の業務の垣根にこだわらず、学長指示のもと、出勤可能者が適宜分担して各自率先し自発的に作業に当たっていった。

被害状況の把握については、(a)火災発生の有無(b)建物の被害状況(c)建物の内部状況の点検(d)大型機器・設備等の点検等を中心に調査した。

その結果、(a)については、幸い火災の発生は免れた。

(b)については、木造茶室が半壊したものの他の建物に大きな被害はなく、窓ガラスの破損、壁面のクラック程度であった。

(c)については、特に各研究室内は機器・薬品棚が倒れ、薬品等が散乱するなど足の踏場もない状況となっており、化学反応から悪臭が立ちこめた研究室も数多くあった。

(d)については、1号館超伝導フーリエ変換核磁気共鳴装置VXR-500、4号館の受水槽、第2ポンプ室モーター、岡本寮の給排水及び空調機が破損していた。

百数十名の職員の安否確認については、電話回線の大混乱等もあり、普段なら極めて簡単な作業がことのほか難航したものの、全員無事であることが確認された。

在学生からの後期の講義と定期試験に関する問い合わせ並びに受験生からの願書（請求と発送）と入学試験に関する問い合わせの対応については、できるだけ早い時期に公表する旨の対応にとどまったが、当時としてはやむを得ないことであった。

2. 対応

(1) 災害復旧

震災2日目からは交通網遮断の中を車や自転車、徒歩により長時間かけて出勤してきた職員が増え、災害復旧に全学をあげて取り組むことができた。入学試験の時期と重なっていたが、災害復旧については学長の指示のもと、授業再開を第一とし、実習室、講義室等教育部門の復旧を最優先に行った。次に研究部門、管理部門の順で復旧を行うことが決定された。

災害復旧作業についてはこれらの優先順位に従って、現状把握と復旧計画の作成を行う傍ら、実際の復旧作業を進めていった。すべての作業は復旧前の原状写真を撮った後に行うこととしたが、こうした写真は当局への説明のほか、後日の記録作成や書類作成に大いに役立った。復旧については職員のほか、平素出入りの関係業者の協力が意外に大きく寄与したが、日常にお

ける大学との信頼関係の賜物であった。なお、全復旧事業額は、後に掲げる別表のとおりである。

(2) 入学試験

一方、全体の状況判断の中で入学試験については予定通り2月4日に実施することが決定された。出勤職員は、願書処理と入学試験各種準備に分かれ、各部署の事務職員はもとより教員も加わった共同作業により、無事事務処理対応をすることができた。ただ、入学試験の会場については、本学までの交通手段の困難さが問題となり、急遽、京都（京都薬科大学）と広島（河合塾広島校）の会場を両校の好意により設けることになった。京都会場では、京都薬科大学の教職員、広島会場では本学の同窓会並びに広島支部の同窓生の協力を得て、入学試験を実施したが、この試験会場については、朝日新聞、毎日新聞、読売新聞、神戸新聞の4紙の朝刊に掲載し周知徹底をはかった。

在学生からの後期の講義と定期試験に関する問い合わせについても上述の4紙朝刊に、①講義はすべて休講とする②定期試験については全科目をレポート提出とする、旨の通知を掲載した。

(3) 地元への援助

他方、地元住民に対しては避難場所として体育館を提供し、1月17日から2月15日までの30日間、延べ843名の地元住民が本学体育館を生活拠点としたが、この間職員は水や風呂の提供などできる限りの生活支援活動を行った。また、1月19日頃大学から南約1kmに位置する本山中町で火災が発生し、本学はベンゼン池の水を提供して消火に協力した。

(4) 対官庁

震災後、文部省や兵庫県をはじめ所管官庁からの調査やヒアリングが相次いたが、これらについては事務局が適宜対応した。国の支援策が決まってからは、施設課と経理課が中心となって「激震災害に対処するための特別の財政援助等に関する法律」に基づき、補助金申請のための被害現場写真、工事見積書、請求書、領収書、登記簿謄本、校舎校地の配置図、建物平面図等の資料の整備・作成を行い復旧事業計画書を完成させた。この計画書は、その後、文部省、大蔵省、兵庫県による事前調査、現地調査を経て、兵庫県総務部教育課を通じ文部省に提出した。

(5) コンピュータ

本学の日常の事務処理にはコンピュータが極めて重要な役割を果たしており、コンピュータなしでは何事も進まないほどになっているが、今回の震災に際しては、ホストコンピュータと各端末機の被害調査の結果、幸いにも異常のないことが確認された。しかしながら今後のことも考慮し、当面は端末機のバックアップを光磁気ディスク（MO）に取れる態勢を作るとしても、長期的には、ホストコンピュータのバックアップデータの外部保管を考える必要があると思われる。

3. 今後への提言

このたびの震災において研究室の薬品棚、図書館の書架、書類保管庫等に甚大な被害があった。これは阪神間に大きな地震がないものと考え、転倒防止対策をしていなかったことが原因である。今後このようなことがないように今回の復旧時に、各書棚等に転倒防止金具を取り付け、また、各研究室には危険物薬品の保管用に固定式ボトルキャビネットを設置したが、地震等を念頭に置いた日頃の安全点検がいかに重要かを再認識した。今後も人的被害を防ぐ視点に最重点を置き、建物、設備の早めの診断、早めの措置による安全管理の徹底及び危険物や毒・劇物薬品の安全保管に一段の留意をしていくことが肝要である。

(別 表)

復旧事業計画総括表

(単位：千円)

	全事業額
土 地	1,155
工作物	428
建 物	216,735
(1号館)	(6,335)
(2号館)	(838)
(3号館)	(4,418)
(4号館)	(8,946)
(5号館)	(1,225)
(6号館)	(149,131)
(7号館)	(54)
(8号館)	(19,440)
(寮1号館)	(1,999)
(寮2号館)	(152)
(茶室)	(13,796)
(渡り廊下-2~3号館)	(629)
(渡り廊下-3~4号館)	(19)
(第2ポンプ室)	(71)
(六甲山セミナーハウス)	(2,730)
(岡本寮)	(2,052)
事業計画追加塗装	(2,600)
耐震作業費	(2,300)
設 備	45,649
(教育用機器)	(649)
(研究用機器)	(26,985)
(実習用機器)	(10,315)
(耐震対策薬品保管)	(7,700)
合 計	263,967

注) ()内の数字は内数、千円未満は四捨五入。

資料室開設準備室

1. 被害状況

年史資料室には、東西両壁面ほぼいっばいに資料庫が設置されているが、その高さは天井まであって、固定されているため、倒れることはなかった。また、資料庫の各開き戸は、いずれも施錠ができるので、揺れによって中の資料が飛び出すこともなかった。資料庫内で、多少、書類が動いた程度で済んだ。

なお、施設課と合同で、平成6年8月から12月にかけて調査を実施した学内の所蔵美術品、さらに、平成7年1月（震災前）に調査を実施した学内の考古学的遺跡・遺物については、掲げられていた額の落下や、展示物に損傷等が生じた。

2. 復旧・復興への対応

室内の被害状況が前述のとおりであったため、一部書類等の整理、整頓で止まることができた。そのため、他部署への応援というかたちで復旧作業に当たった。

また、美術品や考古学的遺物については、その被害の有無などの確認を行った。さらに、展示ケース内で動いたり、破損した考古学的遺物については、偶然にも震災直前の調査の際に撮影しておいた展示構成がわかる写真をもとにして、展示の復元を行うことができた。

3. 今後への提言

古い書類も多くある当室で、被害が最小限に止まったのは、両壁面の資料庫が倒れなかったことに尽きる。

当室について言えば、今後とも次のような点に留意すべきと考える。

- ①資料庫等の固定。
- ②重量の大きい物は、高い位置に置かない。
- ③資料一覧等によって、資料の保管状態がよく把握できていること。

教務部・教務委員会

教務部

1. 被害状況

(1) 教務部

- ① 複写機ソータ破損、本体要点検（紙づまり状態）
- ② 倉庫内の蛍光灯脱落
- ③ 照明スイッチ陥没
- ④ 両開き書架類（ロッカー）の転倒による変形

(2) 印刷室

- ① 丁合機 激突（壁）による故障
- ② 紙折機 部品の破損

2. 復旧・復興への対応

(1) 薬剤師国家試験の出願及び試験場関係について

厚生省から1月20日付で震災地域関係の出願受付期間を1月31日まで1週間延期することと、兵庫県内の受験会場を本学から武庫川女子大学に変更する旨の発表があった。

出願受付期間	平成7年1月10～24日	⇒	1月10～1月31日
試験の施行日	平成7年4月2・3日	⇒	変更なし

1月21日に出願書類の袋詰めを行い、1月24日に西宮郵便局から出願書類を発送した。また、災害による交通機関の混乱、実家への避難等の事情により、学生（29名）から受験地を変更したい旨の申し出があり、1月30日付で厚生省に申請した。

(2) 臨床検査技師国家試験の出願について

1月21日に書類の袋詰めを行い、1月24日に西宮郵便局から出願書類を発送した。

出願受付期間	平成7年1月12～27日
試験の施行日	平成7年3月12日

(3) 春期見学実習

学生（3年次生）に対し2月17日付・担当者名の通知により、見学実習の参加確認を行い、病院へは電話による受入確認をした。そのうち1病院より、震災の影響で受入が不可能との連絡が入り、実習予定であった学生は、病院実習へ廻すこととした。また、見学実習の期間については当初の予定どおり2月末日から4月5日の期間のうち1～2週間とした。

3. 今後への提言

(1) 危機管理システムの確立

① 初動段階での人員の確保

初動段階での的確な情報の収集や、適切な救急措置を取ることの重要性から、震度5以上の場合は全員の出勤体制を取るとか、あるいは大学中心に5～10キロ以内に住んでいる教職員の名簿を整備し、該当者に初動段階での対応に応じてもらう行動基準を定める必要がある。

② いかにトップに情報を集められるか

危機管理はトップマスターである以上、すべての危機情報が至急トップに入るシステムを確立しておく必要がある。日ごろから「危機情報・マイナス情報こそ知りたい情報だ」このことを全教職員に常に徹底するべきである。災害が発生したら全教職員が当事者になり対応しなければならぬのは当然のこととして、危機対応の判断や方向づけなどの最終判断はトップが下すことになる。

③ 災害対策本部の設置

危機管理システムの司令塔ともいうべき対策本部の設置が重要である。設置場所としては、安全性、利便性を兼ねた場所に設置することが必要である。また学内外からのひっきりなしの問い合わせがあることと、緊急の対応がある為、管理棟に設置することが最も必要である。そして、事務局等に可能な限り直通電話を移設する必要がある。

主な緊急対応として学生の安否確認、教職員の安否確認、学生の成績・試験・卒業などの教務関係、入試対策関係、被害の復旧対策、通勤対策等が考えられる。また全ての対応に通じることとして、情報の収集が最も重要なことと考えられる。

④ トップがいない場合の非常時における権限委譲

危機管理については最高責任者を特定しておく必要がある。防災組織上において学長がトップに付くことになるが、災害発生時にトップである学長が出張等で不在の場合、代行者、代理者を定めておきバックアップ体制を整備しておく必要がある。

(2) 耐震基準に合致していない建物等の補強

耐震基準に合致していない校舎等の建物を建築年代を再調査して、設計図による建物の弱体箇所、劣化箇所などを特定し、補強工事をするのが危険防止の上で必要と思われる。

(3) 授業中の避難経路、訓練

災害が昼間に起きるのか、夜間起きるのか、あるいは早朝なのか、深夜なのかという時間帯によって対応が変わってくるが、もし授業中に発生した場合、非常放送、避難誘導、救護など対応が多岐にわたっており、避難誘導一つとっても1号館（講義室、実習室）、2号館（実習室）、3号館（講義室、実習室）、4号館（講義室）、5号館（講義室）と多くの校舎があり、1,300名の学生を如何に安全な場所に誘導するかが問題になる。

本学では、学生寮を対象とした避難誘導訓練（火災を想定）が毎年行われているが、災害

に対する全学的な訓練を是非とも行う必要がある。また現場に即した緊急行動マニュアルの作成が必要と思われる。

(4) 緊急連絡網の整備

地震発生後、初動段階での人員の確保が最も重要になり、このため緊急連絡網の整備が絶対必要になる。教職員の安否確認には相当な時間と労力がかかり、次の対応に手間がかかる事になる。

緊急連絡網には次のような方法が考えられる。

- ① この度の震災では、電話回線の寸断、混乱等により連絡が取れない地域がかなりあったので、教職員の住居している地域ごとに連絡網を作る必要がある。地域ごとに中心者を決め、中心者は学長及び事務局長に報告する。
- ② 従来の方法として自分の状況を上司に報告し、部署長はまとめて学長及び事務局長に報告する。

(5) 学生への伝達方法の整備（クラス名簿等）

① 安否確認

この度の震災では、初動段階で出勤できた教職員で、相当な時間と労力をもって1,300名もの学生の安否の確認を行った。従って緊急クラス連絡網が絶対に必要になる。連絡網の作成に際しては次のような方法が考えられる。

各クラスをグループ（地域別）別に編成し、そのグループにリーダーを置きそのリーダーがグループ全体を把握し担任及び大学の担当者に報告してもらう。またクラブごと、研究室のゼミごとに、二重三重に把握出来るようにしておくことが必要であると思われる。しかし、教職員の連絡網とちがい、学生はあくまでも受け身である為、グループ別の連絡網を使うにしても、学生間のしっかりとしたネットワークが必要である。

② 学生全体への伝達

前項で述べたように学生間のネットワークがあれば、学生全体への伝達も容易に出来ることになる。その他にも、最近設置したテレホンサービスも一方的ではあるが確実な手段となる。また資料の送付等になると郵送という方法になるが、この度の震災では区内の郵便局が機能していない状態であったので、他地域からの郵送になったことも考慮に入れる必要がある。

新聞で得た情報によると、インターネットで震災の情報を刻々と発信していた市職員がいた。本学でも近い将来、電子メール等で安否確認等ができるようになることを願っている。

以上のように、日本私立大学協会事務局長相当者研修会 甲南女子大学 長坂義雄事務局長による「危機管理について、一阪神大震災の体験をとおして」の報告書を読んで感じたことをまとめた。

教務委員会

1. 被害状況

(1) 講義室

1、3ならびに4号館内の講義室の大部分に異常は認められなかった。

被害はK330で換気ロアタッチメント脱落、クーラーフィルター枠脱落。K341前のガラス窓破損。K441、K442のビデオ装置が転倒していた。

(2) 実習室

実習室名	被害箇所
J115	実験台の変形（1ヶ所）、棚の落下による破損
J125	整理棚のガラス戸破損
J135	実習室奥の倉庫半焼（床が焦げている、天井の剥れあり）、ダクトの一部破損、コンセント1ヶ所破損
J145	保管棚の破損、ドラフトチャンバーの破損、直示天秤・精製水製造装置の一部破損
J235	原子吸光実験台の傾き（1ヶ所）
J325	実験台（3台）が移動している、壁に16ヶ所亀裂、流し台の破損（数ヶ所に亀裂）
J335	標本棚の破損、標本の破損多数、本棚破損、床の破損（2ヶ所）

(3) コンピュータ演習室（1号館2階）

- ① 空調設備のスイッチ関係
- ② 照明2台破損
- ③ TVフィルター行方不明
- ④ パソコン本体関係 要点検

(4) 体育館

特に被害はなかった。

2. 復旧・復興への対応

(1) 緊急処置のアナウンス

① 学部生全体へのアナウンス

1月19日、学長・学内理事で構成する対策会議において以下の事項を決定し、4年次生及び1～3年次生に対する緊急処置の事項を新聞広告で発表した。また、大学に問い合わせをしてきた学生にもこのことを伝えた。

② 大学院生へのアナウンス

震災後、院生から各講座の指導教員のもとへ、大学の復興状況についての問い合わせが相次いたが、1月28日付・大学院幹事名で以下の事項を郵送で通知した。

a 修士課程2年次生

- ・1月21・28日（土）の論文発表会は中止する
- ・作成論文を主査・副査に提出すること
- ・論文により修了判定をする

b 修士課程1年次生

- ・2月18日まで休講とし、始業日は4月6日とする
- ・修士課程2年次生の論文発表会は中止する

(2) 定期・追再・最終試験

① 4年次生

1月9日から1月13日まで施行された3年後期再試験・4年後期定期試験の採点結果は各教科担当教員より郵送または自宅まで受け取りに何う等の方法により大学に集め採点処理を行った。各学生に1月28日付・教務部長名で個人成績表を郵送し、後期追再試験・最終試験の受験を判断させ、レポートの提出による再試験・最終試験とした。またレポート課題は、個人成績表とともに郵送した。

② 1～3年次生

各学年の後期定期試験をレポートの提出による試験とした。また各学生に2月13日付・教務部長名でレポート課題とともに前期分までの個人成績表を郵送した。追再試験は本来ならば定期試験の採点結果によって該当者だけが受験すれば良いのであるが、郵便の混乱状態を考慮すると採点票の回収や該当者への通知が時間的に不可能であると判断し、全員に定期試験と追再試験のレポートを同時に提出させることにした。

(3) 入学試験

1月19日、学長・学内理事で構成する対策会議において以下の事項を決定し入学試験を実施した。

① 願書受付

郵便の混乱状況も考え受付期間を1月28日まで2日間延長し、また当日分としても会場で願書の受付をすることとした。

② 試験場

当初は本学と代々木ゼミナール神戸校・駿台予備学校神戸校で実施する予定であったが、交通機関の寸断と混乱状況の中で地元の受験生のために本学を予定どおり受験会場（代々木ゼミナール・駿台予備学校は使用不能）とし、幸いにも京都薬科大学のご厚意により東の会場として使用させていただくことができた。また西の会場として河合塾広島校を確保することができた。そして広島会場では、同窓会員の応援をいただくことができ無事実施できた。各試験場で受付を行い、どこで受験しても良いこととした。座席

も指定しなかったが大きな混乱はなかった。

③ 採点

2月4日入学試験の終了後、大阪市内のホテルを採点会場とし本学・京都薬科大学・河合塾（広島校）より答案用紙を結集させ、2月5・6日の2日間で採点を行った。

④ その他

すでに受験票の発送を終えた受験生には1月20日付・教務部長名で受験会場の変更を通知した。また新聞広告でも発表した。

(4) 国家試験補講

- ① 1月24日付・教務部長名で以下の事項を郵送で通知した。
国家試験補講の日程を縮小して2会場で行う。

大阪薬業年金会館	2月13・24・27日, 3月1日
姫路商工会議所	2月20・24・27日, 3月1日

- ② 1月24日付・国試関連教科担当教員名で以下の事項を郵送で通知した。
- a 国試補講の参加の有無
 - b 会場の選択
 - c 教科書及びプリント類が手許にあるか

(5) 始業日・時間割等のアナウンス

3月27日付・教務部長名で以下の事項を郵送で通知した。

- ① 教務関係
- a 進級及び留年の事項について
 - b 成績の受渡しについて
 - c 始業日（4月6日）のオリエンテーションについて
 - d 4月中の授業時間について（90分を80分授業に変更）
 - e 出席番号の確認について
- ② その他学生部・就職部・生協関係

(6) 実習未終了（生薬学Ⅰ）

1月18、20、25日に予定していた2Y₂対象の生薬学Ⅰの実習が未終了になったため、2月15日に学生に連絡を入れ、3月13、14、15日の3日間を実習に充てた。

(7) その他

教科書出版社から教科書の寄贈を受け、4年次生の国試補講等に活用させていただいた。

学生部・学生委員会

学生部

1. 被害状況

(1) 学生部（医務室、学生相談室含む）

震災当日、学生部の扉を開けた瞬間目に飛び込んできたのは、あの重いスチール机が自由に動いた形跡と床に広がった書類の山また山、さらにその上に木製の棚とその中に収納、設置していたテレビ（基盤破損により廃棄）、クーラー（ガス交換により現在も使用中）が折り重なるように落下した姿であった。

部屋の中を歩くたびにバリバリと音をたてるコップ、湯呑み、お皿等の無残に割れ飛び散った姿。足の踏み場もないというのはこのことを言うのだろうと思うくらい、何から手をつけてよいのやら、ただただ茫然としたことを記憶している。

しかし、ワープロ、パソコン（キャスター付ラック）は元の場所からは移動していたが、倒壊することもなく無事に作動したことは幸いであった。

学生相談室、医務室にある書類の詰まった書庫も動くには動いていたが、倒壊はしていなかった。

(2) 如修塾（女子寮）

地震による激しい揺れのため、如修塾の被害は大体次のような内容であった。

- ①寮室内の壁のクラック
- ②階段部分の壁のクラック
- ③天井部分のクラック
- ④洗面所の壁のクラック
- ⑤各階掃除道具入れの箇所のモルタル剝離、落下、など。

(3) 岡本寮（男子寮）

岡本寮の被害は大体次のような内容であった。

- ①ボイラー室内の揚水管の破断による断水
- ②ゲストルーム内の蛍光灯カバー落下による破損
- ③便器の破損
- ④便所の排水管の破損
- ⑤寮室内の壁紙の剝離
- ⑥管理人室内の食器棚の転倒と食器類の破損など。

2. 学生の安否の確認

地震直後、まず脳裏に浮かんだのは学生は全員無事か、とにかくそれを早く確認しなければならぬということであった。

(1) 大学構内にある如修塾（女子寮）の寮生の安否について

舎監（堀坂教授）が1月17日午前9時頃には如修塾へ駆けつけ寮長から点呼の結果、1月17日現在残寮していた寮生約200人の無事を確認した。

この日学生部から寮長に対して指示したことは、(1)風呂の水を抜かないこと（トイレに使用するため）、(2)寮はもちろんのこと1号館等各建物にて飲料水を汲み置きしておくこと、の2点であった。

さらに、午前10時頃には生協職員が寮生の安否と食事のことを心配し、駆けつけてくださった。すぐ生協（学生食堂）にあるパン、インスタントラーメン、インスタント食品、おにぎり、スナック菓子等を提供してくださったが数量的に不足しているため、急遽生協専務理事の了解を得て甲南大学生協へパン、インスタントラーメン、インスタント食品、スナック菓子等を一緒に取りに行き、インスタントラーメン400食分とその他にインスタント食品、おにぎり、スナック菓子、パン等を取りあえず如修塾に運び入れ、配分等は寮長に一任した。

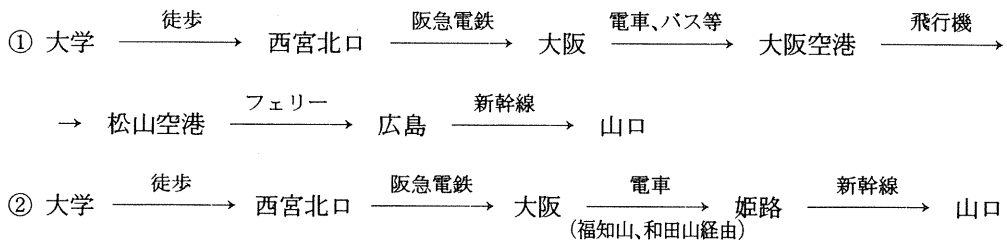
如修塾はガス、水道は止まっていたが電気は復旧していたため、生協からインスタントラーメン等用に電気ポット5台の貸し出しを受けた。

その後、地震の翌日早朝から自主的判断により多数の寮生が各10～20人ずつ位の団体を寮を後にして阪急「西宮北口」まで歩き、そこから電車で大阪まで出て、飛行機、電車、フェリーなどを乗り継いで帰郷していった。

大阪から東方面へ帰る寮生は、西へ帰る寮生ほど苦労は少なかったようであったが、西方面（姫路以西）へ帰る寮生は交通手段が途絶していたため（新幹線が姫路折り返しになっていた）かなりの苦難を乗り越え、それぞれの自宅にたどり着いた。

その一例を紹介すると、下記のとおりである。

山口へ帰郷した寮生の足跡（代表的な2例）



これらの帰郷方法は、18日以降帰郷した寮生全員に無事自宅に到着したかどうかを電話で追跡確認した時に聞いたものである。

なお、この時必ずしも寮生全員に直接電話で無事を確認したのではなく、寮生同士無事についてたかどうかの寮生相互の情報により無事を確認したものが含まれていることを付記しておく。

学生部では、19日夕刻には残寮生がいなくなったため、寮を閉館した。20日以降に寮内の扉、窓の施錠確認はもちろんのこと、各寮室内の窓の施錠、冷蔵庫を除く電気製品のコードをコンセントからはずすなどの総点検を行った。

また、一旦帰郷した寮生が教科書などを取りにきた時にも、その都度開錠し対応した。

特に、寮生から要望が多かったのは、薬剤師国家試験を控えた4年次生から寮を閉館しては

しいというものであった。このことに対しては、ガスが復旧しなかったこと、ならびに復旧しても生協も被害を受けていたことから、寮食の提供ができないと予想していたため、学生に送付した2月22日付文書では3月中は開館しないとしていた。

しかしながら、結果的には4年次生から寮で国家試験の勉強をしたいという複数の要望があったこと、3月中旬ガス復旧に伴い寮食の件で生協に確認したところ夕食については出食は可能であるとの返事を受け、卒業式前日の3月16日から寮の開館を決定した。

開館の連絡は、文書ではなく寮長を通じて寮の連絡網を使って周知した。

(2) 岡本寮（男子寮）の寮生の安否について

岡本寮は、改修後1年を経過していなかったため、建物自体倒壊することもなく、寮生も全員無事であった。

ただ、地震による激しい揺れのためボイラー室内の屋上への揚水管の継ぎ目の破損による断水、ガスの停止、便器の破損、室内の壁紙の破損等の被害を受けた程度でとどまったのは、周辺の状況と比較しても幸いであったと思われる。

寮周辺は倒壊した1戸建ての家屋が多く、現在も更地のままになっている所が多々ある。そのような状況の中、当時寮生達は倒壊した家屋の下敷きになっている近所の人達の救出に尽力したことは誠に素晴らしいことであった。

全壊した近所の人達のうち、寮へ避難してこられた方を寮生たちは快く受け入れると共に、全壊した家の下敷きになって死亡された26歳のOLの遺体も、遺族の方の気持ちを察して1階談話室に安置した。

寮へは多い時で約10人程が避難し、受け入れた人達に談話室ならびに一部の寮室を開放した。

さらに、避難した方が寮に荷物を運び入れたため、人と物で寮内は足の踏み場もないくらいに混雑、混乱を極めていた。

また、避難所としての機能以外にも、寮の公衆電話の利用も認めたため避難者以外の近隣の多くの人利用した。

岡本寮の寮生については、元々食事の提供はなく簡単な調理が可能なように設備を整えていたため、各自が食べ物がある程度ストックしていたため、如修塾のような緊急性がなかったことはまだ幸いであった。ガス、水道が止まったため、寮生の内何名かは震災当日大学まで水を汲みにきていた。

寮生の話によれば、避難した方も家から持ってきた物を寮生にいろいろと提供して下さったり、春山教授も寮近くに居住されていたため食べ物や飲料水等の差し入れをして下さったとうかがっている。

震災当日の寮生の活躍ぶりは、「ききょう通信第98号」の「岡本寮男子学生奮闘記！」に詳しく述べられているので、それを参照していただきたい。

大学はこの寮生6人の人命救助を含む活躍を称え、1995年4月21日（金）神戸薬科大学功労賞の表彰式を行い、賞状と記念品を授与した。

表彰状は、後世にその栄誉をいつまでも語り継ぐために、寮1階談話室に6名の写真を添え飾っている。

(3) 寮生以外の下宿生、通学生の安否の確認について

薬大名簿をもとに、神戸市（北区、西区、垂水区除く）、芦屋市、西宮市、宝塚市、尼崎市

在住の下宿生、通学生に電話で安否を確認した。

この時も全員に直接電話で確認したものばかりでなく、学生相互間の情報により無事を確認したものが多数含まれている。

また、担任ならびに各研究室の教員がクラスの学生あるいはゼミ生への電話連絡により無事を確認した情報が多数学生部に報告され、次々と学生の無事が確認されていった。

下宿が全壊あるいは焼失した何人かの学生は、学生部を訪れ、下宿が崩壊した様子を詳しく話し自分自信で気持ちを落ちつかせようとしていたことが思い返される。

さらに、東灘区内在住の2名の学生については、友人からの情報も入らなかったため1人は内藤教授ともう1人の学生については岩川助教授と自宅まで確認をしに行った。

とにかく、学生全員の無事が確認できたのは、震災から10日目（1月26日）のことであった。

学生部では、上記震災地域に居住していた下宿生、通学生の内、家が住めない状態になっている学生や避難している学生110人を5枚にわたってまとめた一覧表を学長はじめ担任ならびに各部署へ配布した。

安否の確認の連絡をしていて初めて判ったことは、焼失した家の電話も呼び出し音が鳴ることであった。当初、呼び出し音が鳴っているので家は大丈夫でどこかへ避難でもしているのかと考えていたがそうではなく、後になって大変驚いたことをおぼえている。

なお、この安否の確認の時に家屋等に被災を受けた多数の学生から、次のような要望が学生部に多数寄せられた。その代表的なものを次に記載する。

- ① 入寮したい
- ② 奨学金がほしい
- ③ 教科書がほしい
- ④ 授業料が払えるかどうか心配である、等であった。

上記要望等についての対応は、平成7年1月30日の学生委員会で審議し、学生部で対応できるものは学生部で、各部署にお願いすべきものは各部署に、理事会にお願いすべきものは理事会に、リアルタイムに対処していった。これに関する詳細については、学生委員会の記事を参照していただきたい。

3. 今後への提言

学生部にとって、学生の安否をいかに早く、正確に把握することができるか、その方法を確立することが今後重要な課題と言えるであろう。

今回、学生の安否の確認をしていた中で重要な役割を果たしたのは、クラブ、ゼミ、実習や語学を通して形成された友人関係による学生間のネットワークであった。

すなわち、下宿や自宅に電話を掛けても誰もでないことが多々あった。この場合には、連絡のつかない人に出席番号が最も近い人から順番に電話をして、その人の消息を把握することに努め、最終的に本人との直接の連絡は取れなくても無事を確認できたことが多かった。このように、学生は友人の無事を確認すべく素早い行動をとっていた。

今後、学生部は学生間の情報を如何にして学生部へフィードバックしてもらうようにシステ

ム化をすることが第1の課題と考えられる。

第2の課題としては、下宿生の把握を如何にするかということであると考えられる。すなわち、下宿生は親元を遠く離れ1人で生活しており、頼るのはまず自分自身、次に友人、そして次に大学と考えられる。

今回、その下宿生を学生部は支え得たであろうか?、と尋ねられれば、すぐには回答できない状態である。このことから、学生部としては下宿生の連絡網を今あるものよりさらに改善したものを作成する必要があると思われる。

4. その他

最後に、多くの学生から励ましの電話や食べ物をはじめ医薬品の差し入れなど、暖かい志をたくさん頂戴した。また、大阪方面の学生や広島に帰郷していた学生などから、入学試験の監督の手伝いの申し出があった。このような学生の優しさに感動したことが昨日のこのように思い返される。この場を借りて、御礼を申し上げたい。

学生委員会

学生委員会は、学生の安否の確認が終わり、被災学生からの要望を取りまとめることができた1月30日に開催した。

委員会では次の事項について慎重審議の結果、至急に関係各部署等へ対応を依頼した。

〈審議内容〉

(1) 入寮希望者の扱いについて

被災在学学生ならびに被災新生の入寮希望者は優先的に入寮させる方向づけを確認した。

被災していない新生の入寮希望者も、おそらく全員入寮させることができるだろうと予測していたが、如修塾、岡本寮とも入寮希望者が多く希望者全員を受け入れられない時にどうするのか、この時間問題となった。

すなわち、大学のある東灘区は被災地域の中でもとりわけ被害が大きかったため、下宿はもちろんのこと、マンションの多くも被害を受けたため東灘区内で学生の住居を確保することは難しいためである。しかしながら、このことに対しては、2月13日付の発送文書で在学学生に対する入寮申し出期限を2月24日と定め、入寮希望者の早急なる把握に努め在学学生、新生生ともに受入れ体制を整えることとした。一方、万が一のことを考慮して本文書と共に在学学生の父母に対して「ホームステイならびに下宿提供について(お願い)」の文書を発送し、住居の提供をお願いした。

(2) 被災入寮学生の入寮費、寮費の減免措置について

審議の結果、この件は学生委員会の所管事項ではなく理事会で審議、決定する事柄のため、

学生委員会としては理事会に対して検討を依頼することになった。

(3) 奨学金希望者の扱いについて

この時点では希望者は2名と少なかったが、学生委員会としては現時点では被災のショックと毎日の生活で心にゆとりがないため、そこまで気がつかず申し出が少ないだけで時間が経つにつれ希望者も増加するものと判断し、対応策を検討した。

審議の結果、まず第1に日本育英会の災害応募を利用する、第2に桔梗育友会奨学金の枠を拡大してもらうように桔梗育友会に依頼することになった。

最終的には、日本育英会から2月末に災害応募書類が届き奨学金の申し出のあった学生に対して学生部から連絡をとり、手続の結果学部学生14名、大学院生2名の合計16名の学生が日本育英会の災害採用となった。さらに、桔梗育友会奨学生規程についても「水害、地震、火災等のやむを得ない事由により学資の支弁が困難になったと認めた場合には、特例として1～3年次生にもその年度の授業料を限度として貸与することがある。」と改正された。

(4) 教科書希望者の扱いについて

審議の結果、この件に関しては被災学生に対して教科書の無料配布ができないものかどうか、生協に検討を依頼することになった。

その結果、全国大学生協連合会ならびに業者の協力により、被災により焼失または家屋から取り出せなかった教科書が無料で被災学生に配布された。

(5) 授業料減免措置について

① 新入生の授業料減免措置について

この件に関して、入学試験を目前に控え大学として被災した新入生の前期授業料減免措置を行うことを、理事会で検討、決定し、1月22日と26日の2回にわたって新聞紙上で公表した。

② 在学生の授業料減免措置について

新入生については、上記のとおり減免措置を行うことが決定、公表された。学生委員会としては、このことを受けて在学生の授業料減免措置についても新入生同様実施するのかどうかの検討を行った。

審議の結果、新入生も在学生も公平な立場で判断しなければならないという観点から、在学生に対しても授業料減免措置を行うことが望ましいとの結論に達した。しかしながら、授業料減免措置の決定に関する所管は学生委員会ではなく理事会のため、学生委員会としては理事会に対して検討を依頼した。

その結果、在学生の授業料減免措置が理事会で承認、決定され、減免手続については学生部でその事務を担当した。全壊、半壊による減免者数は別表を参照していただきたい。

(別 表)

被災学生に対する納付金減免一覧 (学部)

(単位：千円)

	1 年次生		2 年次生		3 年次生		4 年次生		合 計	
	人 数	減免金額 @782	人 数	減免金額 @782	人 数	減免金額 @782	人 数	減免金額 @650	人 数	減免金額
全 壊	3	2,346	10	7,820	8	6,256	10	6,500	31	22,922
半 壊	人 数	減免金額 @391	人 数	減免金額 @391	人 数	減免金額 @391	人 数	減免金額 @325	人 数	減免金額
	17	6,647	23	8,993	16	6,256	21	6,825	77	28,721

被災学生に対する納付金減免一覧 (大学院)

(単位：千円)

	1 年次生		合 計			
	人 数	減免金額 @300 (本学卒)	人 数	減免金額		
全 壊	1	300	1	300		
半 壊	人 数	減免金額 @150 (本学卒)	人 数	減免金額		
	1	150			3	488.4
	人 数	減免金額 @169.2 (他大学卒)				
2	338.4					

(6) 特別奨学金制度について

学生委員会では、授業料の減免措置を受けることができず、学業の継続が困難になる学生もいることが予想されることから、理事会に対して貸与制の特別奨学金制度創設についての検討を依頼し、その創設をみた。

就職部・就職委員会

1. 被害状況

就職部の部屋に関して、天井、外壁、内壁、床、建具等の損傷は殆ど見られなかったが、室内に設置していた物については、食器棚のガラスが全面破損、中の食器類が前に飛び出し、総て壊れた。また書類棚の上に置いていた花瓶等も落下し、形あるものは総て壊れた。ただ幸いなことにパソコン他事務機器については、移動しただけで特に異常はなかった。

2. 復旧・復興への対応

書類棚は、転倒防止の地震対策がなされた（施設課）が、他の箇所については、就職部員が復旧に当たり、かろうじて業務が行われる状態にした。但し食器棚の新品購入は、予算の関係で後まわしになった。

3. 今後への提言

比較的被害の少なかったのは、パソコン台等に振動に対応出来るよう、ある程度移動が可能だったことが、転倒を防止したものと思われる。

また、今回のような状況の場合は、写真撮影をしておく必要があったと、反省している。

4. その他

就職先、求人先より見舞い状、見舞いの電話等約30件いただいた。また当方より2月9日～10日に阪神間の企業23、病院29、それ以外の企業115、病院129へ合計296通の挨拶状（報告文書）を発送した。

中央分析室・中央分析委員会

NMR室

1. 概況

1月17日震災当日は登学出来なかったため、NMR室の状況を確認出来たのは翌日（18日）午後であった。その時点の状況は以下の通りであった。

- ① VXR-500（500MHzのNMR装置）の超伝導磁石が北側の壁に倒れかかっており、磁石の先端部分にはまだ霜がついていた。これはおそらく磁石が壁にあたった衝撃で超伝導

磁石のクエンチが起こり、急激に液体ヘリウムあるいは低温のヘリウムガスの噴出した結果と思われる。当然のことながら、既に磁場は無かった。

- ② この時点で既に停電は終わっていたが、VXR-500の電源は切れたままであった。
- ③ Gemini-300及び-200 (300MHz及び200MHzのNMR装置)の磁石は、どちらもいくら設置位置がずれていたようだが、磁場はあり、その時点では異常は認められなかった。電源は入ったままで、リセットしたら、いずれもスペクトルをとることが出来た。
- ④ Gemini-300及び-200のコンソール部分は下にコロが着いているが、いずれもかなり部屋の中央部分に移動していた。
- ⑤ 室外にキャリアに止めて置いていた100Lの液体窒素の容器が、キャリアからはずれて転倒していた。幸いほとんど空だったので、液体窒素の漏れだした様子はなかった。
- ⑥ 室内のスタンドに立ててあった窒素及びヘリウムガスのボンベの多くが倒れていたが、いずれもガスの漏れた様子はなかった。
- ⑦ その他試薬棚特に西向きの試薬棚から試薬の小瓶がかなり落ちていた。ただし破損した物は無かった。また机周りの本棚の本が大半下に落ちていた。

以上を確認した後、ただちにNMRのメーカーへ連絡をとり（実際にはなかなか電話が通じず、連絡出来たのは19日朝だった）、1月24日メーカーのサービスマンが来てくれて以下のような被害を確認した。またその時点で確認は出来なかったが、後になってこの地震が原因と思われる不具合がいくつか起こった。以下にその被害状況とその対応及び復旧の状況について記す。

2. 被害状況

(震災直後または比較的早い時期に確認出来た被害)

- ① VXR-500の超伝導磁石破損
- ② VXR-500のハードディスク故障
- ③ データステーションのハードディスク破損
- ④ Gemini-300の超伝導磁石の少量の真空漏れ

(震災後1、2カ月の間に確認出来た被害)

- ⑤ Gemini-300のハードディスク故障
- ⑥ Gemini-200のハードディスク故障

(いずれも震災直後には使用可能であったが、少し使っている内に故障してしまった。

おそらく地震の振動でディスクにキズがつき、使っている内にそのキズが大きくなったものと思われる。)

(震災後半年位に確認出来た被害)

- ⑦ Gemini-200の超伝導磁石からの少量のヘリウム漏れ。

3. 対応と復旧

被害①について

バリアン社のサービスマンの判断で、日本では修理不可能となったため、超伝導磁石メーカー英国のオックスフォード社に送り返し修理することになった。2月3日磁石を解体しメーカー側に引き渡した。当初の予定より早く、4月下旬に英国のオックスフォード社での修理が完了し磁石は戻って来た。5月初旬から中旬にかけ、組立、磁場上げ、調整が行われ、5月下旬には元の通りに測定可能となった。

被害②について

故障が確認された時点で、すぐに修理された。

被害③について

ハードディスクの交換を行った。

被害④について

被害が確認された時点で直ち（2月3日）に真空引きの処置を行い、その後真空漏れは確認されていない。

被害⑤、⑥について

故障が確認された時点で、すぐに修理された。

被害⑦について

被害が確認された時点で直ち（7月中旬）に真空引きの処置を行い、以後観察中。今のところ異常は認められない。

以上のように、それぞれの被害に対して適切な処置が施され、震災から5カ月たたない内にNMRの測定に関してはほぼ元の状態に戻った。

また、今後このような地震等が起こった時の為に、VXR-500の磁石が修理から戻ってきた時、3台の超伝導磁石の転倒防止工事を行った。すなわちVXR-500の磁石は天井吊を、Gemi-300及び-200の磁石は足止めを行った。

4. 最後に

最後にいくつかのことを特記したい。

- ① 磁石の破損したVXR-500の装置では1月14日から17日未明にかけて測定を行っていた。その破損の直前まで測定していたデータは、ハードディスクが故障したにもかかわらず後でそのまま取り出すことが出来、また傾倒した磁石の中に入ったままになっていたサンプルも破損することなく取り出すことが出来た。不幸中の幸いであった。
- ② 今回の被害が大きかったにもかかわらず、比較的復旧が早く行われたことまた被害を最小限に食い止めることの出来たことの陰には、バリアン社の素早い対応があったことを特記したい。震災から1週間目の1月24日にサービスマンが西宮北口から歩いて、被害の確認に来てくれ、上記のように2月3日というかなり早い時期に可能な処置を開始してくれた。
- ③ NMRの装置の場合、上記のようにかなり後になって不具合が出てきたところもあった。すでに施設課の調査も終わっていたばかりでなく、支払さえ終わっていた。今後は、もう少し長い期間観察して、被害の結論を出すべきではないかと思う。

1. 被害状況及び復旧・復興への対応

震災当日（平成7年1月17日 火曜日）は昼夜運転を行なっている質量分析計のことが気になり、いつもより早いに大学に行こうと身支度し家をでようとしたが、交通機関の運休を知らされ、大学に行くことが出来なかった。それほど大きな地震とも思わずテレビの報道を見ていたが、次第に大変な事態であること、また、阪神・淡路地区が震源地であることを知り、まず、大学に近い蔡助手に質量分析室の様子を見てきて頂くよう電話をする。震災当日は、自分の住んでいる地域の被害が比較的少なかったため、テレビで報道されている事態の認識が甘かったように思われる。蔡助手の自宅および周りの被害状況を聞き、大学に行くことさえ困難な状態であることを知った。以後テレビの報道に注意を払う。翌日蔡助手より、質量分析計の警報ブザーが鳴っていたので、ブレーカーを切ってきたとの報告をうける。質量分析室は大きなボンベがすべて倒れていたが、比較的被害の少ない状況にあるとの報告に少し安心した。

(1) 質量分析前室

入り口近くに置いていた冷蔵庫が、入り口の段差のところまで移動し、斜めになって通路を塞いでいた（蔡助手が点検時に元にもどして下さる）。

西側の壁に沿って置いているガラス戸付き木製本棚は全く被害はなく、南側の壁に沿って置いている2段積みofスチール製本棚は、上下段を固定していなかったため、上段が倒れ、中の物が放り出されていた。東側の壁に固定した本棚は、比較的びっしり詰まっていたためほとんど被害はなかった。

純水製造装置はガラス製の蒸留塔部分を、壁に固定の試薬棚の横に置いていたことで、移動も倒れもせず、壊れやすいものであるにもかかわらず無事であった。

試薬棚は試薬ビン防護柵がなく（後に施設課より防護柵を取り付けて頂く）、一部ころげ落ちてはいたが、ガラスビン類を奥に、プラスチックビンを前面に置いていたため、ころげ落ちただけで、中身の出たものはほとんどなかった。

(2) 質量分析室

2台の質量分析計日立M-1000H LC/MSシステムと日立M-4100 MS/MSシステムが昼夜運転し、予試験用のガスクロマトグラフィー、液体クロマトグラフィーが各1台ずつ設置されている。そしてGCおよびGC/MS用、CI用、CID用、チャージ用の大型ガスボンベ（ヘリウム2本、アルゴン1本、イソブタン1本、窒素2本、水素1本で、常に開栓されているボンベはヘリウム1本、窒素1本）が装置の周りに立てられている。ボンベはボンベ台に立てていたが、壁に固定式のものではなかったために、ボンベ台ごと倒れていた。しかし、幸運なことに、僅かしかない隙間に意識的に置いたように倒れ、装置には何の被害も与えていなかった。

LC/MS(約500kg)は液体クロマトグラフィーのポンプとUV検出器が2段重ねで本体の上に積み上げられているが、本体にキャスターがついており、約15センチメートル東北東に動いた形跡はあったが、何も落下していなかった。

MS/MS本体(約5,000kg)はMS/MSの連結部分が問題ではあったが、重心が低くまた重いので見かけ上変化はなかった。電源部、データ処理部はキャスター付きあるいはキャスター付

きの台に乗っていたので、移動はしていたが、これらも見掛け上異常はなかった。

古い木製の机上に置いていたガスクロマトグラフィーは、半分落ちそうな所まで移動していたが、窒素配管に支えられ落ちて壊れることから免れた。

液体クロマトグラフィーは安定な実験台上に置いていたので、全く問題はなかった。

分析室の中央に置いているサンプル調製台のガラス製の棚に、日常使用試薬またマトリックスとして使用するグリセロール、ポリエチレングリコール（200、400）などの500mlビン置いていた。それらはすべて床に転げ落ちて割れ、サンプリング用のキャピラリーと一緒に床の上を流れ、べとべとになり、ガラスの破片があちこちに散らばっていた。しかし、グリセロール、ポリエチレングリコールなどは水溶性なので、床を傷めることなく、掃除をすれば元の状態にもどった。

室全体としては、壁にヒビが入り、西非常口のドアが開きにくいこと以外は、掃除、整理を行えば殆ど元の状態に復帰した。

1月24日MS/MS装置の立ち上げを行なった。第1、第2MSともに真空排気、イオン軌道、感度、キャリブレーションいずれにおいても全く問題は無く、性能が保持されていた。学長、MS小委員会委員長に被害なしの報告をする。質量分析室移転時（昭和53年9月）に、振動防止のために質量分析計を置く位置の床下1mをコンクリートで固めていたことが、今回の地震に対しても良い結果を与えたと考える。

LC/MSは3月末に室外に置いているロータリーポンプ、オイルプースターポンプを点検、掃除後試運転を行なった。こちらも全く問題点はなく、性能が保持されていた。

2. 今後への提言

やはり常識的なことになるが、あまり高く積み上げない。固定するときは建物の床、壁に固定する。比較的軽量の物はキャスターを付けたり、キャスター付きのものに乗せる。緊急時の連絡、対策を考えておくなどである。

元素分析室

1. 被害状況

他のほとんどの研究室同様に書棚、試薬棚、ポンベ等が転倒し、ガラスが床に散乱していた。辛い試薬瓶が割れたり、こぼれた試薬はなかった。

元素分析室で現在最も利用されているのが、マイクロ電子天秤（読み取り1 μ g）で、これは天秤室の共鳴除振天秤台の上に設置されている。この除振台は、天板が60kgあり、その下に70kgの重り（下部重心玉）がついているにも係わらず、天板がずれていたが、幸いマイクロ天秤は転倒せず無事。しかしこの状態では、除振台として機能しなくなった。

他にセミマイクロ（読み取り0.1mg）とマイクロの2台のメカ天秤が、備え付けの天秤台の上のっていたが、転倒し修理不能（天秤は転倒してしまうと修理できない場合が多い）となってしまった。

2. 復旧・復興への対応

比較的早い時期に、メーカーが天秤の点検、除振天秤台の修理に来られた。

3. 今後への提言

当たり前の話であるが、精密天秤を除振天秤台の上に置くことが、必要条件である。

中央動物実験室・中央動物実験室運営委員会

1. 被害状況

(1) 1階飼育室

冬期休暇に続く4年次生の後期定期試験に入っており、実験・研究用に飼育中の動物は居らず、また飼育設備にも被害はみられなかった。

(2) 地下飼育室

60～70%のケージは、棚上に残っていたが、その他のケージは落下し、一部の動物は死亡していた。

また、生存動物も、その後の電気、水道使用不可のため、飼育が困難となり、やむを得ず処分することとなった。したがって、ガン細胞の植え継ぎも不可能となった。

2. 復旧・復興への対応

水道、電気が使用可能後、すぐに飼育を開始したが、当初は温度設定が上手くゆかず実験に使用でき得る動物の飼育には時間を要した。

薬用植物園・薬用植物園運営委員会

H7.1.17当日午前10時頃にタクシーで大学に到着、東灘の被害の重大さに半ばあきらめつつも一番気になった温室に急ぎその被害を確かめた。

1. 被害状況

- ① 温室の建物、ガラスなどに関しては多少のヒビ割れは見られるものの被害は最小限にとどまった。
- ② 管理室の机、ロッカーが地震の影響で移動しスチール製の書架が転倒した。
- ③ 温室内の植木鉢に植えて栽培している物はほとんどが地面に落ち散乱し、そのうち20鉢ほどが破損した。
- ④ 最終的に一番の大打撃となったのが電気、ガス、水の停止であった。当園の温室はガス暖房で維持されており約2ヶ月にわたり寒い時期に暖房が出来ず、また灌水も出来ないため熱帯の薬用植物などが徐々に枯死、または衰弱していった。
- ⑤ 最終的な被害として温室で栽培する130種、650株の中の特に寒さに弱いもの約30種、約100株ほどが枯死、生き残った物も衰弱がひどく立ち直るまでに1年以上を要した。

2. 復旧・復興への対応

- ① 管理室に関しては自力で復旧した。
- ② 散乱した鉢物の植物に関しては、鉢を戻し割れたものは同じサイズの鉢に植え直しその場に対応した。
- ③ 一番の被害となった暖房に関しては、灯油のストーブを考えたが灯油が入手出来ないため断念し、結局約1ヶ月後の電気の復旧まで鉢を寄せ集め、ビニールで覆うなどの策しか出来ないままであった。
約1ヶ月後電気が復旧、急ぎ購入した大型のファンヒーターと電気ストーブ約10台で暖房するも、実際にはそれほどの暖房効果は得られなかった。
- ④ 衰弱した植物の復興に関しては、挿し芽繁殖の出来るものについては、根が枯れかろうじて残った地上部を挿し、いちから育て直すといった作業を行い大半はこの方法で品種を維持した。その外の植物については傷んだ根を取り除いて植え替え対応した。また温室の中でじかに植えてある物については植え直しを行ったが、傷んだ植物の回復は遅く現在でも回復途上である。

3. 今後への提言

植物は微妙な環境の上で生育する。事務処理などのデータに対してもバックアップが必要なように、動物や植物などの作られた環境で成り立っているものについても設備面でのバックアップが必要不可欠ではないかと思われる。今回は大震災のような大きな災害であったが、日常でも急な停電もあり、ガスの停止といった可能性もある。そのつど大切な資源を危機にさらす事になる。そうならないためにも予備的な設備、たとえば自家発電装置や、停電やガスの停止の時それに変わる装置の設置といったことを考える必要がある。

以上が大震災における直接の被害状況その他であるが、植物は生き物であるがため今回の震

災の場合は、寒い時期に暖房が停止したことによって起こる二次災害的な被害だったように感じられる。本学の薬用植物園は現在約600種・約3000株の貴重な薬用植物資源や、絶滅の危機に瀕する植物などを保護育成している。これら本学の大切な資源をこのような事態から守るためにも今後、あらゆる方向からの対策を考えて行く必要がある。

温室植物被害調査

植 物 名	和 名	入手経路	被害状況	被害株数
<i>Rauwolfia serpentina</i> Benth.	インドジャボク	入手困難	冷害枯死	1
<i>Ficus elastica</i> Roxb.	インドゴムノキ	入手可能	冷害枯死	2
<i>Lophophora williamsii</i> Coulter	ウバダマ	入手可能	冷害枯死	3
<i>Epiphyllum oxypetalum</i> Haw	ゲッカビジン	入手可能	冷害枯死	2
<i>Echinocactus grusonii</i> Hildm.	キンシャチ	入手可能	枯死寸前	1
<i>Phyllocactus hybridus</i> Hort	クジャクサボテン	入手可能	冷害枯死	4
<i>Schlumbergera russelliana</i> Britt	カニサボテン	入手可能	冷害枯死	3
<i>Crataeva religiosa</i> G. Forst.	ギョボク	入手困難	冷害枯死	1
<i>Swietenia mahogani</i> Jacq.	マホガニー	入手困難	冷害枯死	1
<i>Euphoria longana</i> Lam.	リュウガン	入手困難	冷害枯死	1
<i>Carica papaya</i> L.	パパイヤ	入手困難	枯死寸前	大株 1
<i>Psidium guajava</i> L.	ハンジロウ	入手困難	冷害枯死	大株 1
<i>Cephaelis ipecacuanha</i> A. Richad	トコン	入手困難	冷害枯死	1
<i>Cinchona succirubra</i> Pavon	アカキナノキ	入手困難	冷害枯死	1
<i>Eucharis grandiflora</i> Planch.	アマゾンユリ	入手困難	冷害枯死	10
	トクノシマカンアオイ	希少種	枯死寸前	1
<i>Malpighia zeylanicum</i> Nees	アセロラ	入手可能	冷害枯死	2
<i>Tamarindus indica</i> L.	タマリンドノキ	入手困難	冷害枯死	1
<i>Zanthoxylum usambarense</i>		ケニア入手困難	枯死寸前	8
<i>Zanthoxylum nitidum</i> (Roxb)DC		入手困難	枯死寸前	2
<i>Toddalia asiatica</i> (L)Lam	飛龍掌血	入手困難	冷害枯死	15
<i>Hodgsonia macrocarpa</i> (BL)	油瓜	入手困難	冷害枯死	1
<i>Paphiopedilum appletonianum</i>	ワシントン条約指定	輸入不可	冷害枯死	1
<i>Paphiopedilum esquirolei</i>	ワシントン条約指定	輸入不可	枯死寸前	2
<i>Paphiopedilum parishii</i>	ワシントン条約指定	輸入不可	枯死寸前	1
<i>Paphiopedilum philippinense</i>	ワシントン条約指定	輸入不可	冷害枯死	2
<i>Paphiopedilum rothschildianum</i>	ワシントン条約指定	輸入不可	冷害枯死	6
<i>Paphiopedilum sanderianum</i>	ワシントン条約指定	輸入不可	冷害枯死	7
<i>Laelia purpurata</i>	ワシントン条約指定	輸入不可	枯死寸前	2
<i>Cattleya labiata</i>	ワシントン条約指定	輸入不可	冷害枯死	1
<i>Cattleya waraneri</i>	ワシントン条約指定	輸入不可	冷害枯死	1
<i>Phalaenopsis amabilis</i>		入手可能	冷害枯死	7
<i>Phragmipedium bessae</i>		入手可能	冷害枯死	2
<i>Vanda coerulea</i>		入手可能	冷害枯死	2
Dendrobium属		入手可能	冷害枯死	18
合 計				115

実験室排水処理施設・排水対策委員会

本施設は、昭和50年1月に完成し、現在20年が経過している。

しかし、今回の大震災による被害は、皆無だった。その要因として、当初の基礎及び設計の検討が十分であった結果だと確信している。

また、日頃から整理整頓されており、薬品等の散乱も無かった。

アイソトープ実験施設・放射線安全管理委員会

1. 被害状況及び復旧・復興への対応

(1) 施設

① 全般

月 日	項 目	結 果 ・ 処 置
1995年		
1 / 17	管理室長・施設課による建物の外側からの点検	異常なし
1 / 18	科学技術庁からの問い合わせ	
1 / 19	放射線取扱主任者の指示に基づく、管理室員による管理区域内線量当量率サーベイ	異常なし 表1
	貯蔵量・廃棄物量のチェック	表5
1 / 23	科学技術庁へアイソトープ実験施設状況報告	
1 / 23～	放射線取扱主任者・各研究室責任者の指示に基づいて片付け 立入研究室 衛生化学・生化学・微生物化学 生薬学・放射薬品学	異常なし
1 / 30～1 / 31	管理区域内の汚染・漏洩検査 表面汚染検査 1 cm線量当量率測定	汚染・漏洩なし 表2 表3
1 / 30～2 / 1	施設の点検	施設使用可能と判断 表4 (数カ所壁天井に亀裂)
2 / 1	郵便事情悪化のため、2月分のフィルムバッチ未着 再発行要請	2 / 3 フィルムバッチ到着・交換
2 / 7	水道復旧（施設課）	

2 / 9	排水管点検 (施設課)	一部排水管破損 一部水道使用禁止
2 / 9 ~ 2 / 10	排水槽点検	異常なし
2 / 10	実験排水の排水可能 (施設課)	
2 / 10	アイソトープ実験施設使用開始	一部水道・RI動物室使用禁止
2 / 14	建物外部点検 (竹中工務店・施設課)	数カ所亀裂
2 / 14	RI動物室使用可能	
2 / 20	建物内部点検 (竹中工務店・施設課)	数カ所壁天井に亀裂 それによる使用禁止箇所なし
2 / 21	排水管修理 (三神工業)	
3 / 1	放射線安全管理委員会開催	阪神大震災によるアイソトープ実験施設の被害状況について報告
1996年		
3 / 31	アイソトープ実験施設移転	旧アイソトープ実験施設(9号館)廃止
5 / 1	新アイソトープ実験施設(5号館)開始	

② 施設の状況

場 所	月 日	施 設 の 状 況
施設全般	1 / 17	建物に大きな損傷なし 発火の恐れなし
	1 / 30 ~ 2 / 1	施設点検 壁及び天井に亀裂あり
	2 / 7	水道復旧
	2 / 9	排水管に異常あり (詳細は排水施設)
	2 / 10	実験排水可能
	2 / 10	使用開始
	2 / 14	建物外部点検
	2 / 20	建物内部点検 壁及び天井に亀裂あり 但し、使用禁止箇所なし
使用施設	1 / 19	実験ガラス器具破損、試薬漏洩 ガスボンベ7本中4本転倒 ボンベ立てごと転倒 鉛ブロックが実験台から転落 半導体検出器転倒 RIがこぼれている可能性が低いことを確認
	1 / 23	各研究室による調査・片付け 各研究室責任者にRIが漏洩していないことを確認
	1 / 30 ~ 1 / 31	スミア・サーベイを行い、RIが漏洩していないことを確認
貯蔵室	1 / 19	試薬漏洩なし
	1 / 30 ~ 1 / 31	スミア・サーベイを行い、RIが漏洩していないことを確認

廃棄物保管庫	1 / 19	RI漏洩なし
	1 / 23	アングル上のドラム缶転倒の恐れあり アングル撤去 ドラム缶整頓
	1 / 30～1 / 31	スミア・サーベイを行い、RIが漏洩していないことを確認
排気施設		
施設全体用	1 / 23	排気ファンおよびモニターに異常がないことを確認
動物室用	1 / 23	排気ファン異常なし 水道不通のため、温度制御装置作動不可 水道復旧後調整 ガスモニタ転倒
	1 / 26	ガスモニタ復旧
	1 / 27	ガスモニタ点検 異常なし
	2 / 14	温度制御装置点検 異常なし
排水施設	1 / 31	排水槽の漏水検査（1 / 31現在の水位） 漏水なし
	2 / 9	排水管点検 破損箇所 建物南部排水横管 建物北西部排水縦管
	2 / 9～2 / 10	排水槽の漏水検査（満水） 漏水なし
	2 / 21	排水管（2 / 9点検箇所）修理（三神工業株式会社）
ECDガスクロマトグラフ	2 / 1	点検 ECDセルは異常なし ただし、ガスクロマトグラフとしての機能損傷 使用不可
	6 / 5	ECDガスクロマトグラフ（GC-3BE島津製）廃棄
	10 / 25	ECDガスクロマトグラフ（GC-14B島津製）購入

③ 機器

月 日	項 目	結 果 ・ 処 置
1 / 26	排気施設用の電離箱転倒のため点検	使用可能
2 / 1	ECDガスクロマトグラフ (GC-3BE 島津製) 点検	使用不可 但し、ECDセルは異常なし
2 / 8	液体シンチレーションカウンタ (ア ロカ製) の点検	異常なし
2 / 14	RI動物室の温度調整機の点検	異常なし
2 / 21	遠心器 (日立製) の点検	異常なし
2 / 21	安全キャビネット (日立製) の点検	異常なし

表1. 管理区域の線量当量率サーベイ (1995/1/19)

NaI(Tl)シンチレーション式サーベイメーター
(GM管式サーベイメーターも必要に応じて使用)

場 所	線量 ($\mu\text{Sv/h}$)			
	実測値*	通常値*	注意値**	限度値**
5号館1階	0.2以下	0.2以下	2.5	20
廃棄物保管庫	0.1	0.2以下	220	1000
貯蔵庫	3.5	3.5以下	341	1000
貯蔵庫上部	0.4	0.5以下	1.2	6.3
照射室 γ 中性子 (中性子計数管)	0.6	0.6以下		
	0.6	0.9以下		
合 計	1.2	1.5以下	5.2	41
γ 線照射装置 最高値 (鉛を水平に挿入するところ)	0.3	0.4以下	1.2	6.3
	1.2	—	1.2	6.3
事業所境界	B. G. (0.10)	B. G. (0.12以下)	0.11	0.11

* B. G. を含んだ値

** B. G. を含まない値

表2. 表面汚染検査 (1995/1/30~1/31)

スミア法 液体シンチレーションカウンタ ^3H ^{14}C 100 cm^2 スミア
 コンピューター γ 線核種 200 cm^2 スミア

場 所	^3H (dpm)	^{14}C (dpm)	γ 線核種 (cpm)
限度値	2400	2400	400
除染レベル	240	240	88.8
調査レベル	200	200	
検出限界	11.1	7.4	62.7
第一実験室			
安全キャビネット *)	145.3 (0)	0	0
流し	0	0.5	14
床	0	1	3
床	0	4.5	0
床	0	0	29
第二実験室			
クリーンベンチ	0	4	27
床	0	1	0
カリフォルニアフード	0	7	10
オークリッジフード	0	1.5	39
流し	0	7	0
床	0	3	20
第三実験室			
流し	0	0	0
床	18.4	0	0
オークリッジフード	0	0	0
オークリッジフード	0	113.5	0
オークリッジフード	0	0	13
オークリッジフード*)	233.0 (0)	0	0
床	3.2	4	27
床	7.4	2.5	0
床	0	0	0
床	0	2	36
動物処置室			
床	0	0	0
流し	0	1.5	0
動物飼育室			
床	1.4	1.5	20
恒温槽	0	7.5	0
低温実験室			
床	0	0	16
流し	0	0	20
床	9.7	1	0
測定室			
床	0	1.5	0
汚染検査室			
床	0	0	0
貯蔵庫			
冷蔵庫内	0	1.5	15
床	0	1	12
冷凍庫内	28.4	0	15
廃棄物保管庫			
床	0	1	0

* 2/10 使用者により除染。(除染後の値)

表3. 1cm線量当量率 (1995/1/30~1/31)

NaI(Tl)シンチレーション式サーベイメーター
(GM管式サーベイメーターも必要に応じて使用)

場 所	線 量 ($\mu\text{Sv/h}$)				
	No	実測値*	通常値*	注意値**	限度値**
第一実験室	1	0.12	0.18以下	2.5	20
第二実験室	3	0.15	0.18以下	2.5	20
第三実験室	7	0.15	0.18以下	2.5	20
動物処置室	9	0.09	0.10以下	2.5	20
動物飼育室	10	0.09	0.10以下	2.5	20
低温実験室	6	0.15	0.18以下	2.5	20
測定室	4	0.15	0.18以下	2.5	20
汚染検査室	2	0.16	0.18以下	2.5	20
貯蔵室	5	3.5	3.5以下	341	1000
貯蔵室天井	18	0.5	0.5以下	1.2	6.3
廃棄物保管庫	8	0.10	0.4以下	220	1000
排気設備	11	0.12	0.12以下	2.5	20
γ 照射容器表	12	0.3	0.4以下		
<中性子>		0.6	0.6以下		
合計		0.9		1.2	6.3
照射室内境界	13	0.3	0.4以下		
<中性子>		0.6	0.6以下		
合計		0.9		1.2	6.3
中性子照射室	14	0.6	0.6以下		
<中性子>		0.6	0.6以下		
合計		1.2		5.2	41
照射室外境界	15	0.2	0.27以下		
<中性子>		0.6	0.6以下		
合計		0.8		1.2	6.3
排水設備	16	0.12	0.12以下	1.2	6.3
事業所境界	17	0.10	0.12以下	0.11	0.11

* B.G.を含んだ値

** B.G.を含まない値

表4. 施設点検 (1995/1/30～2/1)

項 目	結 果
<ul style="list-style-type: none"> • 排水施設 貯留槽の漏水テスト • 排気施設 排気ファン運転 • 施設の亀裂点検 • ECDガスクロマトグラフ (^{63}Ni)点検 	異常なし 異常なし 天井・壁に亀裂あり 異常なし

表5. RI貯蔵量 (1995/1/17現在)

① 非密封RI(場所:貯蔵室)

(kBq)

核 種	^3H	^{14}C	^{32}P	^{35}S	^{45}Ca	^{60}Co
数 量	2679702	180295	37071	4667	5463	35080

核 種	^{99}Tc	^{109}Cd	$^{110\text{m}}\text{Ag}$	^{125}I	^{133}Ba	^{137}Cs
数 量	32664	9592	2883	15707	9250	26700

② 密封RI

核 種	^{241}Am	^{60}Co	$^{241}\text{Am-Be}$	^{137}Cs	^{63}Ni
場 所	貯蔵室	貯蔵室	照射室	照射室	2号館大学院研究室
数 量	3.7GBq	50MBq	37GBq	3.7TBq	370MBq

(2) 放射線業務従事者

地震当時、アイソトープ実験施設内への立ち入り者はいなかった。また、地震によるRI汚染及び放射線の漏洩はなかったため、復旧作業による被曝もなかった。

2. 対策

- ① 施設内機器等を固定した。
- ② 使用者に放射線障害予防規程を遵守するよう教育訓練を実施した。
- ③ 災害時の通報体制を放射線障害予防規程に追加した。

図書館・図書館運営委員会

1. 被害状況

1995年1月17日に発生した兵庫県南部地震は神戸市にとって、大空襲以後最大の災害となった。その被災地にある当館も被害を受けた。以下にその状況について報告する。

(1) 建物の被害

床のタイルがはがれたり、壁に亀裂が生じた箇所がいくつかあるが、1号館という大きな校舎内に位置していたため、それほど大きな被害はなかった。

(2) 閲覧室・自習室の被害

主な被害は、図書の落下と書架の転倒による損壊が挙げられる。閲覧室の中で最も被害の大きかったのは、3階新着雑誌室であった。書架はほとんど倒壊して、雑誌が散乱し、その勢いの余り机と椅子がひっくり返ったり、折れ曲がったりしていた。机と椅子は修復不能のものがあり、半分（2卓、8席）を新しいものと入れ換えた。背の低い木製書架は転倒せずに、床面を大きく移動していた。ふだん館員が3、4人がかりで動かそうとしても、びくともしなかったことを考えると、まさに地震の力の強さをみせつけられた思いがした。

(3) 書庫の被害

当館で最も被害が甚大だったのが、製本雑誌のある3階書庫である。北側の書架は間に2本の柱が通っていたせいも、倒れずに大きく傾き、もう一方の書架は天井からつながっている部分がひきちぎられ、見事に将棋倒しになっていた。倒れていた書架にあった製本雑誌はすべて投げ出され、書架に取り付けられていた蛍光灯は転倒のショックで割れているという有様で、実に足の踏み場もない状況であった。集密書架の方は異音を発しながらも作動し、無事であった。

(4) その他の被害

3階カウンターの後方に置いていたパソコンが1台転倒していたが、図書館システムに被害がなかったのが救いであった。4階タイプ室のスチール製2段キャビネットの上段が事務椅子の上に転倒し、ともに破損した。キャビネットのガラス戸が粉々に飛び散り、無人状態であったことが、不幸中の幸いと思われた。その他にはブックトラックの損壊や製本雑誌の破損分なども挙げられる。

これらの被害を繰り返さないためにも、経験したことを日常業務に生かし、安全な図書館づくりに励まなければならないと思う。

2. 復旧・復興への対応

館内の復旧については、館員だけの力では不可能だったと思う。学内、学外を問わず多くの

方に励まされ、助けていただいた。

復旧への具体的な対応としてはまず、館内の被害状況を平面図に記入し、復旧作業のスケジュール表を作成したことである。その表に従って、機器類のチェック、休館日の掲示、指定参考書発注準備など即対応すべきことを優先し、入試業務と並行させながら作業を開始していった。製本雑誌を除いては図書落下は思ったより軽微で、館員だけで復元できる程度だったため、2月20日には部分開館ができるに至った。

被害が最も大きかった製本雑誌のある3階書庫の復元は、人海戦術による他はなく、他部署からの応援を得て作業を行うことができた。まずは、総勢20名で3日間、倒壊した書架から約2万冊の製本雑誌を仮撤去した。その後、日本ファイリング社による倒壊書架の撤去と新設書架の取り付け作業後、配架という手順となった。この配架の際にも、他部署からの応援があったおかげで新年度の4月6日には、ほぼ元通りの形で開館することができた。

この間の利用者への対応として、図書館利用の現状と利用者の希望を知るために、2月22日から来館者を対象にアンケート調査を開始した。この結果、貸出期間の延長、延滞罰則の解除と他館との相互協力体制をとった。実際に、武庫川女子大、阪大、摂南大、関大、大薬大、神戸市立中央図書館他で学生が利用させていただいた。

こうして無事復旧できたのも作業に当たっていただいた学内外の多くの方々のご協力によるものだと感謝している。とりわけ学内各部署の協力体制の大切さを再認識させられた。

3. 今後への提言

今回の地震では、実にさまざまな経験をし、普段何気なく行っている日常業務にも深く考えさせられることが多かった。

(1) 利用者へのサービス

図書館の仕事の中では利用者へのサービスが重要な部分を占めている。もしあの地震が開館時に起きていたら、と考えるだけでもぞっとする。書架の転倒は、人身事故につながる可能性が高いのでこれを防ぐ策をとるのが重要なことであると思う。現在当館では、背の高い書架は全て床、天井に固定している。天井に固定できないものは、頭つなぎで書架の上部を連結し、その端を柱や壁に固定するという方法をとっている。人命尊重を第一に、予想される被害を最小限度に抑えられるような防災対策、整理・配架に努めることも重要な日常業務の一つであると感じた。

(2) 相互協力

図書館のつながりの大切さ、ということも改めて考えさせられたことの一つである。文献複製はもちろん、他館の利用についても随分便宜をはかっていただいた。「学生・教職員は身分証明書の提示のみで利用してください。」との案内をいただき、感激したのを思い出す。できてあたりまえのことがかなわなくなった時、人のつながり、あたたかさが重要であると痛感した。図書館の役割は利用できなくなった人に対するサービス、つまり誰に対しても平等なサービスができることが望ましい。そのためには、学外、異種館間のつながりを更に深め、大切に

していくことが必要なのではないかと感じている。

地震当初から学内外を問わず、多くの方に励ましていただき復旧することができた。皆様に感謝の意を表するとともに、この災害を無駄にせず資料の収集に努め、利用者サービスに励んでいきたいと考える。

(3) ボランティア活動

また今回の経験によって「ボランティア活動」についても深く考えさせられた。

水や電気、ガスと同じように、研究者や学生など利用者にとっては、本もまたライフラインの一つであると考えられる。震災直後、受験生の自習室として地域の人々に開放した大学図書館や、避難所の子供たちのために映画会や、紙芝居を実施した公共図書館もあった。異種館を含め図書館間のネットワークがいかに不可欠なものであるかと感じずにはいられない。こうした災害時に、地域住民に対して図書館を開放することは、ボランティアの一つだと言えるのではないだろうか。

図書館が災害時にできる「ボランティア活動とは何か」ということを今後の課題としていきたい。

近い将来、兵庫県・神戸市にはネットワークシステムが敷設されるという計画もあり、地域ネットワークも更に活性化していくことが期待される。

(4) 震災関係資料の収集

新聞社が出版した「阪神大震災」全記録・縮刷版をはじめとし、大震災地図、そして阪神間の近隣大学が発行し寄贈された調査報告書、追悼文集、また医療関係者が発行した震災の記録など、1996年5月現在で48点を収集している。今後、大学や医療関係はもちろんのこと、ボランティア活動や心のケアに関連したものを継続収集していく予定である。

以上阪神・淡路大震災で、人命と資産の保全及び図書館機能の維持など、「図書館の役割」について再考するまたとない機会であった。

神戸薬科大学六甲山セミナーハウス

木造家屋ではあるが、山頂のため被害は比較的軽微。

教養課程

数学研究室

研究室内の書架、本箱がすべて横倒しになり、書籍類が床一面に散乱し、入口のドアが開きにくい状態であった。

本箱は倒れたため、ガラス戸が開かず、多少ゆがんだこと、また、倒れた本棚の角で、応接用テーブルが壊れたこと、ソファの一部が破れたこと、床面にきずができたこと、以上が被害のすべてである。

社会第一研究室

去る95年1月17日、阪神・淡路大震災が兵庫県、大阪府を襲った。幸運にも、大学やわたくしたち家族が受けた被害は比較的軽いようであったが、その人生を変える重い被害を受けられた方々も少なくない。最も幸運だったのは同僚や学生たちの身体的被害がなかったことである。わたくしも、学生部の方々と共に学生の安否を確認する作業をお手伝いしたが、Y2の最後の学生の安全を確認したときの嬉しさは忘れることができない。難波教授をリーダーとする学生部の方々が精力的に学生の安否確認の作業に専念されていたが、深い敬意を表したい。

さて、この地震の教訓の一つでもある「危機管理、防災の視点からの大学施設の再点検」について、少し、考えを述べさせて頂こうと思う。もし、地震が講義中に起こっていたならば、より深刻な身体的損害が起こっていたであろうからである。

地震後の研究室の状況は深刻であった。書架が倒れ、ロッカーが移動し、足の踏み場がないほど書物が崩れ落ちていた。もし、学生がいたならと思うとゾッとした。わたくしは、積極的に学生に対する書物の貸し出しを行っている。講義別に、テーマ別に、系統的に文献を購入し学生たちに貸し出している。そこで時間をかけ、部屋の大規模な模様替えをした。書架を固定し、ソファや黒板を移した。たとえ、地震が起こっても室内の学生たちに直接ダメージが加えられないように必要スペースをとるように工夫した。以後、防災という視点より講義室、ゼミ室、教養共同研究室などの大学施設を見るようになった。

地震国日本では地震の発生を避けることができないが、その際の被害を最小限におさえることはできると思う。特に、身体的被害を防止することは大切である。危機管理の制度的体制の整備とともに、防災の視点から施設の日常的再点検が重要なのではないかと思う。再び、地震に襲われても、同僚や学生の身体的被害が発生しないためにも大切だと考える。

社会第二研究室

1. 被害状況

被害は書架の倒壊や書籍の一部落下・移動にとどまった。当研究室の書架は3種の設置方法

がとられているが、被害はその3種でみごとに分類される。第一に、固定していない簡易書架の場合。2連ずつを背中合わせに入り口付近においていたが、これらは全部倒れて、足の踏み場もないほど書籍が散乱していた。震災直後、入り口のドアがなかなか開かず、研究室に入るのに苦労した。第二に、隣の研究室との仕切りのため挿入された壁に固定してあった書架の場合。壁の材質が弱かったせいか、固定金具が外れて10cmほど書架が平行移動していた。配置してある書籍はほとんど落下していなかったが、いずれも振動によって10cm程度棚の前面に出ていた。第三に、構造壁に固定してあった書架の場合。全くといっていいほど被害がなかった。ただし、それには地震の揺れの方向が関係しているかもしれない。

書架以外のものは別段大きな被害はなかった。パソコンについてはノート型であったため被害はなかった。

2. 復旧・復興への対応

書籍の配置の復旧にかなり手間取った。倒れた書架を再度組み立て直し、本の配置を復旧するのが主な作業であったために、自力で少しずつやるしかなかった。

3. 今後への提言

書架の固定が第一に大切である。また、たとえ落下物があったとしても被害が最小限に食い止められるよう、配置には十分配慮しなければならない。書架の天井にはできるだけ物や本を置かない、高い棚で書籍の二重配置は避けるなど、日常的な防災対策を考慮した研究室のレイアウトを工夫する必要がある。

英語第一研究室

1. 被害状況

研究室内の壁取り付け型書架は転倒せず、収納された書物が数冊落下、散乱していた。簡易組み立て型書架は3つが転倒し、すべて書物が落下。ただし、研究費図書類はほとんど破損はみられなかった。またスチール製のキャビネットが半倒しになっていたが、ガラス等の破損はなかった。室内設置の機器類（ワープロ、電話、照明器具）などは無事であったが、エアコンが少し床の上で移動していた。ただし使用にさしつかえはなかった。なお、室内では仕切り壁の継ぎ目に用いてあるプラスチックが一部剥がれていた。

2. 復旧、復興への対応

研究室内の後片付けは自力で可能であったが、スチール製キャビネットを元どおりにもどす作業には施設課をはじめ、事務局の方々の助力を得た。

3. 今後への提言

われわれの研究室はほとんどが書物によって占領されている。したがって、書架が固定されていると被害の程度は大幅に軽減できると考えられる。また意外だったのは極めて重いスチールキャビネットがその位置で上半分が倒れていたことである。これは明らかに、重さだけではこのような物を固定できないということで、やはり何らかの方法で堅牢な建物の一部に固定する必要がある。

英語第二研究室

1. 被害状況

それほど大きな被害はなかった。スチール製の書架が2台倒れて、本が床に散乱したくらいである。それ以外の書架は壁に固定されていたため、倒れなかったばかりか、棚の上の書籍も10冊程度を除いて、皆もとの位置に並んでいたので助かった。パソコン関係もキャスター付きでない普通の机の上に置いていたにもかかわらず、床に落下することもなく、またハードディスク内の情報にも異状がなく、ほっと胸をなで下ろした。ただ、書架を壁に固定すると、その分大きな揺れが起こったときに壁に負担がかかるらしく、書架の裏の壁に軽いひび（亀裂ではない）が入っていた。

2. 復旧・復興への対応

被害が比較的軽かったので、倒れた書架を起こして散乱した図書を元の順番に並べ替える作業くらいであったが、図書を元にならべるといのは意外に時間のかかる厄介な作業であった。

壁のひびについては、施設課に報告して修理してもらった。

3. 今後への提言

文科系の研究室の場合、震災に備えて気をつけておかなければならないのは、書架を固定しておくこと、パソコンで作成したファイルのバックアップを取っておくことの二点であると思った。そうすることで被災から仕事復帰までの時間を少しでも短縮することができるからである。

ドイツ語第一研究室

1. 被害状況

全体として大きな被害はなかった。

個別状況

- ①大書架1 左へ5cmほど移動。本数冊が落下。

- ②大書架2 右端が40cmほど前へ出る。ファイル数冊、本数冊が落下。
- ③スチール製のロッカーも40cm前方へ。中の収容物には被害なし。
- ④小書架1・2 ドア側へ倒れる。本はすべて落下。
- ⑤小書架3・4 応接セット側に倒れる。本はすべて落下。椅子とパソコンデスクにかすり傷。パソコンには被害なし。
- ⑥小書架5 ドア側に倒れる。本はすべて落下。
- ⑦大書架1の左側の食器ケース 落下した本により破損したが、食器に被害なし。
- ⑧落下した書籍類も破損はない。

2. 復旧・復興への対応

1月19日、登校時、ドアの隙間から入室し、たまたま来合わせた学生数人に協力を求めて、ドアの開閉をふさいでいた本を片づけた。

その後は自力で、室内の落下した本を片づけ、大書架を壁に押し戻した。

3. 今後への提言

付属図書館の書庫を増設して、研究費で購入した図書はすべて図書館で保管するようにし、各研究室には、さし当たって必要な図書のみを常備することが望ましい。

ドイツ語第二研究室

当研究室は、幸いにも震災による被害をほとんど受けず、壁際の書架1連が10cm移動したと、及び机上より鉛筆削りが落下したにとどまった。

当研究室の震災に対する備えが万全であったというわけでは決してなく、たまたま幸運が重なったにすぎないと思われる。震災後は、本棚の配置、固定などに注意を払っている。

製剤学研究室

1. 被害状況

(1) 第1研究室

- ① 機器類に関してはほとんど落下、破損したものは見られず、大きな被害がなかった。
- ② 実験台の試薬棚の試薬瓶は全く落下していなかった。また本棚からもほとんど本は落下していなかった。これは、実験台や本棚が南北方向に設置されていたためと思われる。
- ③ スチール製のファイリングキャビネットの上に置かれていたプラスチック製のデシケー

タは滑って落下し、扉部分が破損し中のものが床に散乱していた。

- ④ スチール製の食器棚の開きの扉が開いて、なかの食器などが飛び出し散乱していた。
- ⑤ 三角フラスコに入っていた液クロの溶媒は床に落下しフラスコが割れ、蒸発していた。

(2) 第2研究室

- ① 東西方向に設置している実験器具戸棚、引出しは前方に倒れ、中のガラス器具が散乱していた。またこの戸棚の上に乗せてあった粘度計は床に落下していた。
- ② 2段に重ねたスチール戸棚も上段部分が前方に倒れ、前の実験台にもたれかかった状態であった。ガラス戸はゆがみ、前面のガラスが割れ、中のカタログや本などが床に散乱していた。戸棚前方にあったネオクールアスピレータの上に倒れたスチール棚の片隅がのって、上部が陥没していた。
- ③ ポンベは専用のポンベ立てに固定していたが、ポンベ立てごと倒れていた。このため圧力調整器は歪んだり、破損したりして使用不能であった。
- ④ 実験台の上に置いてあった溶出試験器が床に落下していた。
- ⑤ 試薬台の試薬瓶が棚などが倒れた衝撃等で2本床に落下して割れ、中の試薬が散乱していたが、フェノールと酢酸であったため、息ができないくらい異臭を放っていた。
- ⑥ 純水製造装置のイオン交換樹脂ポンベが倒れ、上部に付けられているメーターが破損していた。
- ⑦ デジタル攪拌器が転倒し、取り付けてあった攪拌棒がまがっていた。

(3) 測定室

何トンもある材料試験機が移動していた。

(4) 電顕室

電子顕微鏡装置や粉末X線回折装置などが移動していたが、破損したものはなかった。

(5) 実習室

棚の上に置いてあったアンドレアンゼンピペットが落下し、10本すべて割れていた。

2. 復旧・復興への対応

- ① 何台かの装置は落下し転倒していたが、1階であるため比較的被害は少なかったと思われる。
- ② 第2研究室は床に飛び散ったフェノールと酢酸の強い刺激臭で咳込み、長時間片付け作業を続けることができなかった。
- ③ ポンベは余震がしばらく続いていたので、すべて床に横倒しにしておいた。
- ④ 金属ナトリウムは危険物倉庫に保管した。
- ⑤ 有機溶媒は実験台の試薬棚から降ろして、保管場所を下方の戸棚に移動した。
- ⑥ 塩酸などの酸類は保管箱を購入し、他の試薬と別に保管し、保管箱は床に置いた。

3. 今後への提言

- ① 機器類をあまり高く積み上げない。
- ② 危険な試薬は、安全な保管庫に保存。
- ③ ポンベは、ポンベ立てごと転倒したので、壁に鎖などで固定するほうが望ましい。
- ④ 2段以上に積み上げたスチール製の書庫は滑って上段が落下しやすいので、上下を固定し、書庫自身も壁に固定したほうが良い。

薬剤学研究室

1. 被害状況

研究室は建物の1階部分にあったためか、比較的被害が少なかった。

(1) 研究室

- ① 機器類に関してはほとんど落下、破損した物は見られず、大きな被害はなかったが、液クロが1台、実験台のうえから落ちて、前面のパネルがゆがんでいた。しかし測定には特に差し障りはなかった。
- ② 大きな機器で、かなりの重量の物でも脚にコマが付いている機器（クリーンベンチなど）は、1メートル程位置が動いていた。また机などもすこし位置がずれていた。
- ③ 窓側においていた本は、ほとんど本箱や棚の上から落ちて、机の上や床に散乱していた。
- ④ 実験台の棚の上においていた、小さな試薬瓶は一部落下し、瓶が割れて中身が散らばり、他の容器のものと混ざって、飛び散っていた。
- ⑤ 窓際と反対側の壁に取り付けられていた棚においていた、ビーカーや三角フラスコといったガラス器具は、ほとんど割れずに残っていた。
- ⑥ 流し台の上に取り付けられた棚に、掛けておいたガラス器具も、ほとんど無傷でそのままの状態が残っていた。
- ⑦ ポンベは、専用のラックに固定していたが、台ごと倒れていた。ポンベは機器とつながっていたため、ポンベが倒れたはずみに、機器が引っ張られて位置がずれていた。しかしつないでいた配管に余裕があったため、機器の床への落下はまぬがれた。

(2) 準備室

- ① 壁際に設けられた棚の上の本や、試薬の瓶は、ほとんど落下せず、そのままの状態が残っていた。
- ② やはり、窓際におかれた机の上の本などは床に散乱していた。
- ③ コピー機などは、位置がずれていた。

(3) 実習室

- ① 地震のあった日は、3年生の後期最後の実習の日だったので、実習台の棚には、まだ、装置瓶などが置かれ、中身も詰まった状態であった。装置瓶などを置く調剤棚には、2種類あり、一つは、ガラスの棚で出来ているもの、もう一つは木製のものであった。ガラス製のものは、装置瓶と棚との摩擦が少ないためか、ほとんどの装置瓶が落下し、破損していた。一方、木製の調剤棚の方は、棚と装置瓶との摩擦が多いためか、破損をまぬがれた装置瓶もあった。
- ② 古い台の上に乗せていた、蒸留水製造装置は、台が倒れ、装置が転倒落下し、使用不能となった。
- ③ 調剤棚は、実習台の上に取り付けられていたが、一部ずれているものがあった。

2. 復旧・復興への対応

装置瓶の落下したものは、粉々に割れて、中に入っていた薬は、飛び散り、散薬とエキス剤が、混ざり、床の上にベッタリと張り付いたようになり（丁度ガムが床全面についたような状態）、後の掃除は大変であった。

3. 今後への提言

- ① 実習時の避難方法、避難場所を明確にしておく。
- ② 職員相互の連絡網を確立し、学生の安全確認に分担して当たる体制をつくる。
- ③ ライフラインが途絶した場合の措置方法を大学として文書化し、職員各自の責任分担、役割を決めておく。
- ④ 機器類をあまり高く積み上げない。
- ⑤ 危険な試薬は、安全な保管庫に保存。
- ⑥ そのものは、安全な試薬でも、混ざり合うと危険なものは近くにおかない。
- ⑦ ボンベは、壁に付けた鎖などで固定する。
- ⑧ 本やファイルの安全な保管方法を工夫する。
(本は重量があり、落下した時に、頭を直撃したりすると危険である)

薬化学 I 研究室

薬化学 I 研究室は 1 号館 2 階に位置するため上層階に比べると被害が軽くてすんだといえる。以下研究室（含実習室）における地震後の状況と復旧過程を、研究室全体、各人の研究体制への影響に分けて記述する。

1-1 被害状況の概観

研究室ではスチール製棚の転倒が目立った。書類のつまった二段重ねの書庫が扉側を下にして折り重なって倒れ、事務机周辺の棚が机、床の上に倒れ込むといった具合である。部屋のドアが外開きになっていたので部屋へ入ることが出来たが、内開きであつたらドアが開けられなかっただろう。コンピュータには幸いほとんど被害がなかった。全般にキャスター付きの台に乗せてあつたものは無事だったケースが多い。各自の勉強機の頭上の壁面に固定棚を取り付けて書棚として利用していたが、ご多分にもれずスペースが少ないためビッシリ書籍類を詰め込んでいたのが幸いして本のなだれ現象は起きずにすんだ。しかしよく見てみると棚板の接続部がゆるんでいる部分もあるので、揺れが相当なものだったことは容易に想像がつき、凶器が降ってくる場所で仕事をしていたことになる。

地震後、なんといつても一番心配だったのは薬品による火災であつた。なかでも、ナトリウムと溶媒。未処分のナトリウムが安全と思われる場所とはいえ、研究室の机の奥深く眠っているのを思い出していた。溶媒は、ボンブ瓶が実験台の試薬棚に並んでいるし、机上には液クロ用の溶媒がある。地震後はじめて部屋のドアを開けた時の不安感と、心配したことが起こっていないことを確認した時の安堵感は今でも忘れられない。実際には試薬ビンへの破損は少なく、ガラス器具が少し落下、破損し書類が散乱していた程度であつたのは幸運としか言いようがない。

実習室については、準備室の方はドア近くの戸棚が転倒し、ドアが開かず中へ入れなかった。準備室の奥半分には実習用の試薬とガラス器具がびっしり詰まっていた。当時2回生の有機化学実習ではナトリウムを使っていたのでそのためのナトリウムの缶が砂を敷いた箱に入れて床面に直接置いてあつた。試薬ビンは中仕切のあるダンボール箱に入れて、壁面に固定された奥行き深い木棚に収納してあつた。これも活性炭の容器が床に落下して炭まみれになった程度で助かった。ただし、ニトロ化の試薬は揃っていたし、もし試薬ビンがぶつかりあって壊れ、猛烈な発熱反応を起こしていたらどうなっていたかわからない。そう考えると試薬ビンを裸で置かず、箱に入れていたのが幸いしたのかもしれない。しかし何よりも、地震発生時に学生がいなかったため人身上の被害が出なかったことが最大の幸運であつた。数十班が一斉にガスバーナをつけて水蒸気蒸留している時だったら、また、ナトリウムを取り扱っている最中だったら……想像しただけで背筋が寒くなる。

1-2 復旧作業

以上が地震後の状況であるが、先にも述べたように物理的に激烈な被害はなかったので復旧は大体自分たちで出来た。その後、大学側から棚類の壁面への固定や、試薬棚の落下防止柵の取り付けをしていただいた。また、薬品保管庫も購入していただいた。

研究室においては、これを機会に、研究室、実習室の薬品の大整理を行い、不要な試薬や危険な試薬をすべて処分した。新カリキュラムへの移行に伴いストックしなければならない実習用の試薬量も減っている。システムを立体的に組む際は、落下防止対策を一応考えている。しかしまだ改善の余地があるので徐々に整備していきたいと考えている。

次に、各自の研究環境への被害と対応について述べる。

2-1 被害状況

IR室に所狭しと液クロのシステムが立体的に積み上げてあったので心配したが、RI検出器が転倒していたのを除いて辛うじて持ちこたえた。ガスクロ、UV、IR等の機器は無事であった。稼働中だったワークステーションについては、たとえ転倒を免れても停電によるショックでシステムダウンしたものと観念していたが奇跡的に助かった。落下を妨げたのは、機器が重かった上にキャスター付きの台に設置していたのと、配線を机上にまとめてあったためコードに機器が引っ張られることがなかったためと思っている。ガスボンベは3本立ての大きいスタンドに固定していたので水素ボンベも無事立っていた。窓際のコンクリート台に設置してあった旧式の精密電子天秤は見事分解されて部品が飛び散っていた。その他は棚に格納していたサンプルチューブをはじめとするガラス類、資料、データ類が散乱していたが大して影響はなかった。

2-2 復旧作業

破損した上記検出器、天秤は修理不可能ということで、後日、新品を購入していただいた。ハード面の被害は一目でわかるがソフト面の被害はすぐにはわからない。私の経験でも、秋頃機械の調子がおかしくなり結局買い換えたケースがあったが今から思うとその兆しは直後にあったように思う。異常であってもその現象は常に起きるとは限らないし、また故障が起きた時点ですぐわかるものでもない。日頃余り使わない機能がある時使ってみて異常に気づく事もあり得る。機器がすべてコンピュータ制御になっている今日、被害の見極めは難しく復旧には難しい問題がつきまどってくることを感じた。その他、転倒防止のため機器の設置台を補強、2段式機器の固定などを行ったがスペースの関係で立体的に組まざるを得ないので多少不安は残っている。

2-3 今後への提言

今回痛い目にあった事は皆よく覚えているので、それに対する対応はここでは触れませんが、一番大事なことは、今回経験せずにはすんだために頭では十分解っているつもりでも実感の薄い事、すなわち学生に対する対策であると思います。もし、実習中やゼミの時間に非常事態が起こったらどう対応するか具体的に考えておく必要があると考えています。

3-1 被害状況

破損器具、機器類：培養ファーメンター、減圧乾燥システム、分液ロート、Macintoshキーボード
転倒機器、棚類：四つ足クリーンベンチ、スチール製・木製整理棚
半転倒機器：恒温恒湿器、卓上乾燥器、オートスチール
薬品による被害：小 机上放置の薬品が少なかったため
以上器具、機器、薬品による被害は少なかった。

3-2 復旧作業

点検修理は比較的早くしていただき研究に大して支障なし。

ただ、ガスが使用できずクリーンベンチ内での無菌操作において不自由があった。

3-3 今後への提言

薬品は極力保存しないように努める。ガスボンベが使用できればいい。

薬品分析学研究室

1. 被害状況

(1) 研究室

- ① 南側に並んでいたスチール机や、棚はかなりの重量のあるものでも1メートルほど南北方向に移動していたが、上に置いていたコンピューターなども落下はしておらず、大きな被害はなかった
- ② 実験台の上に置かれていた機器類は多少移動はしていたが、落下、破損したものは見られず、被害はほとんどなかった。
- ③ 北側の壁面に取り付けられている棚のガラス器具が一部落下して破損し、床に散乱していた。
- ④ 実験台の上の試薬棚に関しては、液体の薬品を置いている部分に以前から落下防止のために針金を張っていたので、落下を防止することが出来た。
- ⑤ 食器棚は壁側に置いてあり、転倒はしていなかったが観音開きの扉だったため、中に入っていた食器類は、飛び出して落下し、ほとんど破損していた。

(2) 教授室

戸棚及び本棚がすべて倒れた。戸棚の中に保管していたガラス器具の大半が破損した。

(3) 準備室

- ① 壁側に設置していた二段重ねのスチール製の棚の上の部分が床に落下し、本は床に散乱しており扉は破損、棚も落下の衝撃で歪んでいた。
- ② 壁側の壁面に取り付けられていた棚の中の試薬、器具などは、そのままの状態が残っていた。
- ③ 北側の壁面に取り付けられた棚に関しては、ほとんどのものが落下、破損していた。
- ④ 機器類に関してはほとんど被害は見られず、測定には特に差し障りはなかった。

(4) IR室・研究用天秤室

- ① 床に設置していた熱量計が、かなりの大きさと重量があるにもかかわらず50センチほど移動していた。
- ② 机の上に置いていた熱量計の記録計は床に落下し、一部破損していた。
- ③ ポンベは立てて置いていたうえ、専用ラックにも固定していなかったため、転倒していた。そのためポンベに取り付けてあったガス流量調節計が破損していた。
- ④ それ以外のものは多少移動していただけで、特にめだった破損は見られず、測定には影響しなかった。

(5) 実習室

- ① 地震のあった日は、2年生の後期実習中だったため、実験台の上にはガラス器具や中身のはいった試薬瓶などが多数置かれており、また実習室は建物の5階にあるため揺れが激しかったのか、ほとんどすべてと言っていいくらいのもが床に落下、もしくは実験台の上で転倒し、破損していた。そして中に入っていた試薬が床にこぼれ、足の踏み場もないような状況だった。
- ② 実験台の上に置いていた恒温槽も水が入ったままでかなりの重量があったにもかかわらず、床に落下していた。
- ③ 北側のストーンテーブルに置いていた直示天秤は7台とも床に落下し、破損していた。
- ④ 壁側に設置してあった棚が、30センチほど全体的に移動していた。

2. 復旧、復興への対応

- ① 落下し破損した器具は、ガラスがかなり粉々に割れて危険だったので、丁寧に掃除した。
- ② 実習室は床に大量の液体がこぼれていたなので、跡かたづけをきちんと行った。

3. 今後への提言

- ① 大切な器具は倒れそうにない戸棚へ保管する。
- ② 薬品を安全な保管庫に保存する。

生薬化学研究室

被害の概要

生薬化学研究室の地震での物的被害は次のようである。

HPLC装置のポンプ1台と、紫外検出器1台が落下し、検出器は中破し、かなり大幅な修理を要した。ペンレコーダが2台落下しうち1台は多少の修理を要した。

溶媒溜去装置はいずれもかなりの被害を受けた。多数の水流ポンプが転倒落下し、うち1台は修理不能であった。また冷却水循環装置も3台が落下し1台は修理を要した。またその際水流ポンプや冷却水循環装置のタンク中の水や冷媒がこぼれて散乱し、周囲の機器、試薬、書類が冠水した。特に遠心分離器が冠水故障し修理費が多額になるので修理を断念し新品に取り替えた。水浴も一部転倒したが使用不能になったものはなかった。ロータリエバポレータは冷却管が曲がったり支柱が傾いたりしたが、奇跡的に破損はしなかった。水流ポンプや冷却水循環装置が多く転倒したのは構造が縦長で不安定である上、固定していなかったためである。これに対してエバポレータは実験机にきちんと固定していたので被害は少なかった。

コンピュータ関係ではプリンタが1台落下し外部がかなり傷つき、ディスプレイ1台が落下したが、幸い機能的な故障は起こらなかった。

測定室のGC-MS、TLCデンストメータ、GC、IRなどの測定室の機器は幸い無事で、CDに接続していた窒素ポンプが転倒し圧力調整器が破損した程度であった。総じて測定室の被害は少なく置いてあった高額機器にほとんど被害が及ばなかったのは不幸中の幸いであった。

CDに接続していた窒素ポンプが転倒したのは固定をしていなかったためであり、同じ部屋においてあったGC用のポンベはきちんとスタンドに固定しておいたため少し移動したが無事であった。また部屋の壁にチェーンで固定してあったポンベは少し傾いたが転倒は免れた。ポンベ類は安定が悪いのできちんと固定しておく必要が感じられた。ただ研究室にあった小さいポンベは全体が軽いためか置台ごと転倒しており、固定するにしてもよく考えなければならない。

機器の中には移動可能なよう車付きの台に乗せておいたものがあった。これらは全くと言っていいほど無傷であった。地震の揺れに従って揺れたためと考えられる。地震の揺れは方向により大きな差があったようであり、多くのものが落下した机と被害のほとんどない机があった。多くの研究室で天秤が落下破損しているが、生薬化学研究室の場合、天秤をのせていた机は最も揺れが少なく、わずかに動いた程度であった。

ガラス器具、試薬類、試料の破損は大変なものであった。連日のようにガラスの掃除に追われていた記憶がある。ガラス器具は大きいもの、小さいものまんべんなく壊れた。どれぐらい破損したのか正確に把握できていないが被害額は大きいと思われる。ただ壊れたガラス器具の中には古くなり、最近の技術の進歩で使わなくなったものもかなりあり、地震のため不必要となった器具が整理された面もある。研究室の復旧作業もほぼ片づいてほっとした頃、古いガラス製の水素添加装置が壊れ、中の水銀がこぼれて部屋の奥の隅に溜まっているのを見つけた。暗い中を苦勞して長時間水銀を回収したのが記憶に残っている。

棚に置いてあった試薬は転倒防止のための方策が取られていなかったため半分位は落下した。そのうち固形のもの最近プラスチック容器のものが多く転倒しても比較的無事であったが、溶媒類のガラス瓶は多く破損した。

研究室で最も懸念されたのは、研究上で得た大切な試料やデータが失われることである。場所の制約上机の上にアングルを組んで試料がのせてあったが、そのアングルを十分固定していなかったため多くのアングルが転倒し被害を大きくした。一部貴重な試料で失われたものもあった。データ類は文献、チャートなどが酸や水を被って汚れたものはあったが全く失われたものは少なかった。ただデータ入りのフロッピーディスクが少し失われたのと感熱紙に記録した

データは一部だめになったがこれは普段からコピーしておくようにしていたので被害を出さずにすんだ。

試薬室倉庫内の試薬は大きな被害が生じた。研究室の試薬倉庫はかねがねから問題点があった。すなわちこの倉庫は構造上建物の外部へつながっておらず入口以外に窓がない。また換気口も無く空気の入換えができず、普段から臭気が倉庫内に漂いがちであった。また停電すると真っ暗で内部が見えない。試薬倉庫の棚も転倒防止策を講じていなかったため試薬が多数落下した。倉庫の内部がよく見えないのは大変困ったことであった。しかし不用意に明かりをつけると引火の恐れがあり最初のうちは手探りで復旧作業を進めざるをえなかった。後で倉庫を整理してわかったことであるが当初無事だと思っていた木製試薬棚2台のうち1台は足下の付近で曲がっておりもう少し揺れが大きいと倒壊する危険があった。その試薬棚にナトリウムなどの危険物が保管されていたので倒壊していると火災など惨事を招いたかもしれない。

倉庫の床には強酸と有機溶媒がこぼれ、床の一部が溶けた状態になった。脱臭のため数回活性炭を床にまき臭気を吸い取らせたが、排気口が無いので完全には臭いがとれなかった。倉庫の被害は大きく震災後改修の必要があった。その際、問題点の改善を図った。建物の構造上の制約のため、外部への窓はつくれなかったが隣接する部屋への換気口を作り、その部屋を通して空気が外部へ流れるようにした。これにより臭気の倉庫内の停滞の問題は改善された。また試薬台はスチール製のものに取り替えるとともに転倒防止のため床、壁に十分に固定した。また各棚にも転倒防止柵を取り付けた。さらに危険物試薬庫に酸、アルカリ、危険な有機溶媒などを入れるようにした。研究室担当の生薬学実習では有機溶媒や酸を多く使用する。半年の間は全く使わない状態になり、また研究室と実習準備室が離れているため、危険防止のため使わない間は実習用の酸、有機溶媒などもこの危険物試薬庫に保管することにした。

倉庫以外には研究室の内部で建物に特に大きな被害は見られなかった。ただ実習室のダクトに1カ所大きな穴があいた。また地震後しばらくたって研究室のドラフトの床部分から水漏れを起こすようになった。これはドラフト床部分にいくつかの亀裂ができたからである。地震との因果関係は断定できないが地震の揺れで歪みが生じ亀裂ができたり広がった可能性もある。

薬化学Ⅱ研究室

1. 被害状況

HPLC……ポンプ、コントローラー、UV検出器を3段に積んでいたものは3段目が落ちた。しかし、落ちた装置のステンレスチューブ、操作ボタン部の破損程度で、コントローラー本体、検出器本体の機能は無事だった。

ロータリーエバポレーター用の溶媒冷却器（アイスクリームストッカー）が倒れ、中の変性アルコールがこぼれ、ロータリーエバポレーター、アスピレーターもともに倒れた。電源コンセント部分が途中で引きちぎれており、停電後の通電時に火災がおこらなかったのは幸運であった。

禁水試薬 (LiAlH_4 等) の入ったデシケーターは床上の隅に置いていたが、本棚が倒れて前面をふさいだため、ほとんど動かず、無事であった。

金属ナトリウムは倉庫の棚に隙間なく収まっていたため、落ちなかった。しかし揺れの方向が東西であれば棚から落ちていたと思われる。

その他倉庫には戦時中からと思われる古い試薬があり、危険であった。

FT-IRは揺れにより内部のミラーがずれたらしく、測定不能となった。

研究室の大きなガスボンベは壁から固定されていたので倒れなかったが、測定室のCDにつないであるヘリウムボンベは、床置きボンベ台に固定されていたため、台ごと転倒し、ゲージ部分が破損した。

その他の器械類は移動はしていたが、一応使用可能だった。特にキャスター付きのものは台ごと移動したため、本体には問題なかった。

実験台および倉庫の試薬類は、棚に低いのが棧がとりつけてられており、落下することはほとんどなかった。実験台上においてあったサンプル類が落下により一部破損した。

2. 復旧・復興への対応

1月17日は永倉教授が研究室をのぞいた程度。

18日朝 引きちぎれていたコンセント部分はずす。倒れた試薬ビンを少し片づけるが、一人では手のつけようがなく、また倉庫の中(金属ナトリウムがある)も恐ろしくて覗けなかった。

20日 金属ナトリウムをドラフト中に移す。倉庫の試薬を片づける。

23日から大学院生、研究生も含めて散乱した器具器械類を片づける。しかし各自も被災し、交通手段も閉ざされており、また職員は入試業務もあったので作業はしばらくかかった。

入試の終わった頃から倉庫の古い試薬を本格的に処分し始める。業者に引き取ってもらうためのリストづくり、梱包など。また倉庫にしまっていたしばらく使用していない古い器械類(DCCC、HPLC等)も傷みの激しいものは処分した。

3. 今後への提言

できるだけ試薬は買わない。保管しない。

積み上げない。固定する。高いところに重いものを乗せない。

勤務中、特に実習中(学生実習、特別実習)に災害が起きたときの対応を考える。実験室(実験台)には体をかくす場所がないので、重いものが落ちてきたとき避けようがない。

薬品製造学研究室

1. 被害状況

器具及び薬品の被害（詳細は施設課に報告調査済み）

① 天秤の破損（転落、横転及び傾斜）

1台（薬品製造学研究室）……………使用可と判断されたが、その後、秤量が安定せず、使用不能と判明した。

23台（1号館5F、学生実習室）……………使用不能、2～3台は修理可能であるが大部分は修理不能

② ポンベの横転……………大部分のポンベが横転、ポンベゲイジの破損したのものもあった。

③ 乾燥箱、蒸留水製造装置、中庄のクロマトグラフ装置、HPLCの検出器など、横転、一部損壊

④ 水道管の破損……………漏水あり、1月20日でも、床が一部濡れていた。（この時点では断水中）

⑤ 試薬類の散乱（有機溶媒缶の横転）

⑥ ファイルの散乱

⑦ 試薬棚、椅子の横転

⑧ 試薬台の破損

2. 復旧・復興への対応

① 入試業務の傍ら、研究室の被害状況を施設課に報告連絡し、手助けを受け、復旧・整備を行なった。必要に応じて業者を呼び被害状況を把握、修理可能なものは修理した。

② 復旧・復興への対応（薬大へのアクセス）

1月17日（火） 晴れ

a 交通機関は全面ストップ。

b 市外から神戸方面への電話は不通。

c 車による出勤も不可能（因みに、171号線は高槻→池田間約6時間かかった。
（平常時は30～40分程度で通行可能）池田付近で大渋滞により進行できず。）

1月18日（水） 晴れ

a 交通機関は全面ストップ。

b 家庭より神戸方面への電話は不通。

c 公衆電話はかかるとの知らせを聞き、関係各方面に連絡をとる。

d 研究室のスタッフ及びゼミ生の無事を確認

（研究室スタッフ（小山講師、小倉助手）と連絡）

e（教授会議長（松田教授）、教務部長（津波古教授）、学生部長（難波教授）と連絡し、以下の情報を得る。）

- (a) 寮の学生が無事避難したこと及び通学生については一部不明の学生もあるが、それについては学生部で調査している。
 - (b) 大学建物は無事、火災の発生はない。
 - (c) 緊急事態につき、「明日、臨時の学内理事会を開き今後の対策を協議する。」とのこと。
- f 学生からの問い合わせの電話が相次ぐ。(大学への電話不通の為)
- (a) 友人の安否
 - (b) 今後の講義計画及び試験に関するもの
(方針決定後、電話連絡してきた学生には、後程、教務より、文書で配布されたが、今後の予定を電話で知らせて、できるかぎりクラスの友人に伝えるように指示した。)
 - (c) 本人は無事だが、家が倒壊したので、知人宅に避難したとの報告が(一部学生より)あった。

1月19日(木) 晴れ

交通機関はストップ、臨時の学内理事会が開かれる由、その後、方針につき連絡するので、出勤できなければ自宅待機せよとの事。

1月20日(金) 晴れ

- a 交通機関一部開通(阪神電車 梅田-阪神甲子園間)。阪神甲子園より徒歩で薬大に出勤(弁当持参)。研究室の被害状態を確認。
- b 学生部より連絡不能の学生の問い合わせがあったので、芦屋の公衆電話より連絡し、無事を確認。
- c 出勤可能な人は出勤し、入試業務を優先して行い、各部署の後片付けは、これと平行して空いた時間に行なうようにとのこと。

1月23日(月)

交通機関一部開通(阪急電車 梅田-西宮北口間)。西宮北口より徒歩で薬大に出勤。入試業務及び研究室の後片付けを始める。

1月24日(火)

交通機関一部開通(阪神電車 梅田-深江間)。深江より徒歩で薬大に出勤。

1月25日(水)、26日(木)

交通機関一部開通(JR大阪-甲子園口間)。甲子園口より代替バスで本山に出て徒歩で薬大に出勤。

1月27日(金)

交通機関一部開通(JR大阪-芦屋間)。芦屋より徒歩で薬大に出勤。

1月30日(月)

午後1時 入学試験打ち合わせ会議

2月3日(金)

入学試験場の整備(本学、京都薬大、広島に分かれる)

2月4日(土)

入学試験

2月5日(日)

入学試験問題採点(大阪市内のホテル)

2月6日(月)

入学試験問題採点(大阪市内のホテル)

2月8日(水)

交通機関一部開通(JR大阪-住吉間)。JRに関するかぎり大阪方面より薬大までの足は復旧。

2月13日(月)

生協で予約弁当の購入可能となる。

3. 反省並びに今後への提言

- ① 器具の設置に当たっては、安全防災を考慮した策を立てること。
例えば、
 - a 試薬棚の転倒防止金具、試薬の転倒防止柵の設置。
 - b ボンベ類は頑丈な柱に取り付けた金具に鎖で固定する。
- ② 平時より防災に対する心がまえを徹底させること。
例えば、
 - a 定期的に避難訓練などを行う、
 - b 薬用ショーケース、ファイルケース、机の引き出しなどは使用する時以外できる限り鍵などかけて固定すること。
 - c 必要最小限度の器具・薬品類以外は置きっぱなしにしないこと。
 - d 絶えず整理整頓に気配りし、ゆとりある器具の配置を心がけること。
 - e 差当り使用しない薬品類は鍵など固定できる装置を備えた試薬棚に保管すること。
- ③ ゆとりある器具の配置ができるスペースを確保すること。
- ④ 災害を考慮した連絡網の充実・整備を行い、必要に応じて人手など応援が必要な部署にすみやかに出動できるようにすること。

一般化学研究室

1. 被害状況

(1) 研究室

1月18日(震災後2日目)に初めて1号館の建物に入ると、鼻をつんざくような悪臭が立ちこめ、呼吸が苦しくなる程の状態であった。一般化学研究室に入ると、X線回析装置(ゴニオメータ部分が本体からちぎれてしまっていた)、キャピラリー電気泳動装置、PCR装置の温度制御部分およびDNA合成装置などの研究用機器が実験台から床へ落下して、大破もしくは一部破損状態で散乱していた。一方、試薬棚の薬品も一部が落下して、試薬ビンが破損し、液体の薬品が床面に流れ出していた。さらに液体クロマト用の溶離液(塩化カリウム水溶液)や発

色試薬のモリブデン酸アンモニウム・硫酸水溶液のビンが転倒し、それらの溶液で書籍棚や机の上から落下した本や書類を汚したり、硫酸によりボロボロになり使用できなくなった本や書類が数多くあった。幸い、一般化学研究室には有機溶媒や発火性の薬品がなかったので、大きな被害はでなかったが、多量の有機溶媒を置いている研究室では、予期しないような被害が生じる恐れがある。

(2) 準備室

研究室と準備室の間のドアが、本棚の転倒により、はずれて通路を塞ぎ、本や本棚を片付けないと、研究室から準備室へは入れない状態であった。本棚の転倒により、コンピュータ用のプリンターが一部破損しただけの状態であったが、室内は本や書類が散乱し、足の踏み場もない状態であった。しかし、その他のものには被害らしい被害はなかった。停電により冷蔵庫に入れてあった要冷凍試薬の一部が使用できない状態となった（しかしこれは地震以外の停電でも、起こり得ることであるので、それに対しては研究室で対応を考えておく必要がある）。

(3) 教授室

壁に沿って南北に並べて置いてあった本棚（スチール製）が4つとも地震の揺れにより、約50～60cm程度動いたが、ガラス戸があるため書籍類の落下は全くなかった。机や椅子も僅かに動いた程度で床の上に落下した書類もなかった。従って、数名の学生の手伝いで、机、本棚を移動させるだけで、容易に元通りに復元することが出来た。

(4) 実習室（基礎化学実習室 J145）

実験台上に置いてあった学生実験用のガラス器具（ビューレット、ビーカ、メスフラスコ、ホールピペットなど）のほとんどが床の上に落ちて、割れた状態で足の踏み場もなかった。排気用のダクトの塩化ビニル管が数ヶ所にわたって、破損し落下していた。従って、ダクトは使用できない状態であった。

一方、実習用の蒸留水製造装置も大破した状態で床の上に転倒していた。また倉庫に置いてあった実習用の天秤も1台が転倒し、部品が破損して使用不能となっていた。実習室と倉庫の間の隔壁（ドラフト上部）に数本の大きな亀裂が入り、壁が一部落下していた。幸い実習室の復旧については、大きな被害がなかったこと、及び年次計画で、J145を夏季休暇中に改造する計画になっていた為に、一部の修理だけで1年生前期の基礎化学実習を行うことにした。そして夏休み期間を利用して、J145を全面改造した。

2. 復旧・修理

教授室、研究室、準備室、実習室などの復旧に先んじて、大学全体の復旧、業務を最優先させるとの学長の方針のもと、まず大学の業務・復旧が先に行われた。その後各研究室の復旧作業を進めて行くことになった。

幸い当研究室は大きな被害がなかったため、研究用機器、ガラス器具、本や書類などの後片付け、本棚の整理などを、助手（井上、檀上）が中心になってやってくれたので、復旧作業は比較的スムーズに進んだ。機器類の修理は業者等により、その対応がバラバラであった。迅速

に対応してくれた業者もあったが、電話でお願いしてもなかなか来てくれない業者もあった。長年、大学と取引のある機器、薬品納入業者の中には、大学の窮状に対し、暖かい配慮を下さった業者もあった。例えば、小さいことではあるが一部業者からは各研究室にピーカ等の寄付を頂いた。今後、大学としてもまた各研究室としてもこのような業者とは大切につき合っていく必要があるのではないかという感想をもった。

3. 今後への提言

日頃より、薬品類の管理、整理整頓をきちんと行っている場所は被害が少ないことを実感した。実験台の上でも、その都度その都度、後片付けをやり、ガラス器具や測定機器などを整理している実験台では大きな被害が出ないことを教訓として学んだ。

また機器や実験器具なども高く積み上げて置くことは、地震のみならず、火災、転倒など、多くの点で危険である。従って、日頃から高く積み上げないこと、また試薬ビンなども出来るだけ、しっかり固定した戸棚に入れておくように気をつける必要がある。

本学において、火災が発生しなかったことは不幸中の幸いであったが、他大学等では火災が被害をさらに大きくしている実情を鑑みると、有機溶媒の管理、発火の恐れのある薬品類の保管、機器類（実験機器、パソコン、コピー機、乾燥器等）の電気関係の管理（コンセントの入れ放し）には充分留意する必要がある。

薬品化学研究室

1. 被害状況

(1) 薬品倉庫

- ① 薬品倉庫の木製の棚がくの字型に曲がったが、あらかじめ落下防止の柵を備え付けていたため、2、3の試薬瓶および器具が落下した程度で破損は最小限にとどまった。しかし落下した試薬瓶の中にピリジンがあったため、悪臭を放った。
- ② 薬品倉庫内の危険物はプラスチック容器に保管してあったため、すべて無事であった。

(2) 研究室・準備室

- ① 研究室内の南面に備え付けてある書棚中の本はほとんど全て落下した。
- ② 研究室内の試薬棚の試薬瓶はほとんど落下しなかった。これはあらかじめ落下防止の柵を備え付けてあったことと、試薬棚の設置方向と地震の揺れ方向が同じ南北方向であったためと思われる。
- ③ ボンベ類は、ボンベ立てに設置していたにもかかわらず、ボンベ立てごとすべて横転し、調節弁の先はすべて折れていた。

- ④ 中圧液体クロマトグラフ (MPLC)用の圧力調節器は地震の揺れのため異常をきたし、地震後すべて調整が必要であった。
- ⑤ 2、3のMPLC用の記録計が落下した。
- ⑥ 研究室内の天秤1台および4F測定室中の精密天秤は落下したため、新規購入が必要であった。
- ⑦ 準備室内の純水製造装置は落下した。
- ⑧ 壁に固定していない机、ファイルキャビネット等は北側へ移動していた。

(3) 教授室

教授室内では書棚の本が一部落下およびプリンターのトナーもれなどがあったが、その他あまり大きな被害はなかった。

(4) 測定室

測定室内のHPLC用の溶媒はすべて落下した。

(5) 暗室

光学暗室内にあったガラス管立てが横転した。

2. 復旧、復興への対応

震災直後は入試の準備のため後片づけはできなかったが、入試後、約2ヶ月かけて、順調に復旧を行った。

- ① ガラス器具用の棚および書棚はすべて壁に固定した。
- ② 倉庫内の木製の棚は金属製に変え、さらに研究室内に試薬専用のキャビネットを備えた。
- ③ 危険物は専用の倉庫へ保管した。
- ④ 修理不可能なものは新規購入した。(天秤、蒸留水製造装置等)
- ⑤ 調整が必要な機器類は随時業者に調整させた。
- ⑥ ポンベ類も壁に固定するべきだと思われるが、まだ実行されていない。

3. 今後への提言

- ① 薬品の収納には簡単なものであるが、あらかじめ落下防止の柵をとりつけてあったので、被害は最小限にとどまったと思われる。薬品の保管には試薬専用のキャビネットを用いる等、十分安全に配慮すべきと思われる。
- ② 全ての設備、理化学機器に転倒落下防止策を施すべきと思われる。
- ③ 観音開き戸および引き出しは鍵がかかるようにする。
- ④ ポンベの転倒防止のための対策が必要である。
- ⑤ 今回の地震発生は就業時間前であったため、大学内の人的被害はなかったが、就業時間内の天災に備えて避難路を再確認することが重要と考えられる。

当たり前のことであるが、“天災は忘れた頃にやってくる”“備えあれば憂えなし”で常日頃から天災に対しての対策を講じることが重要であると再認識した。

臨床化学研究室

1. 被害状況及び復旧・復興への対応

平成7年1月17日昼過ぎ、家（宝塚市中山）から抜け道を通って大学へ到着。外からみる限りでは出火の気配もなく、一安心。階段で1号館5階へ登る途中、異様な匂いがして、薬品類がこぼれているのを感じた。5階の研究室のドアを開け唖然とした。大型冷蔵庫の扉が開いて中のものが床一面にこぼれ、キャピラリー電気泳動装置も見ると無残に落下していた。あたり一面足の踏み場もないほどの散らかりようだった。次に準備室のドアを開けこれも唖然、実験台が傾きHPLC装置が見ると無残に落下していて、ここも入れたものではなかった。気になっていた金属ナトリウムの様子を見に行ってみると、幸いにも容器が横倒してただけで、中の溶媒はこぼれておらず、安全な場所に移動しとりあえず帰宅した。

翌日、翌々日は部屋をかたづけするため大学に来たものの、手のつけようもなく散乱しているものを少し除いただけで、ただうろろろするのみ。何日目だったか記憶がないが電気がきていたので、パソコンが作動するか電源を入れてみた。ノート型パソコンを除き、デスクトップ型パソコンは全て起動することができ、瓦礫の中でけなげに作動するパソコンを見て感激した。1月23日と記憶しているが、大学院生と岡本寮の2人の学生に手伝ってもらい、研究室に散乱している大型機器（HPLCポンプ、コントローラ、キャピラリー電気泳動装置等々）をとりあえず実験台の上ののせてもらう。早く部屋をかたづけなければと思いつつも全然手足が動かず、災害に遭うとこんなものかと感じた。渡邊教授はJR芦屋駅から歩かれ、多河助手は経理課職員の車に便乗させてもらい出勤、片道3～5時間かけての通勤だった。

入学試験がすんでやっと部屋もかたづけ始め、すべての機器の作動チェックを行った。落下した機器が多かったにもかかわらず、意外にほとんどが正常に作動し驚いた。

2. 反省と今後への提言

稼動式試料棚（ストッパー付）に保管していた試薬類は一切落下せず、安全性が高いことが確認された。

パソコン類でラックにのせていたものは落下しなかった。

試薬棚にはストッパーを、スチール家具や実験台は固定を。また、冷蔵庫の扉にもロックが必要なことが今さらながらに明らかになった。

機器分析学研究室

1. 被害状況

本研究室は最上階（5階）にあり揺れが最も激しかったのか、研究室内は惨憺たる状態であった。しかし、その被害のほとんどは転倒や落下によるもので、出火がなかったことは不幸中の幸いであった。

鎖で固定したボンベ類は、それを引きちぎってまで転倒しており、余程しっかりした転倒防止策を講じていなければ、役には立たないことを実感した。

器具乾燥棚からはガラス器具が転落して破損していた。また、実験台上のエバポレーターも転落して冷却管部分のガラスが割れ、そこから流出した溶媒が床の塗装を溶かし、散乱したガラス破片が床に付着していた。

実習・測定室の惨状が最もすさまじかった。ガスクロマトグラフ装置や高速液体クロマトグラフ装置など高価な分析機器が机上から落下し、コードやチューブなどでぶら下がっている状態であった。しかし、幸いなことに、これら機器のほとんどは配線部位の修理程度で済み、本体には異常はなかった。不安定なモニター画面なども床に転落してはいたが、割れることなくすべて無事であった。

夥しいガラス器具類が、壁に作りつけの戸棚から転落し、粉々に割れていた。割れ物を高所に置かないという基本が守られていなかったためと反省している。

教授室の被害は比較的少なかった。ファイルボックスやロッカーが移動していたものの中身は無事であり、また、壁一面に作りつけた書棚はガラスも割れることなく、書籍の転落もなかった。

2. 復旧・復興への対応

1月20日（金）、伊藤教授及び和田講師（当時）が研究室内部をチェックした。研究室内は足の踏み場もない状況であった。

1月23日（月）、職員は入試業務に従事していたため、登校できた数人の院生と、応援に駆けつけた山野氏、近くに住む卒業生墨谷氏とで、研究室各部の応急整理に当たった。丸一日かけて行ったが、通路を確保するだけで精一杯であった。

その後、M-2生は修士論文作成に従事し、職員が入試業務の傍ら、徐々に研究室内の整備を行った。転倒した棚や機器などを元の位置に戻し、砕け散った無数のガラス破片を掃除するだけでかなりの日数を要した。

本格的な復旧作業は入試業務終了後からであった。機器、器具類の破損状態をチェックして、修理および点検を業者に依頼し、修理できない物は購入した。

ほぼ正常な研究活動が可能となったのは、ガスが供給（3月10日すぎ）されてからである。

3. 今後への提言

研究室内ほとんどすべての機器類が転倒するという惨憺たる状態の中で、意外にも実験台中央に設置している試薬棚からの試薬瓶の転落は極わずかであった。もし、転落して割れ、試薬や溶媒などが流出していたら、さらに悲惨な状況になっていたものと思われる。些細なことではあるが、試薬棚に2センチほどの棧があったこと、また、試薬棚前に反応装置組立のための支柱が渡っており、棚がその支柱に固定されていたことが、大きな揺れにも関わらず、転落を免れた理由ではないかと考える。小さな揺れの場合には、棧の効果はさらに大きいと思われるので、棚の固定と共に棧は是非取り付けるべきである。

5階に設置されている臨床化学研究室との共同試料室での被害もわずかであった。この試料室には、スライド式試薬棚が7列あり、この棚に試薬瓶などが並べられている。古い学術雑誌を保管している図書館の書庫形式である。棚同士の間スペースがないため、試薬瓶等が棚内では転倒していたものの転落はなく、破損までには至らなかった。大きな揺れのため、スライド式のレール部分が一部歪んだが、棚自体が倒れることなく、すぐに修復できた。今後の試料室設置の参考になるのではないかと考える。

衛生化学研究室

1. 被害状況

1995年1月17日午前5時46分、阪神・淡路地方は大地震の直撃を受けた。自宅で5時頃に目を覚ましていた小林教授は、連休中に速達で送られてきた大学院学生の修士論文原稿に訂正の朱を入れていた。直ちに自室の戸を開けて廊下に出たが揺れがひどく、歩くことが出来ないので階段の手すりにしがみついて揺れが納まるのを待った。トータル45秒位であったそうだが、非常に長く感じた。やっと揺れが納まって家族全員の無事を確認した頃、近所の人々が路上に出、路上駐車をしていた人達が車の明りをつけ、ラジオのスイッチをつけてくれたので、割合早く情報を手に入れることが出来た。震源地は明石海峡の海底ということだったので、われわれのところの明石が一番の被害地で、かなり痛め付けられたとはいえ、全壊した家がなかったので、今回の地震はこの程度だったのかと早合点した。段々と夜が明け、地震情報の詳細が流れてくるにつれ、これはただならぬことだと感じ始めた。停電が解除されたので、テレビを見ると長田区菅原商店街の火災が報道されていた。すぐに津川助手の家が菅原商店街の近くであったのを思い出し、安否を確かめようとして大学に電話したが通じない。そうこうしている内に東灘区本山中町や魚崎北町あたりの惨状がテレビに写し出され、あのあたりに住んでいた竹内講師の安否も心配になってきた。あせってあっちこちに電話するがどこにも通じず、ただ手をこまねいているしか術はなかった。

結局、その深夜、京都に住んでおられた津川助手の姉から電話があり、彼女の家は全壊、全焼したけれども家族全員無事で神戸市西区の方に避難しているとの連絡があり、ほっとした。

その翌日大阪八尾市の増田講師が公衆電話を使って連絡をしてくれ、竹内講師は丁度泊りに来ていた友人2人と一緒に大阪まで避難し、無事に弟さんのところに身を寄せているとのことで、これまたほっとした。

やっと落ち着きはしたものの、交通は寸断され、明石市に住む小林教授は何も出来ずただただテレビ情報にかじりつくのみであった。何しろ阪神地区に地震が襲うなど予想もしていなかったのも、大学研究室でも地震対策は何もしておらず、可燃性の有機溶媒が無造作に棚の上に置かれてあったので、出火したらひとたまりもないなと思いながら、テレビを見つめていた。神戸市西区の神戸学院大学や豊中の阪大理学部の実験室から出火したとのニュースを見るにつけ、やきもきしていた。やっと電話が通じ、事情を聞いたところ、本学の研究室で出火したところはなく、わが研究室も近くに住む足立助教授が大学に来て片付けて下さっているとのこと、くれぐれも火の用心をお願いして電話を切った。

神戸市北区に住む岡野助教授(当時)は、唯一通じていた北神急行で新神戸へ出、後は徒歩で、また大阪の増田、竹内両講師は阪急西宮北口駅から徒歩で大学へ出てくれ、大学無事の情報を送ってくれた。交通遮断の影響をまともに受けた小林は、じりじりしながら大学へのアクセスを探っていたのであるが、震災から5日目、意を決して姫路から播但線、山陰本線経由で京都へ出、ここで一泊、翌朝JR線で甲子園口まで出、バスに乗り継いでやっとの思いで大学へたどりついた。教授室は思ったほど被害が少なく、ほとんどが無事であった。しかし、研究室の機器類、試薬類の被害は惨憺たるもので、悲惨そのものであった。入試が近いということで、すべて手を加えずに入試業務に集中した。

大学院生(上田)が来ていて、灘区六甲の倒壊した家の屋根を突き破って外へ出たら火が近くに迫っていて、周りの人の助けを借りて母親と祖母を助け出した話しを聞いて、今更ながら被害のすごさを再認識した。

電話連絡がつくようになって、東京や九州、名古屋、富山、静岡などからひっきりなしに電話が入ってくるようになった。また、九州からペットボトルの水やインスタントうどん、仙台や東京からお米が送られ、日頃お世話になっていた方々からのお心づくしに涙が出るほど嬉しく感じたものであった。東京の知人からの電話で、外国の友人からも神戸の友人達の安否を安ずる電話やファックスが入っていることを知り、外国の友人、知人へ電話、ファックスを送り始めた。幸いなことに自宅にファックス専用の電話回線を引いていて、これが通常の電話よりよく通話できることに気づき、専らこの回線を利用し、外国へファックスを送り続けた。

ファックス専用の電話回線が通じやすいことに気がついてからは専らこの回線を利用して、担任をしているクラスの学生の自宅に電話を入れ始めた。何しろクラスの学生は4年生で、薬剤師国家試験を間近に控えていて皆不安を感じていたのも、姫路と大阪で行われる補講の情報を電話で送り続けた。この努力は無駄ではなかったようで、クラスの学生の精神安定にはプラスに作用したものと考えている。

結論として教育・実習関係、研究関係の被害は、天秤、骨密度測定装置の破損など報告した通りであり、修理または新しく購入した機器類も、まとめて報告した通りである。

教員の自宅の被害は、津川が全壊、全焼、小林と竹内が半壊、岡野が一部損壊ということであった。

2. 復旧・復興への対応

被害状況を調査し、その結果修理または新しく購入が必要な機器類等について、報告したように対応してもらった。

3. 今後への提言

以前、関東の人がみえたとき、試薬棚に可燃物が漠然と並んでいるのを見て、関西の人はのんびりしていいですね、とのコメントを頂いた。今にして思うと、これは大きな警告であり、皮肉であったと思う。平凡ではあるが、今後は可燃物や危険物の保管に関しては最大限の注意を払って万全の対策を練るべきと思った。

微生物化学研究室

1. 被害状況

第一、第二及び測定室の棚上の薬品はほとんど落下し破壊された。さらに培養室や地下冷蔵庫に置いてあった棚や培養器が倒れ一部使用不可になったが、いちばん研究室として痛手をこうむったのは、冷蔵庫中に入れておいたモノクローナル抗体や抗原試料が、冷蔵庫が倒れたことによってすべて消失という事態になったことである。長いものでは1年以上かけてやっと精製したものが一瞬にして使用できなくなった点は、それまでにかけた時間のロスのみならず巨額の研究費が消えたことを示すものである。なおこのモノクローナルは1年以上たった現在、今も精製中であり完成品は手中にない。また実験中に使用していた動物もケージの落下とともに一部は死亡、また生存動物もケージから出て混在し群識別が不能となるとともに1ヵ月以上の長期投与動物も死亡した。さらにガン細胞も移植中の動物が死亡したことにより新たにガン細胞をアメリカから分与を受ける必要が生じた。

2. 復旧・復興への対応

研究室内の薬品は一部反応していたため2、3日窓を開けて開放したのち水道水が使用できなかったことから池の水を汲んできてこれを用いて洗浄を行なった。

約1週間の間、毎日洗浄を繰り返しやっと床から除去し得たが、実験台にしみ込んだ溶剤はその後6ヵ月くらい異臭を放っていた。

動物室は、電気、水道が使用不能であったためその期間はまったく使用できず、ただ時間の過ぎ行くを待つことと、動物が低温下で死亡するのを見る他に手立てはなかった。

器具は、業者に各々点検を受け、一部修理のうえ使用を開始した。

しかし、失ったモノクローナルや動物、ガン細胞、そして免疫担当各種細胞は現在でも70%程度しか調整し得ず(1997年1月時点)、この点はまったく残念でならない。

3. 今後への提言

動物室やモノクローナル、細胞を保存する超低温冷凍器などは予備の発電機で稼働できれば損失はある程度食い止められたと考えるとき、このような装置が生物系には必要と思う。

生化学研究室

被害状況及び対応

震災後、初めて研究室や実習室の被害状況を目撃したときは、その悲惨な様子に驚いたが、幸い研究用の大型分析機器に破損や故障は見られず、全般に当研究室についての被害は他に比べて軽度であったと思われる。

まず、生化学実習室のラックが3つとも倒れ、そこに置いていた実習用のガラス器具がほとんど全て破損していた。これについてはラックを固定した。研究室内のポンベは全て転倒し、特にレブコに接続していた二酸化炭素ポンベは転倒したことによって管が外れ、ガスが全て流出していた。また、細胞培養室のポンベが転倒したと同時にクリーンベンチのガラスが破損し、クリーンベンチはしばらく使用不可能になってしまった。実習準備室では水道管が破裂し、水浸しになっていたうえ、試薬棚が転倒し、試薬瓶が棚から飛び出していた。瓶が割れたり、中の試薬が出てしまったりしていて、部屋の中に異臭を発していたが、幸い化学反応は起こらず、爆発も火災もなかったのが救いであった。試薬棚については棚の固定とともに、酸・アルカリ試薬や有機溶媒については棚が転倒しても扉が開かない試薬棚を購入し、そこに全て保管することにした。その他、本棚の転倒や、コンピューターやプリンターの落下、机の破損、さらに実験台上の調製試薬やガラス器具の破損といった被害も多々あるが、液体クロマトグラフィーやアミノ酸分析機、キャピラリー電気泳動などといった機器の被害が皆無であったことが、被害から立ち直り、研究を再開しようという良い励みとなった。

震災後、4日たってから徐々に研究室に研究室員が立ち入り、片付けを開始した。電気は復旧していたが水道、ガスがなかなか復旧せず、ベンゼン池から流れてくる水を汲んできて部屋の雑巾がけをし、雑巾を洗った水でトイレを流し、研究用に精製し、保存していた精製水を飲料水とした。寒さの厳しい中、ガスが使用できないので石油ストーブをつけ、食料としてその上で、さつまいもを焼き、缶詰をあたたためて昼食をとった。震災直後は阪急電車の西宮北口駅から本学まで、徒歩で片道2時間の道のりをひたすら歩き、学校に着いてもほっと息を付く余裕もなく、時々揺れる地震におびえながら研究室を片付けた。交通手段が徐々に復旧してきても皆通勤通学は大変ななかで、実験はできなくても勉強会だけでも再開させようと、文献を読

んだり、論文を作成したり、その時その時でできることを考え、少しでも前進していったことが、結局早い復旧につながったのだと思う。震災後に参加した日本薬学会で久しぶりに研究仲間と再会し、大変だったねと声をかけて頂き、また震災にもめげず、無事に発表ができたことは、本当に喜ぶべきことであった。

今回の震災で、大きな被害は免れたものの、いかに地震対策がなされていないか痛感させられた。機器類の設置場所、設置方法、また棚や書庫の固定、試薬の保管方法など、これを期にすべて見直し、危険だと思われるものについては固定したり、保管方法を変更したりした。現状ですべて大丈夫というわけではないが、今後も災害に対する対策を整え、被害を最小限に留める努力をしていかななくてはと思う。

薬理学研究室

1. 被害状況

廊下南側の研究室は、入り口付近に置いていた乾燥棚が転倒し、中のガラス器具がほとんど破損していた。研究室入り口右手にある流し台の上に置いていた高温乾燥機が転倒、落下して扉がゆがんでいた。また、壁に備え付けの薬品棚からは薬品類が落下し、実験台に備え付けの棚からはすべての物が落ちていた。研究室には壁一面に作りつけの大きな書籍棚があるが、これは当然のことながら転倒、中の書籍はすべて落下し部屋中に本が散乱し、足の踏み場もない状態であった。さらに落下した書籍の一部は、中央のテーブルをはさんで反対側にある食器棚にぶつかって食器棚のガラスが破損していた。また、中の食器についても外に飛び出したり、あるいは食器棚の中で破損したりしていた。その他、書籍棚に置いていた電子レンジが落下のため扉が破損していた。

天井からは、上の生薬学研究室で破損し、こぼれたであろう薬物か抽出液のような物が散乱した本の上に落ちていた。

廊下北側の研究室では、スチール製の書籍棚2台が転倒し、互いにくっついて微妙なバランスをとりながら下敷きになっているラボカートの上に乗っており、中の書籍が辺り一面に散乱してとても中に入れる状態ではなかった。スチール製のファイルボックスも引き出しが開いて倒れていた。机に乗せていたコンピューター (Macintosh) のモニターは落下していたが、コードがつながっていたため、宙ぶらりんの状態であった。

教授室は棚やロッカーが移動していたが、被害は少ない方であった。

実習室は見かけ上大きな変化は見られなかったが、設置している機器が移動していた。

その後機器の破損状況について調べたところ、前述の様に落下していた高温乾燥機については扉がゆがみ、本体も一部へこみができていた。宙ぶらりんになっていたコンピューターのモニターは画面にひずみができて正常に写らなくなってしまった。その他、HPLCなどの測定機器もいくつかは落下していた。また、CO₂インキュベーターや超高速遠心機、クリーンベンチ、低温冷凍庫などの大型機器はもともと備え付けていた場所から大きく移動していた。実習室に

備えてあった冷蔵ショーケースも移動し、さらに扉の枠が歪んで閉まりにくい状態になっていた。

建物自体についても調べたところ、全体的に壁には亀裂が走っていたが、特に南側の壁や柱に大きな被害が見られた。実習室の方も一見変化は見られなかったが、よく調べてみると何台かの実習台が傾いていた。

2. 復旧・復興への対応

機器についてはすべて点検し、破損状況に応じて修理および代替品の購入を行った。

亀裂の入った壁は施設課の方で補修してもらったが、かなり多かったのと、気が付かない場所もあったため、その後何度か雨漏りなどが見つかる度に補修してもらった。

実習室の実験台は、傾いている物についてそれぞれジャッキアップして直してもらった。

その他、書籍棚や家具についてはL字型の金具で壁に固定したり、扉のない棚にはストッパーを付けてもらった。

3. 今後への提言

家具、機器などを固定するのは当然であるが、天井が比較的弱いのではないかと感じたことである。というのも前述のように、上の階の生薬学研究室から抽出液のような液体が落ちていたためである。もう少し補強されていてもよいのではないかと思った。

さらに元々、床が歪んでいるため機器を置いても、不安定である。ある程度はストッパーなどで補強しているが、今回の様な場合、機器の転倒などに少なからず関連があるのではないかと思った。

また、脚下に車のついているワゴンのような機器は落下・転倒しているケースが少なかったことも今後、機器などの設置に参考になるのではないかと思った。

生薬学研究室

1. 被害状況

(1) 研究室

- ① 研究室右側、実験台上の液クロ装置一式がすべて落ち、液クロに使っていた溶媒ももちろん落ちて回りを濡らしていた。液クロを囲むようにして置いてあったラックも落ち、その上の本やカタログもすべて落ちていた。同じ台の端に置いてあった直示天秤の落下。
- ② その前の実験台そのものが少し移動していた。実験台上の試薬瓶とガラス器具などのう

ち奥の物は一部落ちていなかったが、多くは落ち落ちていた。その実験台上の取り付けのラックの止めねじが浮き上がって、外れていた。その台上には個体の試薬が入った試薬瓶が多かったので被害はさほどではなかった。実験台端の水道蛇口の上のハンディアスピレータはラックにくくりつけてあったので落ちなかった。他方の端のラックの中に入れていたハンディアスピレータは半分ほど落ちて、その拍子にスイッチが入りモータは回っていた。もちろんなかの水は流れだし回りを濡らしていた。実験台の両端に置いてあった減圧濃縮機2台のうち1台は実験台で支えていた冷却管を除いて落ち、1台は水浴だけ落ちた。

- ③ この実験台の右側には壁付きのドラフトがあるが、その中の酸やアルカリなどの試薬瓶は少し動いただけだった。ドラフトに向かって右側には背の低い実験台があり、遠心液液分配クロマトと凍結乾燥器を置いていたがすべて落ちていた。その上には壁に取り付のラックがあり、そこに置いてあった箱入りのサンプルチューブは床に散乱。ドラフトの左側の背の低い実験台の分光光度計は半分ぐらゐり落ちていた。それを囲むようにして置いてあったラックは倒れており、その上に乗っていた本や書類は落ちていた。
- ④ 南側の窓ぎわ、研究室向かって右側、柱取り付けの本棚内のファイルなどはすべて落下していた。その下側の扉のある部分は異常無しだった。その左側の机の上に置いてあった本棚は中の本と共に床にまで落下。その左側の机の前の本棚のファイルなどはほとんど落下。その左側の液クロー式はラックにあったが重なるようにして落下。その左側のコンピューターも落下。その左側、すなわち研究室の左端の壁ぎわのラックにあった液クロー式が落下。
- ⑤ 研究室入り口左側の実験台上のガスクロー式が落下。ボンベ台内の3本のボンベすべてが倒れていた。ガスクロを囲むようにして置いてあったラックが本やカタログと共に落ちていた。
- ⑥ その前の実験台そのものも一部移動。実験台上の試薬瓶、フラスコ、サンプルチューブなどのうち奥にあった物はずれるぐらゐりだったが、多くは落下。実験台上の取り付けの試薬棚はグラグラし、試薬などは一部落下。その回りにラックを組んでいたが、止めがねが浮いて、外れていた。実験台南側端のハンディアスピレータは床からのラックの上に置いてあったが、倒れて、中の水はこぼれていた。南端の減圧濃縮機のうち実験台に取り付けていた冷却管が割れた。そのそばのボンベは倒れていた。実験台北側端の前のキャスター付きの茶飲み台が少し移動し、上の物が落下。
- ⑦ 研究室向かって左側壁付き試薬棚の試薬ならびに試料が半分ぐらゐり落下。その下の液クロー式が落下。
- ⑧ 一部天井と壁との間に亀裂。

(2) 準備室

- ① 南方柱と壁の間に亀裂。
- ② 壁付き実験台ならびに中央の2連結実験台が西方向へ移動。中央の実験台は配水管及び排水管が付いているためもとに戻らない。
- ③ 本箱及び本棚は10-20cm移動したが、本や書類が詰まっていたので落ちなかった。
- ④ コンピューター、ディスカッション顕微鏡、液クロー式、ロータリーエバポレーター一式、大型検体乾燥器が落下または転倒。

- ⑤ 融点測定器、上皿式電子天秤およびpHメータが破損。
- ⑥ プラスチック製乾燥器が破損。
- ⑦ 壁付き試薬棚の試薬ならびに試料が落下、破損、散乱。
- ⑧ ロッカーが移動。

(3) 教授室

- ① 壁付きガラス入り本箱が倒壊し、ガラスが破損し、一部下壁が剥離。もちろん本箱の上ならびに中の本、額および試料は落下。
- ② 低い台上のフラクシオンコレクターが落下。
- ③ ロッカーが移動。
- ④ 一部天井と壁の間に亀裂。

(4) 実習室

- ① 実験台上の顕微鏡とカラーテレビシステム 2 組みが落下または移動。
- ② 標本ケース 2 台破損。
- ③ カートリッジ純水器転倒。
- ④ 額が落下。
- ⑤ 床 2 ケ所破損。

(5) 倉庫

- ① 試薬棚の試薬ほとんど落下し、悪臭。
- ② 試薬棚のガラス器具などが落下、一部破損。

(6) 顕微鏡倉庫

2 列の棚から学生実習用顕微鏡がほとんど落下。

(7) 標本室

- ① ステンレス製ガラス入り標本保管庫の引き戸が開き、庫内の標本瓶はほとんど倒れ標本が散出し、床に落下。一部瓶も破損。
- ② 標本保管庫 1 個のガラスが破損。

(8) 暗室

台上の炭酸ガス培養器が一部破損。

2. 復旧・復興への対応

- ① 試薬棚、顕微鏡棚など棚には可能な限り転倒防止用板を取り付けてもらった。
- ② ラックは実験台や柱などに可能な限り固定してもらった。
- ③ 落下等した機器を点検してもらったところ、幸いにもほとんどが無傷あるいは一部修理でよく、買い替えてもらったのは、直示天秤、学生実習用顕微鏡 9 台および標本ケース

2台であった。

- ④ 酸や発火性など危険性の高い試薬は、購入してもらった固定の保管庫に保存した。

3. 今後への提言

- ① 床に近いものほど当然ながらそのままだったので、出来るだけ床近くに置きたいところであるが、広さの限界、使用上の都合のためそうは行かないので上の方に置いているが、方が一もう一度起きても被害が最小限度であるようにしているつもりである。すなわちガラス製の試薬瓶、貴重な試料及び重い物などは上の方の棚に置かないで出来るだけ下の方にあるいは実験台中央に置くようにする。やむをえない物は出来るだけ固定するようにする。
- ② 落ちた場合に散乱して始末の悪い物は板張りの引き戸付き棚がよい。
- ③ 散乱した障害物のため教授室の内開きのドアはそれらを除かないと開けられなかったので、部屋のドアは外開きの方がよい。
- ④ 講義中あるいは実習中に地震が起きた場合の学生への対応の方法を教職員に徹底させる。

放射薬品学研究室

1. 被害状況

(1) 3階

管理室の食器棚が転倒し、食器類が破損、散乱した。実習室ではボンベが転倒し、また、GM計数装置がほとんどすべて落下し、数台が使用不可能となった。

(2) 2階

キャビネットで不安定なものがいくつか転倒していたが、試薬棚が転倒しなかったのが幸いであった。

2. 復旧・復興への対応

研究室のスタッフで動かせるものは1月23日以降入試業務の合間に片付けた。

3. 今後への提言

今回の地震は早朝であったのが不幸中の幸いであったが、地震に限らず突発的な事故（火事

など)が日中の学生のいる時間帯に起こったときにどう対処すればよいのか教職員が知っておく必要があると思われる。

新5号館建築委員会

震災当時、新5号館を建築中であったが、当時の工事現場では特に被害はなかった。早々、地震への対策として鉄筋量を増やし、帯筋間隔を狭めて柱の強度を上げることにした。ただ、震災後遺症として、生コンクリート工場の倒壊や道路事情の悪化などが重なり、平成8年1月末の竣工予定が若干遅れた。しかし、竹中工務店をはじめ関係各位の努力により、約1ヶ月程度の遅れにとどめることができ、3月6日(水)に無事竣工式を迎えることができた。

広報委員会

奇しくも「ききょう通信」第97号は阪神・淡路大震災が発生した1995年1月17日付の発行となっている。もちろん、通常の新聞と異なるので、1月17日付といっても大震災の報道は何もなく、1994年10月に本学で行われた第44回日本薬学会近畿支部大会の記事が至極平和に報道されている。この号が出来上がったのが日付よりも早く1月13日頃だったので、教職員、学生には大震災までに配り終えていた。外部への発送は、大震災後の忙しい合間をぬって総務課の方々によって行われた。

入試も終り、やっと落ち着いた2月上旬、4月発行予定の「ききょう通信」第98号についての編集委員会が開かれた。毎年4月号は新入生歓迎号なので、本紙を「大震災特集号」一本という形で発行する訳にはいかないのが、大震災特集の号外を出すことにした。それでも本紙の表紙には2月1日に撮影した無事の1号館の写真を掲載し、「大地震兵庫県南部を直撃！本学の教職員、学生は全員無事 しかし、御家族に御不幸、建物の被害は軽微、しかし、機器類、試薬類の被害は深刻」という見出しをつけた。また、私の大震災体験記ということで、全焼、全壊の被害を受けられた津川助手、日高主査の体験記を掲載すると共に、岡本寮男子学生奮闘記！と題するルポルタージュ風の記事を掲載した。号外は「大震災特集！」ということで、各部署からのお知らせ、ニュース、ルポルタージュなどを掲載した。

日本薬学会機関誌の「ファルマシア」(第30巻第7号)の地区通信には岩佐助教授が、大学の被害状況を簡潔にまとめると共に多方面からの見舞いや激励に対する感謝を述べた記事が出されたが、これは時機を得たヒットであったと思う。

今回の広報委員会の対応は、一応は当を得たものといえる。また、このような事態が起こっても今回のような対応でよいのではないかと考えている。

卒後教育委員会

被害状況

平成7年度の卒後教育講座については震災の影響（被害）は無かった。

卒後教育講座は第15回より、神戸市中央区脇浜町の川崎製鉄「西山記念会館」を会場として講演会をおこなってきた。平成7年度の「第21回卒後教育講座」は9月2日（土）、9月3日（日）、9月10日（日）に同会館で無事に実施することができた。

川崎製鉄本社（西山記念会館に隣接）は、震災のために大きな損傷を被った。西山記念会館は、1月から8月までの間、川崎製鉄本社の事務所として使われていたが、同社の配慮で9月以降は一般使用が許可されることとなった。本学の卒後教育講座は9月の開催であったので、幸いにも支障を生じることなく実施することができた。

また、卒業生あるいは参加希望者への開催通知は例年7月に発送しているので、平成7年度卒後教育講座の開催に関する問い合わせは震災後に僅か数件あった程度であった。

なお、第21回卒後教育講座の人数等を参考までに記しておく。この数は、前年度とほぼ同じである。

参加申込者数	: 1,358人
参加許可者数	: 797人
テキスト購入者数	: 735人

大学院委員会

阪神・淡路大震災が発生した1995年1月17日直後の1月21日（土）及び1月28日（土）の2回、大学院修士論文発表会が予定されていたが、とりあえず延期ということですぐに電話で連絡をとった。その時点では2月中旬位に何とか実施しなかったのであるが、2月に入っても交通事情の回復はほとんど見られず、また院生の中には全壊、全焼、半壊の被害を受けた者もあり、揃って発表を行うことは困難と判断し、2月初めに修士論文発表会は中止と決定した。その代わりに、修士課程2年の各院生に対し、2月中旬までに論文を完成させて主査、副査のところに提出するよう、提出が困難な時は各審査委員の自宅へ郵送するように指示を与えた。全焼や全壊の被害を受けた院生も頑張っ期日までに論文を完成させてくれたので、予定通り3月3日（金）の大学院委員会で最終審査が終了し、3月17日（金）の大学院修了式において全員に無事学位記を授与することが出来た。

震災などの時の処置は迅速かつ明確に行わなければならないが、今回の大学院幹事の行った処置は、概ね良好であったと判断している。

神戸薬科大学親交会

親交会役員会では、親交会事業施行規則第10条により、阪神・淡路大震災で相当の損害を蒙った会員に対し、次の見舞金を贈った。

親交会平成7年度決算 震災見舞金

(1) 全壊	見舞金額単価	5万円	15人	750,000円
(2) 半壊	”(自宅)	5万円	14人	700,000円
(3) ”	”(借家)	3万円	3人	90,000円
			合計	1,540,000円

神戸薬科大学桔梗育友会

学生1,279名、職員132名に犠牲者がなかったのは幸いなことであったが、会員のご家族に4名の犠牲者があり、また、多数の家屋の倒壊等があったのは大変残念なことであった。ここに、ご冥福をお祈りするとともに、お見舞い申し上げたい。

当時の育友会会長（藤岡弘）は、会員相互の助け合いの気持ちから「被災された方々を励まし、お役に立つことを念願して」見舞金を募ることを役員に文書で諮り、全員の賛同を得られた。募金の概要は以下のとおりであった。

- (1) 募金要領：①1口5千円（何口でもよい）
②払込期間 — 平成7年4月末日
③払込方法 — 加入者負担による郵便局指定用紙を使用
- (2) 募金総額：507件 4,345千円
- (3) 見舞金贈呈対象者：4月入学の1年次生から3月の卒業生までの5学年で自宅等の全壊・半壊者121名
- (4) 見舞金額：一律3万円（募金から2万円、桔梗育友会見舞金規程から1万円）
- (5) 募金残金の処理：①189万円余は、桔梗育友会奨学資金へ繰入
②上記に係る桔梗育友会奨学生規程の改正として、下記条項を追加した。

（奨学金の額）

第4条

- 3 水害、地震、火災等のやむを得ない事由により学資の支弁が困難になったと認められた場合には、特例として1～3年次生にもその授業料を限度として貸与することができる。

神戸薬科大学同窓会

あの日、岡山で

会長 鑄方 元子

あの当時の同窓会活動を振り返ってみましょう。

干支でいう「猪年」は荒れる年廻りとかきいていました。漠然と政変、経済等を思い、民族紛争とか地震地帯での大地震も脳裏にありましたが、よもや神戸で、全く予告無し『大震災』が起ころうとは！ 1月17日、私事で恐縮ですが、忌中でその上、自宅の一部が岡山県の土地収用に遇い、土蔵を解体する日で、岡山でマンションに仮住まい中でした。当日は解体があるので早起きして立ち会う予定でした。生まれて初めてのマンション暮らしの18日目。震度4の揺れで目覚め坐っていました。母の祭壇に異常がないのを確かめ、テレビをつけました。当初、震源地が淡路とか神戸とは報道されなかったように思います。時間の経過につれて被災地は、阪神間であり、凄惨被害だと判ってきました。

土蔵の解体が始まりましたが、立ち会いどころではなく、大学の様子、友人の安否をと電話を掛続けました。電話の無力さに苛立ちながら。公衆電話なら掛かるよと知らせてもらい、公衆電話の梯子に走り廻りました。徐々に僅かずつ様子が判り、大学の建物は無事であるが、研究室等には被害甚大とか。そうこうする内に、私の芦屋の仮寓は駄目らしいと知りました。「住まいは全壊でも、恐怖の体験もせず、命が有るだけで有難い。物がなくてもよい。」と昨年末に97才で亡くなった母に感謝しておりました。やがて、各方面との連絡もとれ始めました。悲しいことに同窓会会員に、犠牲者があることを知りこれは大事、情報を蒐集しても対応できるのは、電話とFAXだけで、交通の便はない。犠牲者の最初の知らせは何と元同窓会会長の本橋キミ様、未だにご指導を仰いでいた方でした。次はおとなしさが印象的な前田都様、そして家政学の故児玉寛二郎非常勤教授のお孫さんの小亀寛子様。最後はお二人の死を一度に知りました。兵庫県女子薬剤師会行事にご一緒し、よく話し合った明るい翁美智代様と神戸っ子で演劇部だった奥山敦子様でした。5名もの貴い大切な会員を失い、今も胸が痛みます。何という運命の悪戯でしょうか。ご冥福をお祈りしております。お知らせを受けた状況に応じて、岡山で対応しましたが、充分なことができず申し訳なかったと、今も気になっています。犠牲者5名とか、大学の状況等は、できる限り各支部に連絡しましたが、全会員へのお知らせは物理的に不可能でした。会員から何の知らせも無かったとお叱りを受けましたが、お許し下さい。支部から、母校への義援金をとのお申し出がありました。この時、私は『幸いにも、母校の被害は建物が無事。学生、教職員の犠牲者も無く、ただ教育研究用機器、薬品等の被害は多大との事だが、同窓会は会員の犠牲者が5名にも及び、家屋・店舗の全壊半壊の方が非常に多い様子だから、義援金を募るならこの状況下では母校も大切だが、先ず会員の相互扶助を優先させたい。』と考えていたので、各支部には募金は、暫く待って頂きたいと連絡しましたが、間に合いませんでした。

当時大学は、『平成7年度学部入試』の緊急対策に全学挙げて集中しておられました。試験場について広島に会場を確保したが、同窓会広島支部にどんな協力をお願いできるかとの打診を受けました。「大丈夫です。どの支部でもどんな協力でもできます。大学の要望をお聞かせ下さい。」と津波古教務部長に胸を張って答え、直ぐ細川千寿子広島支部長と打ち合わせをし、

更に大学と広島支部との打ち合わせを重ね、2月4日、試験監督業務は若手で、裏方的業務は年配者が手伝い、無事終了。母校から多大の感謝が寄せられました。担当した会員の満足感と喜びも一入だったとか。

同窓会で出来る、母校への協力の一つとして、常々私の描いていたものが、大震災をきっかけに実現し、感慨深いものがありました。平成8年度入学試験にも、広島会場が予定されています。変則的運営を止むなくされた同窓会業務も、3月に入り、ききょう会館で機能し始めました。

みなさまの身近な同窓会であり続けるよう、役員一同と、平成7年4月1日からもう1期協力ですが務めさせていただきます。ご報告とご挨拶まで。

（「神戸薬科大学同窓会会報」第5号から転載）

思いがけないお手伝い

広島支部 谷保 敬子

阪神大震災後の2月4日、急遽広島入試会場が設けられ鑄方会長、細川支部長指示のもと、役員と同窓生21名が、試験のお手伝いと言う大役を仰せつかりました。3日、4日の打合わせ、試験監督、先生方のお世話等この急場を乗り切ろうと同窓生の輪ができ、混乱無く終了致しました。緊張されていた先生方から笑みが零れ、皆様本当に嬉しく貴重な体験に感謝致しました。また、7月2日リーガロイヤルホテル広島に於いて7年度総会が催され、永倉学長、二宮教授、渡邊教授、鑄方同窓会会長にご来広戴き91名の同窓生が楽しい一時を過ごしました。学長より大学近況、先の入試時のお礼等お話がありました。来年は広島国際会議場に於いて入試会場が設けられるとの吉報を頂き、広島支部にとりまして喜ばしい限りのお話を伺うことができました。

（「神戸薬科大学同窓会会報」第5号から転載）

神戸薬科大学生活協同組合

1. 阪神大震災活動概要（'95.1/17～1/28）

1月17日 兵庫県南部地震発生当日

4名出勤。ガス等、施設の安全を確認した。店舗・事務所の被害確認と従業員の安否確認を開始。寮生230人分の食料を薬大生協と甲南大生協の在庫でおにぎり約80個、カップラーメン約100個、パン約120個、ペットボトル飲料約40本、お菓子約40個を確保した。

1月18日～1月21日（1週目）

一旦、甲南大生協へ事務所を移動、甲南大生協職員数名と従業員の安否確認を行う。店舗・

事務所の片づけ・復旧作業を開始。

1月19日／全国大学生協同組合連合会（以下大学生協連またはNFUCA）が大学生協神戸事業連合内に現地対策本部を設置し、食料や生活物資の配送など、被災地域にある大学生協への復旧支援活動が開始される。

1月20日／同日、資金繰試算を行い、取引先に買掛金の支払猶予を要請した。

1月21日／電子メール（大学生協連のFirstClassサーバー・Nifty-ServeのNFUCAフォーラム）によって全国大学生協同組合連合会・大学生協神戸事業連合とのコミュニケーションが確立。支援を依頼する一方、菓大の状況を逐一伝えることになった。また、全国の大学生協の神戸への支援に関する情報を把握した。

1月23日～1月28日（震災2週目）

本格的な復旧作業を開始。大学生協連の要請により全国の大学生協からかけつけたボランティアの協力を得て、急ピッチで作業が進められた。（仮営業開始まで毎日店舗復旧の支援を受けた）

食堂部にて電話連絡の取れないパート職員を訪問し、安否確認と救援物資の配布を行った。給与計算委託業者が被災したため、1月分の給与支払いができなくなった。金庫内の現金と甲南大生協からの仮払いで、必要な従業員には給与の仮払いを行う。

2. 震災被害の概要

(1) 被害額

什器・器具・備品/10万円 商品/4万円 食材/12万円 営業機会損失/1400万円
主な臨時の出費/18万円
被害総額/1444万円（1995.3.末現在）

(2) 従業員の安否・被害

全従業員22名のうち、死亡/0名、負傷/2名。住居の全半壊/10数名（罹災証明による）。購買部店長は自宅が居住不能に。
上記のうち退職者/6名（パート/アルバイト職員）

(3) 地震直後の店舗・事務所の被害状況

- ① 書籍購買部………本棚が動き、本が床に散乱。什器が倒れ破損。文具・食品など商品が落下し、散乱。アイスクリーム等は冷凍庫の停止により廃棄。肉まんの蒸し器が倒れ破損。
- ② 食堂部………食器の破損、フライヤー（揚げ物機）の油が厨房の床に散乱。停電により停止した冷蔵庫・冷凍庫の食材は後日腐敗等により廃棄。
- ③ フードショップ…商品落下。
- ④ 総務部・理事会室…デスク・什器をはじめ金庫が移動。コンピュータの落下・破損はなかった。
- ⑤ 倉庫………商品・保管書類が落下し、散乱。レジがラックから落ち、破損。

3. 受けた支援等

- ① 企業（4社）及び大学生協神戸事業連合、日本生活協同組合連合会、兵庫県生活協同組合連合会、全国の大学生協のみなさんから支援をいただいた。
支援金総額 194万円（95年度決算に計上）
- ② 30の出版社などが、被災した学生のため、テキストの無償提供に協力下さった。
- ③ 卒業生による出資金の全額または一部の寄付
115万円（95年度決算に計上）

4. 震災日誌

1月25日

- ① 安否の確認状況 書籍購買サービス部 3/4人 食堂部 13/19人 総務部 3/3人 合計 19/26人。
- ② 取引銀行甲南支店は、×。岡本出張所に対応可。資金繰りのメドを急ぐ。事務所の復旧のため人員が必要。
- ③ 明日より生協総務部内の片づけに入る。
- ④ 書籍購買サービス部の復旧はおおむね終了。
- ⑤ 食堂については比較的被害が軽かったので、復旧はほぼ完了。ただしガス、水道、電気については破裂損傷の恐れもあるので、大学の施設課に点検の依頼をしている。

1月26日

- ① 安否の確認状況 昨日と変わらず。
- ② 生協総務部内の片づけ終了。被災前の状況にはほぼ復帰した。ただし、現在事務所は閉鎖中。事務機能は甲南大学生協へ移動。総務部の復旧により、薬大生協はほぼ復旧終了。

1月27日

- ① 安否の確認状況 書籍購買サービス部 3/4人 食堂部 14/19人 総務部 3/3人 合計 20/26人。
- ② 書籍購買サービス部は被災者への教科書販売の準備に追われている。また、大学から文具類、生活雑貨品のかなり細かな要求が多数有り、対応を迫られているが、少々対応が追いつかなくなっている。営業は、来週2/1(水)を目標としているが、パート人員の確保ができない場合は後ろへずれ込む可能性もある。
- ③ 食堂については業者等のデリバリーを利用した営業方法を模索中。
- ④ 甲南大学生協へ移動していた薬大生協の事務機能を、薬大生協へ復帰させる準備中。寸断されたLANの復旧、各種応対のできる体制をつくるのが課題となっている。来週1/30(月)より薬大生協へは専従3名が常駐するようになる。

1月28日

- ① 安否の確認状況 昨日と変わらず。
- ② 書籍購買サービス部で進めていた被災者への教科書販売の準備は終了。大学から文具類、生活雑貨品のかなり細かな要求が多数あるのは相変わらず。現在は在庫からかき集めたり、甲南大学生協等から送荷してもらったりして対応しているが、次第に入手が困難になってきている。営業は、来週2/1(水)を目標としているが、現時点ではパート人員の確保はできていない。
- ③ 食堂については業者等のデリバリーを利用した営業方法を模索中。また寮食堂の運営方法についても検討中。

1月30日

- ① 安否の確認状況 1/28と変わらず。
- ② 相変わらず大学から文具類、生活雑貨品のかなり細かな要求が多数ある。現在は営業開始に向けパートへの出勤要請をするために連絡を取っているが、未だに連絡がつかない。
- ③ 食堂は2/4の入試時の教職員分の弁当を受注した。本日の段階では個数は未定だが、明日確定する予定。2/5、大阪市内のホテルを使用して職員が作業をする予定であるが、その日に職員分の食事についても依頼があった。個数は80個程度。入試後の2/7～10について、救援物資以外の食事を教職員へ提供できないか現在検討中。2月の第3週に何らかの形で営業を再開できないかも検討している。
- ④ 寮食堂については、大学も復旧に期待を寄せているが、現時点で営業を再開すると弁当対応しかできないため、実家等に避難している学生が寮へ戻った時点で、食生活環境が悪化することが懸念されている。
- ⑤ 寸断されていた生協内のコンピュータネットワークの回復が終了。通常どおりの使用が可能になった。各種応対のできる体制をつくるのが課題となっている。明日より連合からヘルパーが送られてくることになり、仕入返品伝票の処理、財務管理システムの再稼働を行う。
- ⑥ 共済について加入者への連絡を行う予定。

1月31日 (その1)

- ① 安否の確認状況 書籍購買サービス部4/4人 食堂部14/19人 総務部3/3人 合計21/26人。書籍購買サービス部、総務部の職員全員の安否は確認されたが、食堂部5名が未確認。
- ② この間多かった大学から文具類、生活雑貨品のかなり細かな要求は、ここにたって落ちついてきた。
- ③ 書籍購買サービス部営業開始に向けパートへの出勤要請をするために連絡を取っている。1名に連絡がついたが、いつから出勤できるかは未だはっきりしないとのこと。当初の目標であった2/1の営業開始は不可能になった。店舗でどの程度の営業ができるかを再検討して、早期営業再開をめざす。
- ④ 食堂は事業連合からのボランティア2名の協力を得て、食堂、フードショップの棚卸しを行った。計数は終了。コンピュータ入力を残すのみ。
- ⑤ 事業連合からのボランティア2名の協力を得て、未検算のままになっていた伝票の処理

を行った。検算は終了。2/2パートの担当者が出勤予定なので、連合への送達処理と仕入返品伝票のコンピュータ入力をしてもらう。明日は財務管理システムへの仕訳伝票の入力をしてもらう予定。

- ⑥ SB部供給日報、D部供給日報、物品請求書集計システムの入力再開。供給日報については一月分の入力は終了、月末処理も終了している。物品請求書集計システムは2/10に学内に請求書を配ることができるように準備中。ただし、2/10に学内に請求書を回すかどうかは検討の余地有り。
- ⑦ 事業連合からのボランティア2名の協力を得て、生協倉庫内の整理を行った。2名の協力を得られたことで、復旧に対する遅れはかなり取り戻せたように思われる。本当に助かった。

1月31日（その2）

- ① 安否の確認状況 書籍購買サービス部4/4人 食堂部15/19人 総務部3/3人 合計22/26人。食堂で本日確認された方は、腕を骨折されているとのこと。
- ② 書籍購買サービス部、1月仕入分で配送業者のところで止まっていた分の雑誌が本日納品。検品後仕入集計システムを使用して日販の仕入を確定させる。
- ③ 食堂部は、食堂、フードショップの棚卸しを行った。計数は終了。コンピュータ入力をほぼ終了。
- ④ 事業連合からのボランティア1名の協力を得て、94年12月分の仕訳伝票の入力を行った。伝票の入力は終了。チェックのみまだ。
- ⑤ 日販の仕入集計システムは被災前の入荷分については入力終了。本日入荷分について入力すれば集計は終了する。このシステムの再稼働によって、経理業務のコンピュータ化は被災前の状況に復旧が終了した。

2月2日

- ① 安否の確認状況 書籍購買サービス部4/4人 食堂部15/19人 総務部3/3人 合計22/26人。昨日と変わらず。
- ② 書籍購買サービス部、日販の仕入額確定。
- ③ 食堂部、入試対応の弁当の発注、納品について業者と打ち合わせ。
- ④ 事業連合からのボランティア1名の協力を得て、食堂部営業に向けての準備を始めた。

2月3日

- ① 安否の確認状況 昨日と変わらず。
- ② 本日より、専従者会議を開始。

2月6日～10日

- ① 安否の確認状況 書籍購買サービス部4/4人 食堂部17/19人 総務部3/3人 合計24/26人。けが人は食堂部のパート1名のみ。
- ② 書籍購買サービス部
 - a 2/6より購買部営業開始。営業時間は11:00～13:00の2時間。購買では通常の取扱商品の他に、フードショップで取り扱っている弁当類も併売している。1日の平均

利用額は18,395.4円。営業開始後2日間は、供給は1万円を切っていたが3日目からは2万～3万の利用がある。

- b 1～3年生被災者の教科書販売について、問い合わせ受付日時は2/16～2/23 11:00～14:00
- c 大学が休みの内ということで、学生から合宿免許の申込みや通学制自動車教習所の申込みがあった。

③ 食堂部

水道、ガスが来てから、厨房内の配管チェックを行う。それまでは営業再開はしない。ただし、4月以降、ガスが来ない場合は、最悪プロパンを調達して調理器具に直結し、調理器具を使用できるようにするオプションもある。日調も技術的に問題は無いとの返答をしている。

④ 寮食堂

- a 水道、ガス、人手の確保がネック。
- b 寮食堂の再開は微妙。現状では寮生は実家へ避難しているケースが多く、現時点で再開することは①食事が弁当対応等になる、②未だ余震があるので、必要以上に不安がらせてしまう、等により生活環境の悪化が考えられるので、どうするか現在検討中。
- c このまま営業を止めていた場合、基本運営費はどうなるのか検討する必要がある。

⑤ 総務部

- a 経理業務のコンピュータ化は、被災前の状況に復旧完了。
- b 兵庫県下、大阪府下の共済の加入者に対して、こちらより安否の問い合わせを開始。およそ150名。本日の感触では、家財の被害を受けている学生が多くいる様である（下宿先が東灘近辺の学生が多いので当然といえば当然であるが…）。引き続きTEL掛けは続ける。
- c 印刷業者の業務再開。共済の加入申込書について、貯金局への申請を依頼。その他、全体的な納期は2月下旬を設定している。新歓DMについては連合発注分の封入物について、ほぼすべてのパンフが納品済。
- d 出資金返還は、大学より4年生に発送するDMに相乗りという形で出資金返還申込書を送付する。

IV 危機管理

危機管理

平時においては、各部署が各々の業務を遂行することで大学の組織は回っていくが、今回の震災時のような非常時には既存の枠にとらわれていては対応ができないため、所属部署は言うまでもなく一部の事務では教育職員、事務職員等がお互いに応援しあい、一つの目的に向かって業務を遂行した。困難に直面した際の大学一丸となつての協力のあり方を図らずも今回経験することになったが、この経験を万一の時の対応に生かしていくことが重要であろう。

また、平時の心構えとして施設・設備・行動面において、日頃から職員、学生が災害及び防災等に関する知識と危機管理意識を十分に持っていることが重要である。そのためには下記のような事項について具体的な対応策や方針が関係者のコンセンサスのもとに確立していることが必要と考えられ、今回の災害を機に、不十分なものについては見直しを含め、その解決に取り組んで行きつつある。

(1) 防災知識

- ① 災害及び防災に関する基礎知識
- ② 災害及び防災時に対する職員、学生の役割
- ③ 災害が発生した場合における具体的対策
- ④ 危険物、危険薬品、放射線同位元素等に関する基礎知識とその防災対策

(2) 防災活動

- ① 防災訓練
- ② 施設、設備及び土地並びに危険物の安全対策
- ③ 情報の収集及び伝達方法の整備
- ④ 避難場所の整備
- ⑤ 飲料水、食料品、医薬品等の災害時に必要な物資の調達対策

(3) 安全対策

- ① 危険物の安全保管及び使用方法の点検
- ② 危険物の保管施設の防災対策
- ③ 危険物の在庫管理の徹底
- ④ 危険物の保管施設の表示と周知
- ⑤ 崖崩れ及び建築物の倒壊を予防するための補強措置

(4) 災害対策マニュアルの作成

各部署の実情に則した災害マニュアルを作成し、職員、学生に周知する。

V 關係資料

重要

平成7年1月20日

平成7年度一般入学試験出願者各位

神戸薬科大学
教務部長 津波古 充朝

兵庫県南部地震の被害に伴う平成7年度
入学試験会場の変更について

前略 標記につきまして緊急の連絡を申し上げます。入学試験受験予定者の皆様におかれましては、下記の変更点を充分熟読しご理解頂いた上で入学試験を受験されますよう、お願い申し上げます。

なお、この変更は阪神大震災による交通機関マヒに対応するための処置であります。幸いにも大学は大きな損壊もなく、来年度の講義等につきましては支障なく実施できる見込みであります。が、本学への交通機関が全面的に不通となっており、平成7年度入学試験受験生の皆様のご便宜をはかる目的で緊急の措置として決定いたしました。何卒よろしくご理解をお願い致します。 具 敬

記

1. 入学試験会場の変更

入学試験会場を次の三会場に変更します。出願者の方はもともと受験しやすい試験場を自由に選び、当日試験会場へお越しください。
(受験会場を事前に大学まで連絡して頂く必要はありません。)

- ① 京都薬科大学 (別紙地図1参照)
- ② 河合塾広島校 (別紙地図2参照)
- ③ 神戸薬科大学 (本学)

※本学以東の受験生は出来るだけ①京都薬科大学会場を利用して下さい。なお、本学までの交通機関の回復の見込みはないと考えられます。

※本学以西の受験生は②河合塾広島会場または③本学会場のうち、利用しやすい会場を選んで下さい。しかし、本学までの交通機関の回復の見込みがないと考えられますので、出来るだけ②河合塾広島会場での受験をお勧めします。

2. 入学試験時間について

入学試験の開始時間は、入試要項記載の通り行います。しかし、各試験会場の受験生集合状況を鑑み、試験開始時間を遅らせる場合があります。よって試験終了時間が延長されることも考えられますので、終了後の帰宅の予定には十分な余裕をお持ち下さい。

3. 集合時間について

当日試験会場は混雑が予想されますので、早めに集合して下さい。

4. 試験会場下見、身体不自由者検査について

試験前日(2月3日)に予定しておりました「試験場公開」、「身体不自由者検査」は行いません。

5. 合格発表について

合格発表の日時については入試要項記載の通り行います。合格発表は学内掲示および電子郵便で通知します。

以上

同封資料：「京都薬科大学地図」、「河合塾広島校地図」各1枚

4 年次生の皆さんへ

1995. 1. 24

教務部長

津波古 充朝

2/28 発送

4 年次生の皆さんの中には、この度の阪神大震災で大きな被害を受けられた方もおられることと思います。お見舞い申し上げます。在学生および教職員とも現在のところ、無事とのことであり、不幸中の幸いであると思います。4 年次生の皆さん方には試験（追再試験、最終試験）や卒業、国家試験を目前に控え、不安のことと存じます。大学としても全力を尽くして対応に当たっておりますので、ご安心下さい。幸いにして大学の方の建物や講義室には大きな被害はなく、講義を開始できる状態にあります。現在 JR、阪急、阪神電車とも不通のため、今直ちに 4 年次生の試験（4 年次後期追再試験および最終試験）、国家試験の補講を実施することは不可能と考えられます。そこで大学として、以下の緊急処置をとることに決定いたしましたので、お知らせいたします。

(a)大阪薬業年金会館(06-768-4451)
〒542 大阪市中央区谷町 6 丁目 5 - 4

2月13日 (月)

24日 (金)

27日 (月)

3月 1日 (水)

別紙日程表参照

(b)姫路商工会議所(0792-23-6551)

〒670 姫路市下寺町43

2月20日 (月)

24日 (金)

27日 (月)

3月 1日 (水)

別紙日程表参照

なお模擬試験は中止いたします。

1 試験

4 年次後期追再試験および最終試験はすべてレポートによる試験とする。

(a)レポート題目：各教科の追再試験のレポート題目は別紙 1、最終試験のレポート題目は別紙 2 に示す。

(b)レポートはすべての科目について、400 字詰原稿用紙 3 枚以内とする。追再試験受験者は追再試験のレポートと最終試験のレポートの 2 種類を必ず提出すること。

(c)提出メ'切日：追再試験および最終試験とも 2 月 13 日 (月) 必着

(d)提出先：各教科担当者の自宅宛、速達簡易書留で直接送付すること

(e)受験するすべての科目について、所定の期日までにレポートを提出すること。

(f)受験届の手続は不要です。受験料は免除します。

2 国家試験の補講

国家試験の補講は日程を短縮して、次の 2 会場で実施いたします。どちらか参加しやすい会場で受講して下さい。

3 特別実習 (ゼミ) 発表会

1 月 31 日に予定していましたが特別実習発表会は中止いたします。

4 卒業式

予定通り実施します。

国家試験まであと 2 カ月余りです。気を抜くことのないよう全力で頑張ってください。国試の勉強のことが、特にご心配のことと思いますが、これまで各教科担当の先生方から受けたアドバイスを参考にし、頑張ってください。もし困ったことがあったら、担任または担当の先生に直接指導を受けて下さい。

以上

1995.2

1～3年次生の皆さんへ

2/3 榮丞

教務部長
津波古 充朝

1995年 2月 日

研究室 各位；

図書館長
二宮 一彌

学生の皆さんの中には、この度の阪神大震災で大きな被害を受けた方もおられることと思います。お見舞い申し上げます。
 在学生および教職員とも現在のところ、無事とのことであり、不幸中の幸いであると思います。1～3年次生の皆さんには後期の定期試験や今後のことについて、ご心配のことと存じますが、大学としても全力を尽くして対応に当たっておりますので、ご安心下さい。幸いにして大学の方の建物や講義室には大きな被害もなく、通常通りの講義、実習ができるものと考えております。しかしながら、現在JR、阪急、阪神電車なども不通のため、今直ちに後期の定期試験を実施することは不可能と考えられます。そこで大学として、以下の緊急処置をとることに決定いたしましたので、お知らせいたします。

1 講義

平成6年の後期の講義は行わない。

2 試験

1～3年次生の後期定期試験およびその追再試験はすべてレポートによる試験とする。

(a)レポート題目：各教科の定期試験のレポート題目は別紙1、追再試験のレポート題目は別紙2に示す。

(b)レポートはすべての科目について、400字詰原稿用紙3枚以内とする。各人も定期試験のレポートと追再試験のレポートの2種類を必ず提出すること。

(c)提出メロ切日：3月4日

(d)提出先：各教科担当者の自宅宛、速達簡易書留で直接送付すること

(e)受験するすべての科目について、所定の期日までにレポートを提出すること。

なお不明な点や困ったことがあったら、組担任または教科担当の先生に直接質問して下さい。

以上

先の阪神・淡路大震災によって図書館も内部の書架を中心に破損・転覆等大変な被害を被りました。破壊された書架は3階書庫（製本雑誌）の全部と新着雑誌の書架の多きに及びました。2月14日日本フアイリング社から調査に來られました。修繕乃至取替えを依頼しましたが、この種の被害は関西一円にわたっていますため同社としても予定が立て難いようです。 私どもは新学期に間に合えばと期待しております。

本図書館は、当面下記の要領で閉館致しますが、多大のご不便を掛けますことは目に見えており、何卒利用される皆様のご理解とご寛容をお願いする次第です。

本年度の閉館予定； 2月20日（月）から
 （月一金；9:00--17:00 土；9:00--13:00）

＊ 研究室関係者には特に文献調査のための利用が必要ですが、書庫の現状では事実上ご利用が無理なので、学情センターを通じて相互利用による文献複写依頼サービスが主になります。

＊ 関西の各大学の図書館から受け入れ協力のご好意が寄せられていますので、直接それらの図書館に出向いて利用させて頂くのが良いかと存じます。

そのときには別紙のような紹介状をお持ちになれば良いかと存じ、図書館カウンターに用意しておきます。

(別紙 紹介状の掲載は略)

平成7年1月23日

神戸薬科大学 災害復旧計画

☆災害復旧関係対策係――事務局施設課 (☎7503)

☆現在の状況把握

- ・危険箇所の早期復旧(建物破損による落下物)
- ・二次災害の予防(電気・ガス設備破損による火災)
- ・試験ビン破損による爆発・有毒ガス及び出火の対応

☆余震の対策

- ・早急に完全復旧をせず、万一の余震に対して対処出来る設備に改良する。

★これからの行動

- (1)危険箇所を災害復旧関係対策係に連絡する。
- (2)爆発・有毒ガス及び出火の恐れがある試験ビンは、箱に入れ危険物倉庫に保管する。
- (3)その他の試験及びガラス類は、箱に入れ実習室等広い場所の床に置く。
- (4)実験台上の機器は、実習室等広い場所の床に置く。
- (5)上下に別れている保管庫は、上下とも床に置く。
- (6)棚等に置いていた本は、箱に入れ床に置く。

★現在の復旧状況

電気は、復旧されていますが、断線が考えられます、安全確認後使用して下さい。
ガスと水道は、まだ復旧されていません。

※応援体制

事務局より、各部屋の復旧に対して応援隊を出します。

※第1次応援隊行動計画

J1155→J1145→J135→J125→J115→J235→J225

J135→J125→J325→J535

臨床化学→機器分析学→薬品化学→薬品製造学→一般化学→生薬化学→薬化学II

→薬化学I→薬品分析学→製剤学→薬理学→生化学→微生物化学

→生薬学→薬理学→放射薬品学→NMR→質量分析

※応援内容

破損した試験ビン及びガラス製品等の清掃

※第2次応援隊行動計画

J1155→J1145→J135→J125→J115→J235→J225

J135→J325→J535

臨床化学→機器分析学→薬品化学→薬品製造学→一般化学→生薬化学→薬化学II

→薬化学I→薬品分析学→製剤学→薬理学→生化学→微生物化学

→生薬学→薬理学→放射薬品学→NMR→質量分析→中央動物実験室

→RI動物実験室→図書館→教養課程(一般教養)→教務部→就職部→学生部

→薬用植物園→学生寮

※応援内容

転倒した機器及び保管庫等の整頓

上記作業終了後、耐震対策作業に移って行きます。

平成7年2月13日

神戸薬科大学 災害復旧計画 (第二段階)

学 長

☆災害復旧関係対策係――事務局施設課 (☎7503)

★現在の復旧状況

電気は復旧されていますが、安全確認後使用して下さい。

水道は殆ど復旧されていますが、漏れがあれば至急連絡下さい。

ガスとボイラーはまだ復旧されていません。

★これからの行動

(1)試験棚・書庫・保管庫・機器等、転倒の恐れのある物は、転倒防止を行う。

※作業体制

施設課と業者で、各部屋の復旧に行きます。

※作業計画

1号館2階→1号館1階→1号館3階→1号館4階→1号館5階→

2号館1階→2号館2階→2号館3階→3号館1階→3号館2階→

3号館3階→4号館1階→4号館2階→4号館5階→4号館6階→

5号館→学生会館→談話室→食堂→学生寮→さきょう会館

あとがき

第三期年史編集委員会が発足（H8.1.11）してから間もなく、学長から「阪神・淡路大震災の記録を残す作業をするように」と委嘱を受けた。震災後の4月には「ききょう通信 第98号」で“大地震 兵庫県南部を直撃！”と題して被災職員の体験記、岡本寮男子学生の奮闘記が掲載され、号外〈阪神大地震特集！〉では同窓会員の消息、教務部・学生部・図書館・事務局からのニュースとお知らせが掲載された。また、12月には本学同窓会会報が発行され、会員の被災体験記などが掲載されている。

わが委員会では、次第に薄れていく当時の記憶を呼び覚まし、年史編集の資料として全学から、被災の記録・後世に残す体験・教訓を集めて残すべく活動した。

平成9年度には、これらの資料を編集・発行するようにと予算がついたので、急いで整理、編集して本書ができあがった。本書に掲載できたのは集まった膨大な資料の一部にすぎないが、まとまっていると自負している。残りの大部分は年史の資料として保存させていただく。

（1997年10月 文責：堀坂 和敬）

第三期年史編集委員会	堀坂 和 敬（委員長）
	内 藤 猛 章
	田ヶ原 清
	岩 佐 衣 子
	小 林 啓 治
資料室開設準備室	前 中 仁

阪神・淡路大震災の記録
神戸薬科大学

発行日 1997年11月7日
編集 第三期年史編集委員会
発行 学校法人 神戸薬科大学
〒658 神戸市東灘区本山北町4-19-1
TEL 078-453-0031
印刷 株式会社 六甲出版
〒657 神戸市灘区岩屋北町3-3-18
TEL 078-871-1234

